

特集

ことばと空間



表紙：松浦寿夫、『この夏とその他の夏』、2011年、12×18cm（ポリエステルボード、紙、アクリル絵具）
裏表紙：松浦寿夫、『この夏とその他の夏』、2011年、12×18cm（ポリエステルボード、紙、アクリル絵具）

総合文化研究

vol. 14-15 2010-2011

Trans-Cultural Studies
東京外国語大学総合文化研究所

一昨年四月に、本学に本格的な多分野交流施設として、アゴラ・グローバルが竣工し、その中心施設であるプロメテウス・ホールが様々な用途で使われるようになった。全体の施設名に含まれる「アゴラ」は、古代ギリシャにおいて民会が開かれ、商品の売買がおこなわれる市場でもあった広場を指し、劇場名の「プロメテウス」はいうまでもなく、ゼウスの元から火を盗み出し人間に文明の源をもたらしたギリシャ神話中の神の名である。本学のアゴラ・グローバル、プロメテウス・ホールにおいても教員・学生が集い、知と文化の交流がおこなわれる広場として機能していつてもらいたいと願っている。

本学では専攻語として学ばれている二十六言語による「語劇」が大学祭の期間に催され、生きた外国語学習の場としての意味をもつと同時に、地域の人々も多く観覧し、それぞれの言語とそれが話されている国々の文化や歴史を知ってもらう貴重な機会となっている。これまでは大教室に臨時にステージを設置し、そこで上演されていたが、一昨年からはプロメテウス・ホールで上演されるようになった。プロメテウス・ホールは五五〇名を収容し、音響・照明の設備も整った本格的な劇場であり、それだけに語劇を上演する学生も、外国語学習の発表の場であるだけでなく「劇」を見せる機会として、これまでよりも力を入れて練習し、舞台上に立っているように見える。

プロメテウス・ホールはもちろん劇の上演に限らず、シンポジウム・講演会の開催や、通常の授業にも使われ、本学の文化的プレゼンテーションの水準向上に大いに役立っている。本研究所でも、一昨年は「語りと劇による『源氏物語』」、昨年は「子規 六尺の天地」という二つの劇を上演し、多くの一般市民を含む観客を魅了した。演奏家を招いてコンサートを催すこともあり、文化研究を軸とする本研究所にとっては、活動を後押しする施設の登場といえるだろう。

ところでここで「一昨年」という形でホールの紹介を記しているのは、昨年「総合文化研究」の刊行が投稿論文の不足によって成らなかったためでもある。そのことは大いに反省しなくてはならず、今後は研究論文の発表という研究者の基本を押さえながら、多角的な活動を展開していきたいと考えている。

ことばと空間

総合文化研究 14 - 15 合併号
目次

2	巻頭言		
6	エミリ・ディキンソンと不在のゴシシズム 113 —— <i>I died for beauty</i> における詩と死の時空間、非人称の詩学とロマンティシズム 加藤雄二		ジリアン・ピア著／鈴木聡訳 『未知へのフィールドワーク——ダーウィン以後の文化と科学』 加藤雄二
17	記憶の都市メキシコ 地下恐怖 柳原孝敦	116	山口裕之 編訳 『ベンヤミン・アンソロジー』 西岡あかね
32	語りの文化差に関する検討 ——複数の予備的調査結果を踏まえて 上原泉	118	ロベルト・ボラーニョ著／柳原孝敦、松本健二訳 『野生の探偵たち』(上)(下) 高際裕哉
55	新民叢報第二十三号にみる嘉納治五郎の教育思想 東憲一	121	ギヨーム・デュプラ著／博多かおる訳 『地球のかたちを哲学する』 桑田光平
64	平安初期における日本紀講書 ——中国三史の講書との関わりから 顧姍姍	124	村尾誠一著 『『藤原定家』笠間書院コレクション日本歌人撰011』 黄少光
81	プラトーフ 『土台穴』 における動物と人間のあいだ 古川哲	127	柴田勝二著 『村上春樹と夏目漱石——二人の国民作家が描いた<日本>』 朴翰彬
91	物語と劇の間で ——『源氏物語』を舞台化して 柴田勝二	129	アントニオ・タブッキ著／和田忠彦、花本知子訳 『他人まかせの自伝——あとづけの詩学』 石井沙和
寄稿		132	プラーブダー・ユン著／宇戸清治訳 『パンダ』 岡田知子
99	正岡子規の恋歌ノート 村尾誠一		
新刊紹介			
110	ロラン・バルト著／桑田光平訳 『ロラン・バルト 中国旅行ノート』 アトピック・サイト 松浦寿夫	--	総合文化研究所 2010-2011 年度活動報告 編集後記

Featured Articles

Trans-Cultural Studies vol. 14 - 15

Contents

Language and Space

- 2 Prefatory Remarks
- 6 Emily Dickinson and the Gothicism of Absence: KATO Yuji
Her Spacial and Temporal Poetics of Death and Impersonality in "*I Died for Beauty*"
- 17 Mexico in Its Memories: A Subterranean Terror YANAGIHARA Takaatsu
- 32 Discussion on cultural differences in narrative: a report of several preliminary studies UEHARA Izumi
- 55 Kano Jigoro's Educational Thought Reflected in Xin Min Cong Bao No. 23 HIGASHI Kenichi
- 64 Interpretation of NIHONGI in the Early Heian Period : GU Shanshan
Focusing on the Relationship with the Interpretations of the Official Chinese Historical Works
- 81 The space between animals and human-beings in Andrei Platonov's *The Foundation Pit* FURUKAWA Akira
- 91 Between Story and Drama SHIBATA Shoji

Contributed Article

- 99 A Note toward Love Poems of Masaoka Shiki MURAO Seiichi

Reviews

- 110 Roland BARTHES Trans. by KUWADA Kohei
Carnets du voyage en Chine Atopic Site MATSUURA Hisao
- 113 Gillian BEER Trans. by SUZUKI Akira
Open Fields: Science in Cultural Encounters KATO Yuji
- 115 Walter BENJAMIN Trans.&Ed. YAMAGUCHI Hiroyuki
Ausgewählte Schriften NISHIOKA Akane
- 118 Roberto BOLAÑO Trans. by YANAGIHARA Takaatsu, MATSUMOTO Kenji
Los detectives salvages TAKAGIWA Yuya
- 121 Guillaume DUPRAT Trans. by HAKATA Kaoru
Le Livre des terres imaginées KUWADA Kohei
- 124 MURAO Seiichi
Fujiwara Teika HUANG Shaoguang
- 127 SHIBATA Shoji
Murakami Haruki and Mishima Yukio—'Japan' described by two national authors PARK Han bin
- 129 Antonio TABUCCHI Trans. by WADA Tadahiko, HANAMOTO Tomoko
Autobiografie altrui. Poetiche a posteriori ISHII Sawa
- 132 Prabda YOON Trans. by UDO Seiji
Panda OKADA Tomoko
- Events
Editorial Note

特集 / Featured Articles

ことばと空間

/ Language and Space



エミリー・デイキンソンと不在のゴシックズム——*I died for beauty*における詩と死の時空間、非人称の詩学とロマンティシズム

加藤雄二

1. 「アメリカン・ルネッサンス」と存在の神話

アメリカ十九世紀ロマン派の詩一般が、強く存在論的な詩学を提唱し実践したものであると述べても、それほど正確さを欠いているとはいえないだろう。ラルフ・ウォルドー・エマソンによる詩論、ヘンリー・デイヴィッド・ソローによる *Walden* などの著作、ウォルト・ホイットマンの *Leaves of Grass* など、ニューイングランドの土地としての固有性や、外界を眼差す「目」(“eye”)と眼差しの対象となる「自然」(“nature”)がともに存在し、知覚作用や芸術創作をポジティブにおこなう空間が現前することを前提とした作品群であったといつてよいだろうし、アメリカ的な詩学を確立したホイットマンの *Leaves of Grass* は、語り手として想定された「私」(“myself”)が、空間および時間の通常の制約を超えて、アメリカ全土を旅し、眼差しや語りの対象としてのアメリカ大陸やその過去、未来を記述し、それらを魔法によるかのようにして現前させる、強く存在論的な詩学であったといつてよいだろう¹。

十九世紀の作品にかぎらず、アメリカ文学一般において、アメリカ大陸の自然やそこに構築された人工的な空間の環境世界としてのありかたが自明の前提事項として語られがちであ

ることをあらためて指摘しておいてもよいかも知れない。とくに十九世紀半ばのトランセンデンタリストたちによるロマンティシズムの提唱や、それらと同時代のハーマン・メルヴィルやナサニエル・ホーソンらによる小説作品が、捕鯨船などの船の内部の空間や広大な海の広がり、ニューイングランド植民地時代の歴史的空間などを、あらかじめ存在した、あるいは現実に存在する場所として前提していたことは興味深い²。

エマソンが *Nature* 冒頭で述べるように、トランセンデンタリズムの主張のひとつの大きな眼目となるのは、「わたくしたち」(“our”, “we”)と恣意的に名指されるなものたちかの、集団による過去・歴史との関係の取り結びの再考だった³。それが十九世紀前半の国家主義的な文芸復興運動としてとらえられるのだとすれば、きわめて曖昧なたちで成立していたらしい初期アメリカ合衆国とその文化の固有性は、一部の詩作品をのぞけば文芸創作そのものに携わることなく、国家的プロジェクトにふさわしくハーバード大学で行われた講演“*The American Scholar*”をはじめとする講演やエッセイによって文芸論を展開したエマソンやその追従者たちによって、現実に存在するなにかというよりも先験的に存在するはずの諸条件として想定されたものだったのではなかったか。

2. エミリー・ディキンソンとロマンティシズムの詩学

本稿の主題となるエミリー・ディキンソンの詩群は、ラルフ・ウォルドー・エマソンがすでに代表的な詩論を発表してロマン派の詩学をアメリカの文化的土壌に移入し、エマソンやローが他の超絶主義者たちとともにアメリカ合衆国における最初の文化的運動を興した場所であるマサチューセッツ州コンコードからそれほど離れていないアマーストで、密かに書き継がれた。それらの詩は、ほんの少数を除いて、現在では「ファシクル」(“fascicles”)とよばれるようになった原稿の束としてディキンソンの死後まで未発表のままに保管され、死後ディキンソンの親族によつて不完全な形で編集され、出版された。ディキンソンの詩が本格的に評価されはじめるのは、二十世紀モダニズムの時代、「イマジスト」の詩人たちがディキンソンによる断片化された短詩形とその硬質な言語の質に注目するにいたつてからであり、ディキンソンが日記のようにして書き継いだ詩作品の総体がようやく一般読者に知られるようになるまでには、一九五六年のジョンソンによる全詩集の出版、さらに一九九八年のフランクリンによる詳細なテクスト研究を踏まえた全詩集の出版を待たなければならなかった。あまりにもよく知られた、ディキンソンにまつわる神話である⁴。

こうした経緯や、ディキンソンという詩人が現代アメリカ文化のなかで付与されるにいたつた「アマーストの隠者」などのパーソナルかつポピュラーなイメージはさておき、ディキンソンの詩が上記のような経緯で現在にいたるまで読み継がれ、お

もにモダニズム以降の時代のアメリカ作家や詩人に大きな影響を与えてきたことは、上記のようなディキンソンの詩の現代的な特質やグラフィックなといつてもよいような視覚的効果の使用法などが、現在の詩人たちにすら影響を与え、たとえばアメリカ現代詩を代表する詩人のひとりであるスーザン・ハウが、創作においてディキンソンを意識しているというだけでなく、*My Emily Dickinson* (Berkeley: North Atlantic Books, 1995) のような、現代における詩人としての創作活動とディキンソンとを直接に結びつける試みとも思われる研究書を発表するなどしていることから理解されるだろう⁵。とくに、チャールズ・オルソンやビート派の詩人など、エマソン、ホイットマンの流れを汲むアメリカ的詩人たちにつぐ、*LIANGUAGUAGES* など以降の現代詩人たちとディキンソンとの類縁性は際立っている。メルヴィルやポーなどと並んで、エミリー・ディキンソンの作品とその解釈は、アメリカ文学や文化研究に向かう誰にとつても、アメリカ的特質を議論する際のきわめて危険な試金石となっているのだといつてもよいだろう。

ホイットマンやエマソンと同時代のニューイングランドで創作した詩人として、ディキンソンが当時のロマンティックな風潮やヨーロッパ中心主義的指向性を共有していたことは、詩作品における王権や非アメリカ的要素への頻繁な言及や、トランセンデンタリズムのトレードマークともいべき円環のイメージやロマンティックな「自然」の有機的全体性に呼応するイメージの多用、時の経過、進行と自我との葛藤を思わせる語りの頻出などによつて理解されうる⁶。しかしながら、当時主流のロマンティシズムの主唱者たちが、ある意味で無意識的に不在

としての存在というパラドクスを言説の基調として文化活動や創作を行ったのにたいして、デイキンソンはその時代的パラダイムのパラドクスそのものを生き、創作したのかも知れない。奇しくも、デイキンソンが詩人および個人として十九世紀アメリカの文芸サークルや社会から積極的に不在であろうとしたことと呼応するかのようにして、デイキンソンの詩における語り、イメジ、詩形の独自性は、存在の強さやポジティヴさではなく、トランセンデンタリストたちが看過した、上で述べたロマンティズムのパラドクスにおいてむしろより根源的であると考えられる不在そのものの根源性を強く主張しているように思われるのだ。

3. テネシー・ウィリアムズの芸術観とデイキンソンの詩学

現在ではあまり知られなくなっているかもしれない、ひとつのデイキンソン論がある。アメリカ二十世紀半ばの劇作家テネシー・ウィリアムズが、おそらくはデイキンソンにたいするある種の羨望の念をこめてか、*Cat on a Hot Tin Roof*の序文“Person to Person”において、墓の空間を舞台設定としたデイキンソンの詩 *I died for beauty* を引用している。

“The discretion of social conversation, even among friends, is exceeded only by the discretion of ‘the deep six,’ that grave wherein nothing is mentioned at all. Emily Dickinson, that lyrical spinster of Amherst, Massachusetts, who wore a strict and savage heart on a

taffeta sleeve, commented wryly on that kind of posthumous discourse among friends in these lines: “I died for beauty, but was scarce / Adjusted in the tomb, / When one who died for truth was lain / In an adjoining room. / He questioned softly why I failed? / ‘For beauty,’ I replied. / ‘And I for truth,—the two are one, / We brethren are,’ he said. / And so, as kinsmen met a night, / We talked between the rooms, / Until the moss had reached our lips / And covered up our names.”⁷

ウィリアムズがこの序文で提示している文学的前提は、そもそも“Person to Person”というタイトルに表われている、自己表現としての文芸創作といういくぶん古風ともいえるものである。ウィリアムズが表現者に特徴的な例として挙げているのは、自分の姿に周囲の注意を向けようとやっきになる南部の少女であり、その少女の“Look at me!”という叫びである。自己表現の貴重さを強調するウィリアムズの文学性と序文全体の叙情性が現代における典型的にロマンティック態度にもとづいたものであることはいうまでもないが、もっとも注目すべき序文の特徴は、ウィリアムズがデイキンソンを引用することによって、生と死という二項対立を同時に導入していることである。さらに、序文最後のパラグラフにおいてウィリアムズは、生の領域に属する自分と死の領域にあるデイキンソンを明確に差異化することで、デイキンソンを他なる死と決定的に結びつけ、葬り去る。ウィリアムズは、死後の世界での真実と美の一致を墓の内部の空間での対話をとおして歌ったデイキンソンの *I died for beauty* を、ロマンティックな自己表現の究極的なかたちとして引用しながらも、それと同時にデイキンソンを

みずからの創作の場である「生」の領域と切り離し、他者化していることがわかる。

ここでさらに問題となるのは、あくまでの存在としての主体による叙情的表現を生に属するものとするウィリアムズと、引用されたデイキンソンの詩そのものとの深い齟齬である。個人による自己表現としての文学という考えかたは、そもそも表現する主体の絶対的で強力な存在を前提としているために、カント哲学の傍流であるアメリカのトランセンデンタリズムやその末流や西欧一般における二十世紀前半までの存在論や存在論にもとづいた思想・哲学がそうであつたように、不在にたいして存在を特権化し、不在を他者化する傾向を持つていた。いうまでもなく、デカルト主義的な「コギト」にもとづいた存在論は、思考する主体の知覚の対象を主体の存在の下位に置き、主体にとつての現れとして記述することによつて、客体を他者、不在として主体の下位に位置づけるヒエラルキーを自然化するものだった。

たとえば、そうした議論の代表的な例として、現象学的、精神分析的な観点から文学における空間を論じたガストン・バシユラールによるよく知られた著作『空間の詩学』などをあげてみてもよいかも知れない。家のイメージなどに代表される詩人や作家の想像力に固有の空間を文学にとつて根源的なものとし、空間の内部性と外部性との隔たりと相互関係とを文学論として提示するバシユラールの議論は、現代の視点からはいくぶん奇妙に思われるとしても、存在論的な詩学にとつておそらく必然的な帰結にたどり着いている。十九世紀主流のアメリカ的詩学やその末流のひとつであるウィリアムズらの文学観は、そ

れぞれが属する文化がことなつているとはいえ、バシユラールが提示する内部と外部、存在と不在、肯定と否定との二重構造の一方を特権化することによつて成り立っている。バシユラールは、『空間の詩学』末尾において、存在論的、現象学的、精神分析的文学論の帰結をおそらくある種の憂慮とともに記述し、ロマン主義の詩学一般の問題点を鋭く指摘している。

外部と内部は分割の弁証法を形成し、そしてこの弁証法の明白な幾何学は、もしわれわれが暗喩の領域でこれを作用させると、たちまちわれわれを盲いさせる。それは一切を決定する肯定と否定の弁証法の鋭い明晰性をもつ。われわれは不注意にも、これを、一切の肯定的なものと否定的なものの思想を支配するイメジの基礎としている。たがいにかさなりあい、あるいはたがいに相いれない円をえがくと、論理学者たちの規則はみなたちまち明瞭になる。哲学者が内部と外部とをいうときには、存在と非存在とをかんがえる。したがつてもつとも深い形而上学は暗黙の幾何学、欲しよう⁸と欲しまいと、思想を空間化する幾何学に根ざしている。

デイキンソンの詩 *I died for beauty* においては、そうしたロマンティックな内部空間によつて、存在の始まりを生成する子宮 (“womb”) と生と存在論の領域において不在であり外部の不在の領域として想定される死や墳墓 (“tomb”) がともに含意されている。死が始まりとなる *I died for beauty* においては、肯定と否定、存在と非存在、内部と外部とは、不在としての語りとその語りの場である墓地の内部の空間によつて同時に隠喩

化されている。デイキンソンは、「アメリカン・ルネッサンス」とロマンティズム一般のパラドクスを、死後の墓の“between the spaces”での対話という、存在と不在とを併せ持った空間において隠喩化し、二十世紀にいたるまでのロマン派の詩学一般や十九世紀アメリカ・ロマン派のジレンマをそのものとして提示することおそらく成功している。

ウィリアムズの実存的に限界があることはいままでもないとしても、*Cat on a Hot Tin Roof*序文で提示されているのは、二十世紀半ばの標準的な芸術観であるといつていいだろう。それが文芸創作や詩的感性の主体を特権化し、女性を他者として表象することを自然な前提としていることの意味あいには、文学的主体としての女性にたいする差別意識が言うまでもなく含まれている。しかし、ウィリアムズが「アマーストの叙情的なあの老嬢」(“that lyrical spinster of Amherst”)とよぶ詩人は、そうした制約からも確実に逃れ出てゆく⁹。

4. デイキンソンにおける主体と声の消滅

実際のところ、ウィリアムズが *I died for beauty* における「死後の対話」(“Posthumous discourse”)とよぶものは、ウィリアムズが前提するような生のなかに現前する自我による、アイデンティティーの個別性とユニークな声の特徴とする対話ではない¹⁰。デイキンソンによる芸術家「個人」(“person”)の定義は、おそらくエマソンやホイットマン、ウィリアムズらが提示する定義とは非常に異なったものである。*I died for beauty* において、

対話は「何も語られることがないあの墓」(“that grave wherein nothing is mentioned at all”)のなかで続けられる。デイキンソンの作品における沈黙とは絶対的な沈黙であり、ここではウィリアムズが例に挙げていいる少女が声をあげ叫ぶことは許されていない。声の音としての実質を文学的表現とする立場は、おそらく必然的に声と沈黙とを階層的に二項対立として措置してしまふことになるだろう。そうであるがゆえに、ウィリアムズが *I died for beauty* を引用するコンテキストにおいては、死後の絶対的な沈黙と静寂のなかで続く「死後の対話」は、生や存在としての声と身体性との領域とは階層をともなつて差異化される他なるものとならざるを得ない。

ウィリアムズの序文におけるデイキンソンの詩の提示は、芸術創作そのものの普遍性への願望を表しているというよりは、「Look at me!」と叫ぶ少女のイメージが提示する女性芸術家による直接的な自己表現への羨望とあいまって、ジョーン・ドブソンらが指摘するように、現実には女性による個人的表現の可能性を他としての死と沈黙の領域に追いやる男性中心のひとつの戦略とも思われてくる¹¹。

I died for beauty において沈黙や不在が絶対的であることの意味あいは、声に引用符がつけられた。具体的な発話であるはずの声が、いわば沈黙に囲まれる形式で提示されていることだけに特徴的に表われているというだけではない。文学における「声」の概念は、それを先駆けとして提示したミハイル・バフチンによる小説論においては、キャラクターの独立性を前提としていた。しかし、文学テクストにはそもそも声は現前しておらず、キャラクターの独自性や身体としての個別性も声やテク

ストそのものに現前していないことは、ロラン・バルトらの指摘を待つまでもなくあきらかである。文学における声の主体や語りの主体とは、実際のところテクストを構成する文字による指示対象の現前を、形而上学として前提しないかぎり、きわめて曖昧かつ不可能な概念であることはいうまでもない。

I died for beauty において、コミュニケーションは個別化された「個人から個人」との対話として思考されているのではない。詩の最後の行では、美と真実のために死んだ無名の二人による対話は、「苔がわたくしたちの唇と名前を隠すまで」(“until the moss had covered up our lips and our names”) 続くのだとされており、墓の空間のなかで対話する二人の身体は朽ちてゆきもすることが想像され、個人としての人間やその身体、名前に含意されるアイデンティティーなどがむしろ消失するなかで沈黙の対話は成立している。*I died for beauty* が提示する詩学は、ホイットマンやエマソン、現代のロマンティックな詩人たちのものはことなり、語る主体を欠いた、沈黙の言語のなかに消失してゆく無名の個人による詩学なのである。

5. エミリー・ディキンソンと“impersonality”

主体の現前と主体による自己表現を文学的表現の根源とするロマンティックな文化的土壌において、絶対的な沈黙を発話の基盤とし、芸術創作の主体を消去するディキンソンの詩学は、きわめてラディカルであるが、シャロン・キャメロンが *Impersonality* で詳細に述べているように、ハーマン・メルヴィ

ルや J. S. エリオットなどを含んだ十九世紀からモダニズムにいたる時代の作家や詩人たちの作品において、主流とされるロマンティックな作家や詩人たちの「個人」を基盤とした文学とはことなつた、“impersonal”な詩学がじつは支配的だと指摘することもできる。また、本論でエマソンやバシュユールを例にとつて繰り返し指摘してきた、存在と不在とを階層構造的に二項対立化する存在の詩学と、不在を絶対的な基盤とする詩学は、十九世紀の詩や小説作品からアメリカ現代詩、現代文学にいたるまで、つねに併存してきたふたつの異なつた文学のモードであるということもできるだろう。一九七〇年代に優れた先進的なディキンソン論 *Lyric Time: Dickinson and the Limits of Genre* (Baltimore: The Johns Hopkins U. P., 1979) を発表しているキャメロンによれば、「person」という語は、ステータス(物や動物と区別された合理的存在のこと)を与えるが、何ら物質的なものを前提としてはいない[“the word person confers status (designating a rational being in distinction to a thing or an animal),” but “it does not…… presume anything of substance”]。主流のアメリカ・ロマン派やウイリアムズなどの実存主義的現代モダニストらの前提とはことなり、「芸術家を定義づける“personality”の消滅」によつて基礎づけられる文学や芸術表現が、ディキンソンによつて提示されている¹³。

ディキンソンに親しんだ読者であれば、*I died for beauty* 以外にも、多くのディキンソンの詩が死者の観点から語られていることを了解しているはずである。たとえば、やはりよく知られている“I heard a fly buzz when I died”は、語り手がすでに死んで、身体が解体しつつある時の進行のなかで語りだされている

し、南北戦争などの歴史にコメントする、つまり歴史表象の可能性にかかわる詩においても、デイキンソンは死者の視点を多用し、歴史を現実の生とされる領域において表象することを拒む。デイキンソンの詩において、声や身体性や時の進行、歴史などは注意深く存在や生の領域から除外され、死やそれがもたらす無時間的な領域における無の絶対性の一部として、きわめて冷静に脱構築される。それによって詩の言語や言語が提示する無としてのなにかは、十九世紀半ばに一般的だったロマンティックなイメージや自然観、時間観、歴史観やそれらにかかわる同時代的諸言説を反復しながらも、それが提示する現実的な磁場から半ば解き放たれ、より制限のない、自由な表現を可能にする。テネシー・ウィリアムズは芸術家個人の限界からの解放への願望を序文で強調しているのだが、“person”としての芸術家に必然的につきまとうそうした限界は、実在とされる個人の限界の外部である、“*I died for beauty*”の墓の不在のスペースの絶対的沈黙と、その沈黙の一部としての語りによって解き放たれる。ドブソンも指摘するように、デイキンソンはみずからの詩の語り手について「それはわたくしではなく、ひとりの仮想の人物のことなのです」(“it does not mean me—but a supposed person”)と述べており、語り手は詩人本人ではなく、詩によってアイデンティティーを変化させる、つねに仮想の誰かなのである¹⁴。

I died for beauty はまた、それが反復しているキーツの“*Grecian Urn*”とむいどなっている。*I died for beauty* と“*Grecian Urn*”を比較すれば、語りの方向性が正反対になっていることが観察されるはずである。

Thou still unravish'd bride of quietness,
Thou foster-child of silence and slow time,
Sylvan historian, who canst thus express
A flowery tale more sweetly than our rhyme:

.....

Thou, silent form, dost tease us out of thought
As doth eternity: Cold
Pastoral! When old age shall this generation waste,
Thou shalt remain, in midst of other woe
Than ours, a friend to man, to whom thou say'st,
"Beauty is truth, truth beauty," - that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.¹⁵

詩冒頭でのギリシヤの壺は、“Thou still unravish'd bride of quietness, Thou foster-child of silence and slow time”と沈黙によって特徴づけられ、詩のナレーターによってそのアイデンティティーを代弁される「もの」である。しかし、詩の末尾で、“Beauty is truth, truth beauty”というある種のモラルを、長い時の流れを経て存在してきた普遍的美的対象としてのギリシヤの壺そのものが発話し述べる結末では、“*I died for beauty*”の結末とは逆に、壺は語り手となり、“person”としてのアイデンティティーが確立され、物質的なものに声を与えられる。真実と美との一致は、おそらく物質的なものと発話との一致でもある。キーツもまた「夢」と「真実」の二項対立的な要素に深い関心を持っていたことが知られており、ある書簡において想像力の真証性 (“the authenticity of imagination”) を定義し、「想像力は、目覚めて

それが真実だと気づいたアダムの夢にたとえられるかもしれない」(“Imagination may be compared to Adam’s dream – he awoke and found it truth.”)と述べている¹⁶。したがって、キーツが生や歴史や存在をそれ自体と一致した単純にひとつの位相であると考えていたとは考えにくい。夢が実現することが想像力の真証性の証しになるのだとすれば、ウィリアムズやバシュラールの文学観に類似して、キーツは真実性や存在、生を想像力の優越した領域としていたとも考えられるのだ。

また、キーツの詩が、通常の時間の流れを経た壺の語りによつて生や支配的な歴史観に親しい西欧的な美を提示するのにたいして、デイキンソンの歴史、時間観は、語りの始まりと終わりである死が一致する瞬間を始まりとすることによつて、時間の始まりと終わりや、その経過そのものを無効化している。*I died for beauty*におけるもつとも奇妙な詩行は、結語となる“until the moss had covered up our lips and our names”である。詩行は“until the moss had covered”となつており、“until the moss covered”とはなっていない。詩における沈黙の語りがたどり着く地点は、キーツの詩とはことなり、動きや進行ではなくある完了して静止した状態であり、その状態はあらかじめ到達されており、すでに進行をとめている。読者はここで、“between the spaces”とされるあいだの空間がそのものとして存在しえないことに似て、死後の対話の始まりと終わりに時間的差異が存在しないことに気づかされるだろう。シャロン・キャメロンが *Lyric Time* において指摘しているように、通常の意味で全体性を形成するはずの時間的始まりや終わりや時間の連鎖、そして空間の完結性は、デイキンソンによつてはむ

しろ存在の全体性を損なうものとして認識されていた。それゆえにデイキンソンは時間の連鎖や空間の完結性を破綻させるのである¹⁷。墓地における対話という設定は、いうまでもなくイギリスの“graveyard school”やゴシック趣味を思わせるものだが、デイキンソンのなゴシックイズムは、謎が潜む空間そのものの完結性を破綻させ、探求の時間的・空間的目的を不在化する、反近代的ともいえる構造を内在しており、そうした不在の探求こそがデイキンソンの詩の読書経験となる。

6. 「アメリカン・ルネッサンス」とエミリ・デイキンソン

トランセンデンタリズムを代表とする新興文化運動が、ヨーロッパや初期アメリカ合衆国とはことなつた文化や歴史を創設する試みを開始した一八三〇年代に起きたことのひとつは、バシュラールの議論におけるように、まったく原理的な問題に図式的に還元されるのかも知れない。エマソンらが創設しようとした文芸の原理とは、ヨーロッパや合衆国の過去や伝統から切り離された民主主義的な「私」「自我」であり、その原理自体はエマソンの講演やエッセイで民主主義国家における文芸や歴史観の絶対的な前提となる実在として措定されながらも、現実にはいまだに存在しているとはいえなかつただろう。エマソンらの時代にあつては、実質的には不在である自我の存在が歴史や過去と向き合い、それらを記述の対象とすることによつて、「自然」や「歴史」とよばれるなにかが生まれて、そして記述されることになる。トランセンデンタリズムと十九

世紀前半のアメリカ合衆国における文化論的言説一般が、自我と自然、主体と客体との関係を文芸における記述の原理として想定することによって、本来は不在であつたはずのアメリカ的な主体とそもそも主体概念を成立させる要件として必要不可欠なはずの客体概念を存在の原理として提出し、しかもそうした「新しい」関係性を、それ「以前の」歴史的に構築された関係性と対比することによって、不確かだつたはずのアメリカ合衆国の過去や歴史が自動的に生成されるような装置を仕込むことが、エマソンの“Nature”その他の著作における戦略の一面だつたといえるのではないだろうか。

エマソンやホイットマンらが提唱したアメリカ的な民主主義的「自我」による語りは、主体と客体を相互依存的にナルシシスティックな関係性として想定し、上記のような原理によって存在と不在とを逆転して提示している。アメリカの文芸復興が実現するにあつては、「以前」としての過去や歴史を、いまだ存在していない「以後」の存在による視点を提示することによってつくりだすこと、主体としての自我と客体としての自然との関係性を、あらかじめ存在した自然とそこにあらたに参入する自我としてではなく、主体としての自我の絶対性と、眼差され、記述される対象である自然として逆転した関係において提示することによって、あらかじめ存在しているはずの自然の絶対性を保証しようとする。これらが、いわゆる「アメリカン・ルネッサンス」の文化が原理的に孕んでいたパラドクスである。「以後」の基盤となるはずの「以前」は「以後」によってつくりだされ、過去の自我の存在や自我に先立つべき「自然」や歴史の存在は、実質的には不在である現在の「自我」の現前

によって保証される。「アメリカン・ルネッサンス」における執拗なロマンティックな存在論の主張は、現代の視点から再考されたとき、実際のところ自我とその客体である自然の不在そのものを際立たせ、主体を中心とした主客関係そのものが存在論としてのロマンティックな文芸論を成立させるための、それ自体フィクショナルな装置であつたのではなからうか¹⁸。

このように論じてくると、デイキンソンの詩がその力強さや魅力にかかわらず「アメリカン・ルネッサンス」の主流からポーなどとともに除外され、ある種の異端的な詩人とされてきたのは、おそらく上記のような「アメリカン・ルネッサンス」に固有のフィクショナルな装置を暴く転倒的な力をもつているからではないかと想像されてくる。デイキンソンの不在の観点が詩そのものや詩のイメージとして成立しうるとすれば、現実的な存在論や絶対的な空間として提示される芸術創作の主体の絶対性、それらに基づいた歴史観や芸術観は不在や非人称性の一側面として相対化される。十九世紀のアメリカ文学は、ニューイングランドの“genteel”な階級によって支えられたまさに国家的な事業であつたといつてよいはずだが、そうした国家的事業としての主流のロマンティズムを相対化し、転倒しかねない作品が同時代に書かれたことは、おそらく偶然に起きたのではない幸運だつた。Johnson版の全詩集が出版された頃には、F・O・マシーセンの『アメリカン・ルネッサンス』が出版された二十世紀中庸の時代の右翼的、抑圧的なヨーロッパ男性中心主義的なイデオロギーに支配されたアメリカ合衆国はずでに姿を現しはじめていた。同じ頃作品を発表しはじめたトマス・ピンチョンらのポストモダン作家たちや、七〇年代以降

の、発話の主体ではなく言語そのものに目を向けた詩人たちにとって、ディキンソンはより魅力的な詩人となったに違いない。国家主義やエディパスの家的空間に閉じこもり、それらに親しみながらも、それらが構築するものとは別個の不在の空間を想像しえたディキンソンの“impersonal”な詩学は、現代の文学・芸術にとってより強力な文学的先行例となりえているはずである。

注

1 Ralph Waldo Emerson, “Nature,” Donald McQuade ed., *Selected Writings of Emerson* (New York: The Modern Library, 1981), 3-42. 参照。ヘマンソンは類似の表現をさまざまな著作で反復しているが、たとえば同書9ページなどでは、自然と視覚機能としての「目」を美と芸術の構成要素とし、「つぎのように述べるところ」。“The ancient Greeks called the world *ἡὸς σιποῦς*, beauty. Such is the constitution of all things, or such the plastic power of the human eye, that the primary forms, as the sky, the mountain, the tree, the animal, give us a delight in and for themselves; a pleasure arising from outline, color, motion, and grouping. This seems partly owing to the eye itself. The eye is the best of artists.”

2 よく知られていることだが、ナサニエル・ホーソンは歴史的事実を忠実に再現している素振りを拒み、おそらく故意に年号をずらすなどすることによって、あくまでフィクションとしての歴史を作品として提示していることを明確にしていた。しかしながら、『緋文字』序文でヘスター・プリンの胸につけていたとされる、*W*の文字が物質的な異物として残さ

れていたたり、“The Minister’s Black Veil”のヴェールやパー牧師の身体の物質性が強く意識されているなど、かならずしも歴史を非存在として提示しているわけではない。

3 Emerson, “Nature,” 3. のあまりにも有名な書き出し、“Our age is retrospective.” 以下を参照。

4 ディキンソンのテクスト出版の経緯については多くの著作がある。最新① R. W. Franklin による *The Poems of Emily Dickinson* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard U. P., 1998) に関する経緯については、同書の“Introduction”を参照。

5 Susan Howe, *My Emily Dickinson* は、タイトルが示すように、研究書というよりは、ハウとディキンソンとのパーソナルなつながりを意識した議論でなりたっている。ハウは、Susan Howe, *Singularities* (Hanover: University Press of New England, 1990) などにおいて、ディキンソンの詩を意欲していると思われる短詩形やダッシュを利用したグラフィックな詩行などを実践している。

6 ハウで詳述するスペースはないが、よく知られた“humming bird”などに代表されるディキンソンの自然のイメージは、それ自体他の詩人たちのものと絶対的に異なっているわけではない。本稿で論じている *I died for beauty* における「昔も」、それ自体としては通常の有機的自然のイメージであり、ホイットマンの *Leaves of Grass* における「草の葉」といったものではない。

7 Tennessee Williams, “Preface” to *Cat on a Hot Tin Roof* (New York: Penguin Books, 2009) 参照。

8 ガストン・バシュユラル、岩村行雄訳『空間の詩学』（東京：思潮社、一九六九）、二六〇。

9 Williams, xii.

10 同上.

11 Joanne Dobson, *Dickinson and the Strategies of Reticence* (Bloomington: Indiana U. P., 1989), xii-xiii. を参照。

12 バフチンによる「声」やポリフォニーといった議論の装置は、テキスト論以降の時代にあつては「声」がそのものとして現前しないことが明らかのために、ある種の条件や留保をつけて議論されるべきである。ロラン・バルトは、「作者の死」のテキスト冒頭で、去勢されたカストラートの声に触れ、文学テキストにおける「声」の本来的な曖昧にコメントしている。

13 Sharon Cameron, *Impersonality: Seven Essays* (Chicago: U. of Chicago P., 2007), viii.

14 Dobson, *Dickinson*, xiii.

15 John Keats, "Ode on a Grecian Urn," *The Norton Anthology of English Literature 2 vols.* (New York: W. W. Norton & Company, 1986), 822-823.

16 John Keats, *Letter to Benjamin Bailey*, November 22, 1817.

17 Sharon Cameron, *Lyric Time: Dickinson and the Limits of Genre* (Baltimore: The Johns Hopkins U. P., 1979), 170.

18 デイキンソン以外の作家たちも、十九世紀半ばのロマンティックなイデオロギーが孕む問題を強く意識していた。ハーマン・メルヴィルの『ピエール』では、トランセンデンタリズムのイデオロギーに含意されるこうした問題が、主人公ピエールの真実探求におけるジレンマとして提示されている。

* 本稿は二〇一〇年夏にオクスフォード大学で行われた国際エミリー・デイキンソン学会における口頭発表“Readings on the Margin: Emily Dickinson's Posthumous Poetics and the English Romantics”に基づいており、二〇〇九

年度に東京外国語大学博士前期課程への提出論文においてエミリー・デイキンソンを秀逸に論じた平井美奈さんとの授業や論文指導の過程をふまえたものであることをお断りいたします。この研究は、文部科学省科学研究費補助金、基盤研究C（代表 加藤雄二）によって支援されています。

記憶の都市メキシコ 地下恐怖

柳原孝敦

美しき時代

二〇〇九年三月、メキシコ市に行く用があつた。著書『ラテンアメリカ主義のレトリック』を上梓して初のメキシコ市訪問だったこともあり、その本の中でも大きく取り上げたアルフォンソ・レイエスの記念館に、本を献呈しに行こうと思ひ立ち、私は十七年ぶりにそこを訪れた。Capilla Alfonsina（アルフォンソの礼拝堂）という名の記念館だ。私はかつて一年間、作家の個人文書館を兼ねるこの記念館に毎週通い、未刊の草稿や手紙などを参照して資料を集めた。私の研究者としての出発点を刻む思い出の地なのだ。そこを久しぶりに訪れ、本を献呈してきただというわけだ。

ところで、そのときの渡墨では、同じ飛行機に四人もの知り合い（同業者）が乗っていた。そのうちのひとり、Kさんが、空港で私に、「ロサリオ・カステリャーノス書店」という書店の名をささやいた。共通の知人のSさんが、そのちよつと前にメキシコに行ったときに見つけて入り、品揃えと店員の対応の良さに感動した書店だとのこと。しかもSさんはこの書店の名になったロサリオ・カステリャーノスという作家を研究する学究の徒。自分の愛する作家の名が冠された書店であればますま

す素晴らしく思えたことだろう。KさんはSさんからそんな話を聞き、この書店を訪れる予定だと、私に話したのだった。

訪問を終え、レイエス記念館から近くの地下鉄駅チルパンシゴに向かった私は、偶然に見つけたのだった。「ロサリオ・カステリャーノス書店」を。何のことはない、半民半官の出版社フォンド・デ・クルトゥーラ・エコノミカ（FCE）の経営する書店のひとつであつた。近年FCEはメキシコ史上の名だたる作家たちの名前を冠した直営店を相次いで開店し（これは「記憶の都市」の作り方の、ひとつの基本的な方法だ。誰かを記念した建造物、ということだ）、事業のさらなる展開を図っている。ちなみに、そのFCE、初期のころにその成長に大きく貢献したのは他ならぬアルフォンソ・レイエスだった（柳原、二〇〇七年、エピソード）。

不思議と、それがロサリオ・カステリャーノス書店であること、FCEの直営店であることを認識した後から、その認識はできたように記憶する。私はその建物のフォルムに驚いた。驚き、そして、一気に思い出した。その半円形のくびれに尖塔を構えたファサード、そこに大きなBELLA EPOCAの文字、これは私にも馴染みの建物だったのだということ（図一）。当然のことながら、レイエス記念館に通った十八年前の毎週金曜

日、決まって目にしていた建物だったのだ。はじめてレイエス記念館を訪れた一九九一年五月のある日、前日にここの館長でもあり作家の孫娘でもあるアリシア・レイエスと話したときに、彼女はこの BELLA EPOCA の建物を目指してくるようにと私に教えてくれたのだ。つまり、「決まって目にしていただけでなく、そこを頼りとして記念館を探した。いわばこの界限をはじめ訪れる者にとつてのランドマークだった。私はそのとき、二〇〇九年のその日、十八年も前の電話越しのアリシアの声すらもまざまざと思い出したように思った。



図一

たぶん、これだけの特徴的なファサードを見て、すぐにそれと気づかなかつたのは、色が変わっていたからだろう。BELLA EPOCA の文字（書体）も異なっている（十八年前は Bella Epoca）。今でも「文化センター」と銘打つだけあってロサリオ・カステリャーノス書店だけでなく、リド映画館やホールを含む文化複合になっているその建物、当時はリド映画館が前面に出て、いかにも映画館のネオンサインといったおもむきの電光掲示板を庇の下に構えていた。そして、外壁の色が黄土色だった（図二）。



図二

ロサリオ・カステリヤノ書店があるあたり、そしてレイエス記念館があるあたりをコンデサと呼ぶ。メキシコ市はデレガシオンという十六の区に分割されており、区がさらにいくつものコロニアに分割される。このコロニアのことを区とか街区とか地区と記す人は多いが、「区」と呼ぶにはあまりにも数が多い単位だ。そして、一般的な地名はこのコロニアの区分と必ずしも一致しない。今、コンデサと言ったが、正確にはレイエス記念館はコロニア・イポドロモ・デ・コンデサという区分に位置する。コロニア・コンデサという区分もある。しかし、一般にはイポドロモとイポドロモ・デ・コンデサ、コンデサ、という三つのコロニアのあたりを漠然とコンデサと呼ぶ。レイエス記念館もコンデサである。少なくともアリシア・レイエスはそう言った。そして、ロサリオ・カステリヤノ書店ことBELLA EPOCAもコンデサに位置する。

私がメキシコにいたのは一九九一年から九二年にかけてだ。ペドロ・サリーナス・デ・ゴルタリの大統領期間だった。ペソの対ドル・レートを高値で安定させ、メキシコ経済が未曾有の好景気を見せた時期だ。数年後のNAFTA参加を目指しており（事実、それは達成された）、メキシコ人たちは豊かだった。一方で一ドル三千ペソもするそのレートは無謀で、さすがに翌年にはデノミが敢行されもした。日本ではバブル経済が終焉を迎える直前くらいだったが、まさにメキシコもバブル期にあり、それが弾ける直前だったということもできる。そして新自由主義経済が世界を画一化する、いわゆるグローバリゼーションの波に乗り始めた時期だった。

この時期、閑静な住宅街として知られたコンデサ一帯は、そ

れこそバブル経済らしく、不動産売買が盛んで、すっかり様変わりしたらしい。書店で買い物をして荷物を配送してもらおう手続きをしながら、私は書店員からそんな話を聞いていた。確かに、かつてはたとえばこのBELLA EPOCAのすぐ隣にも自動車修理工場のようなものがあつてのどかな雰囲気を醸成していたものだが、今はそんなものは見当たらない。瀟洒な感じの建物になってしまつていた。そんな様変わりした街中でも、変わらない建物というのがいくつあつて、そのひとつがレイエス記念館であり、このBELLA EPOCAだ。実際のところは一九四二年建立という老舗中の老舗であるリド映画館ことBELLA EPOCA（とはいえ、竣工直後はまだファサードにこの語は記されていなかったようだ）は、昔ながらの一種のランドマークなのだ。

私が見ていた黄土色に装飾的な草文字がアール・ヌーヴオー風のこの建物を、八年後に眺めたひとりの日本人がいる。野谷文昭だ。「失われた映画館」という短い文章（野谷、二〇〇三年）でここを叙述しているのだ。九九年に四ヶ月間メキシコ市に滞在した野谷はシネテカ（国立フィルムライブラリー）で古典作品といえる映画を堪能する一方で、すっかりシネコン化してしまつた映画館でハリウッドもののスペイン語版かと見まがうような映画を見たと言懐しながら述べている。

自由化、アメリカ化によって、メキシコでもこのような映画をクッションの利いた清潔な椅子にもたれ、コーラを飲み、ポップコーンを食べながら見られるようになったのだ。だが入場料の大幅な値上げをはじめ、その代償は決して小さくない。ア

ールデコ調の建物が保存され、文化人が好む地区コンデサに行つたとき、ミナレット風の尖塔と曲線が印象的なブルーの建物があったので、そばによつてみると、それは閉館になった映画館だった。スチール写真もポスターもなくなつていたにもかかわらず、その建物は街並みに溶け込んでいた。

そういえば、シャンゼリゼを模して作られたレフォルマ通りの顔とも言ふべき大劇場シネ・ラティーンも閉まつていた。八年前、大ヒット中の『赤い薔薇ソースの伝説』を大勢の観客に混じつて見た映画館だ。人々の笑いやため息が、大きなエネルギーの集合体のように感じられたのを思い出す。彼らはどこへ行つてしまつたのだろうか。(二五三―二五四頁)

引用の二段落目で言及されている映画館はリド映画館ことBELLA EPOCAとはまた別の建物ラティーン映画館ではあるが、ここで挙げられたケースはいずれも、サリーナス時代の好景気による物価の高騰の余波を受け、入場料も上がり(私がいたころの映画館の入場料は一ドル相当「三千ペソ」だった)、一気にグローバル化経済の波の影響を受けたメキシコ映画産業の、その後の状況を照らし出している。つまり、古き良きBella Epoca(とはもちろん、「ベル・エポック」の意だ)の映画館は閉鎖され、シネコンが幅を利かせるようになったということだ。そしてであろうことか、そこで上映される映画まで画一的なものになつた。そのさびしさを野谷は書きつけている。

ここに書かれている「アールデコ調の建物」のならばコンデサにある、「ミナレット風の尖塔と曲線が印象的なブルーの建物」がBELLA EPOCAであることはほぼ間違いないだろう。

「閉館になつた映画館」とはリド映画館だ。黄土色でも白でもなく、ブルーに塗られ、映画館としての機能を果たしていないこの建物を野谷は目撃し、書きつけたのだ。おそらく、私が見たアールデコ風文字も印象的なリド映画館ことBella Epocaは、「バブル景気」が準備した来るべき新自由主義、市場競争原理至上主義に負けるまいとして経営努力を続け、外装も変えてブルーにし、それでも経営が成り立たなくなつて閉鎖されたのだろう。しかる後にFCEが買い取つて白く塗り替え、文字も書き換え、ただし、名前だけはそのままにBELLA EPOCA文化複合として生まれ変わった。私は書店員と話をしながら村上春樹『ダンス、ダンス、ダンス』における「いるかホテル」(「ドルフィン・ホテル」)のことなどを思い出していた。私に再び見出されるために、周囲はがらりと変わつても、元の名前のまま残つた建物。私の記憶のよすがとなる建物。私にとつての美しき時代の思い出でもある「美しき時代」という名のこの建物。

およそ、記憶としての都市を語るとは、あるいはテキストとしての都市を書き、読むとは、こういうものと対話する作業なのだろう。BELLA EPOCAの建物は色を塗り替えられ、文字を書き換えられてきた一種のパリンプセスト(重ね書きの羊皮紙)だ。私たちは時には色の塗り替えに参加したり、時には逆に塗り替えられた白い壁の向こうに一九九九年の青い色を見出し、さらに九一年、九二年以前の黄土色を発見したりしていく。少なくとも、私がここでやろうとしているのは、そういう作業である。

また、建物が塗り替えられていなくても、まったく同じ佇まいを維持していたとしても、記憶というフィルターを通すこと

によって、一つの風景はまったく異なる様相を呈すことになる。現実の都市に対して「記憶の都市」を想定するとは、そういうことでもある。

地下恐怖

都市が重ね書きとして存在するのなら、現在見えるその表面の向こう側に、何かがあることに気づいた人間が何らかの反応を示したとしてもおかしくはない。私がロベルト・ボラーニョ『野生の探偵たち』（一九九八）（ボラーニョ、二〇一〇年）を訳しながら漠然と考えたのは、彼の（あるいは作品内の人物たちの）地下恐怖症とでも言うべきものだ。地面はある意味でもっとも重ね書きの多くなされてきた場であろう。地下に何かが埋まっているという恐怖心は、私たちも充分に共有できるものなのではないか。たとえば、第一部はファン・ガルシア＝マデーロという十七歳の少年の日記形式となっているこの小説、その第一部もだいたい最初の方で、ガルシア＝マデーロは、以下のよう書きつける。前の晩に友だちになつたばかりの若い詩人二人を、酒場で待ち伏せしているところだ。

五時間待つての収穫は次のとおり。ビール四杯、テキーラ四杯、食べかけで残したソペ・トルティーヤ（腐りかけていた）、しまいまで読んだアラモの最新の詩集（新しい友達と一緒にからかってやろうと思ひ、わざわざ持ち歩いてた）、ウリセス・リマ風に書いた文章七編（一つ目は棺桶の匂いにするソペ・トルティー

ヤについて、二つ目は大学が舞台、すっかり取り壊された大学だ、三つ目は大学が舞台、僕が全裸でゾンビの大群の間を走る、四つ目はメキシコ市（DF）の空に浮かぶ月について、五つ目はある亡き歌手について、六つ目はチャプルテペックの下水道にある地下社会について、そして七つ目は一冊の失われた書物と友情について）、というか、正確には僕が知っているウリセス・リマの唯一の詩、つまり読んだのではなく耳で聞いたあの詩に似せて書いた文章が七編、それと肉体的かつ精神的な孤独感。（上、二三―二四頁。翻訳原文の訳注を削除）

ボラーニョはゾンビ映画が好きで、ただ語り手が見たゾンビ映画のストーリーを語るといっただけの短編も書いている。あるいは一九七五年末から七六年にかけてのことを語っているこの日記部分なので、時代性もあるのかもしれない。ここでガルシア＝マデーロはゾンビやそんなゾンビがいたとしてもおかしくない「地下社会」について語っている。腐っているようなので残したソペのことや、前の日に喧嘩をしてサボっている大学のこと、その喧嘩の原因となつた詩作ゼミの先生アラモの詩集のことなどと並べられているので、ゾンビや「チャプルテペックの下水道にある地下社会」などは語り手の一種のオプセションなのだと思う。ガルシア＝マデーロはこのように、地下を恐怖している。

このガルシア＝マデーロが待つている相手というのが、アルトウーロ・ベラーノとウリセス・リマという二人の若き詩人だ。それが小説の主人公で、第二部は二人の詩人にゆかりの人物たちに対するインタビュー集となっている。ベラーノの高校

時代を語る元恋人ペルラ・アビレスの証言はベラーノの中にある地下恐怖症をもつと具体化して教えてくれている。彼女が父親とアルトゥーロの三人でトラスカラの父親の土地に乗馬に行つた時のことを回想しながら述べる箇所だ。

何時間かして父の車で家路についたとき、そのとき彼が前の座席にいてわたしは後ろに座っていて、彼がわたしに、たぶんあの土地の下にはいつの時代かのピラミッドが埋められていると言つた。父が車の進路から目を離して彼を見つめたのを覚えてるわ。ピラミッドだつて？ ええ、と彼は言つた、地下はピラミッドでいっぱいには違ひありません。父は何もいわなかつた。わたしは後部座席の暗がりから、どうしてそう思うのかと聞いてみた。彼は答えなかつたわ。それからわたしは別の話をし始めた、でもわたしはなぜ彼がピラミッドのことを言つたのかずつと考えていた。ピラミッドのことをずつと考えていた。父の石ころだらけの土地のことをずつと考えていた。(上、二〇一頁。傍点は邦訳原文)

桜の樹の下には屍体が埋まっている。そう言つたのは梶井基次郎だつた。古来より数限りなく詩歌に詠われ日本人の美意識の中核を形作っているはずの花、桜が、腐乱して悪臭芬々、蛆のたかつた屍体から滋養を得ていることの恐怖。あるいは美と醜とが背中合わせになつていることの恐怖を説いた短編「桜の樹の下には」でのことだ。日本人であるとは、この恐怖を感じながら毎年春には桜を愛でる思いを理解できる者の謂いかもしれない。同様にメキシコに暮らす者とは、地下深くにいつの

時代かのヨーロッパからの征服者が破壊し、地層の中に埋めてしまつたピラミッドが眠つているのかもしれないとの恐れを抱く者のことかもしれない。

ピラミッドというのは、スペイン人たちが征服した先住民たちの記念碑的建造物である。話はピラミッドには限らないのかもしれない。あるいは現代メキシコ人とは、地下に眠っている先住民の記憶に恐怖しながら生きている者のことなのかもしれない。

そう考えると、思い出される言葉がある。ある映画のセリフだ。

スペインの都市の中央広場には叫び声が詰まつている。その下には血の海が、心臓のように鼓動する断末魔の叫びの水たまりが閉じ込められているんだよ(柳原、二〇一〇、七一頁)

カルロス・サウラの映画『ブニユエル——ソロモン王の秘宝』(二〇〇一年)で、主人公ブニユエル(もちろん、映画監督ルイス・ブニユエルのこと。この映画は彼を主人公にしたフィクション)の友人フェデリコ・ガルシア・ロルカ(こちらも実在だが、映画はあくまでもフィクション)が、ソロモン王の秘宝を求めて地下世界を旅する途中に放つたセリフだ。スペインの中央広場の下には血の海が横たわっている。戦慄を催させるけれども、詩的で美しいイメージだ。

これに倣つてメキシコ市の広場のことを表現すれば、こう言えるかもしれない。メキシコ市の広場の下には先住民の神殿(やピラミッド)が横たわっている。広場には征服された者たちの

叫び声が詰まっている。

代表的なのが中央広場の中の中央広場、ソカロだ。都市の中央広場には都市機能の中枢が集まっているものだ。たとえば役場とか教会が。メキシコ市のソカロには、「憲法広場」というその正式名称に恥じず、大統領府がその四角形の一边をまるごと占める形で建っている。「中央広場の中の中央広場」と言ったのはそういう意味だ。独立記念日の九月十六日には、この広場に大勢の人が集まり、騎馬隊のパレードがここを終着点とし、前日の晩には大統領が大統領府のバルコニーに立って「メキシコ万歳！」と叫ぶ。その模様はテレビで全国生中継される。ひとりメキシコ市のみならず、ここは共和国全体の中心だ。大統領府に接する辺のひとつにはカテドラルが建っている。カトリックが住民の大半を占める国ならではの建立物だ。しかもこのカテドラル、西半球最大を誇るものだ。これが建てられた場所がいかに「中央広場の中の中央広場」であるか、この点からも確認できる。

このソカロの大統領府の辺とカテドラルの辺が接するあたりに、メキシコ市の広場がその下に内包する「征服された者たちの叫び声」がむき出しになっている場所があるのだ。モスクワの赤の広場、北京の天安門広場と並び、世界三大広場に列せられるこの一大スペクタクル場の隅にぼつかりと開いた、それは穴だ。時空の裂け目のようなものだ。その時空の裂け目から、征服された者たちの叫び声があふれ出て来ているのだ。

そこに開いた「時空の裂け目」、「征服された者たちの叫び声」とは、すでにほのめかしたように、先住民の神殿だ。中央神殿 Templo Mayor と後に名づけられた先住民たちの宗教実践の場

の跡が、キリスト教のカテドラルの隣、やや後方にひっそりと顔を覗かせているというわけだ(図三)。



図三

この事実が示唆することはこういうことだ。スペイン人たちは先住民の宗教儀礼の場所を破壊し、その上に(でなくとも、せめてその隣に)自分たちの宗教儀礼の場を建てたということ。ということは同時に、スペイン人たちが先住民の作り上げた地

政学上・宗教上の配置を利用し、その上に乗って自分たちの街を作り上げたということでもある。征服とは単なる破壊ではなく、破壊に基づく下部構造の再利用でもある。

このように再利用されるために埋められたのだから、実は中央神殿は長いこと誰の目にも触れず、忘れられた存在だった。あるいは、都市伝説のように、目には見えないけれども、その存在がまことしやかにささやかれる、そういう存在だった。現在メキシコに行く者は（九一年に初めて行った私もそうだが）カテドラル横にそれが存在するのが当たり前のような感覚に囚われてしまうが、これの発掘が始まったのはたかだか四十年ばかり前のことなのだ。

既に十八世紀にはその一部が発見され、二十世紀初頭には位置の確定もされていたこの中央神殿が、現実に発掘されるのは一九七八年からのことだ。その端緒となったのが、その年の二月の電線の地下埋設工事であるというのは（López Luján, et al. 2006）、なんとも示唆的な事実だ。先住民の建物は植民地の建物によって取り壊され、地下に埋められ、それよりも新しい近代の産物のために露わにされるといふことだからだ。

確認しておかなければならないのは、今し方引用したロベルト・ボラーニョがメキシコにいたのは七七年までのことであるという事実、そしてまた、『野生の探偵たち』は七五、七六年のメキシコを舞台としているということだ。つまり、地下に「ピラミッド」に対する恐怖を抱えていたこの小説の登場人物たちは、まだこの中央神殿の姿を目にはいかなかったのだ。そしてまた、小説第二部で主人公の詩人たちとのかかわりを証言しながら、彼らが探し求めていた一九二〇年代の女性詩人セサレ

ア・ティナヘーロを想起する老人アマデオ・サルパティエラが想起するソカロにも、中央神殿の影などは見えなかったというわけだ。

（略）ピノ・スアレス近くのミシオネロス通りにある居酒屋へミ・オフィシーナが見え、そこは制服を着た者と犬と女は立ち入り禁止で、しかし例外が一人いて、そうだった一人だけ出入りを許された女がいて、その女がその辺の通りを歩いている姿がまた目に浮かんた、彼女がロレータ通りを、ソレダー通りを、（中央郵便局）通りを、モネダ通りを歩いていて、中央広場を大急ぎで横切るのを見えて、ああ、見るとも、二〇年代に二十代の一人の女が、ソカロを横切る姿、まるで恋人とのデートに遅れている、中心街のどこかの店での臨時の仕事に向かう途中のように大急ぎの彼女は、安っぽいけれどもきれいな服を上品に着こなし（略）（上、三四〇頁。）

中央神殿

中央神殿の発掘はエドワルド・マトス・モクテスマヤレオナルド・ロペス・ルハンという人々をチーフとする中央神殿プロジェクトによって実現された。それ自体は七八年から八二年までのおおよそ終わったのだが、もちろん遺跡は、発掘すればそれで終わりというものではない。保存も考えなければならぬ。これは考古学の成果の問題であり、歴史認識の問題でもある。場合によっては教科書の歴史記述が変わるかもしれ

ない。そうなるに国家のアイデンティティ（国民の意識、ナショナルリズム）にもかかわって来るだろう。中央神殿遺跡は、隣に保存と保護、価値の伝播を目的とした中央神殿博物館というもので設えられることになるだろう。設置された博物館には、国立人類学歴史学研究所（INAH）の都市考古学プログラムに携わり、中央神殿の発掘を指揮したマトス・モクテスマが初代館長として招聘された（現在の館長はカルロス・ハビエル・ゴンサレス・ゴンサレス）。

マトス・モクテスマによればこの中央神殿プロジェクトは三つの局面から成り立っていた。第一の局面が資料の収集、下調べ。これによつて中央神殿がどのようなものであつたかを特定する。そして第二の局面が実際の発掘と修復。これがだいたい八二年までに終わり、第三の局面に入ったとのこと。第三の局面とはその解釈、価値づけだ。いずれかの局面にかかわる出版物（本や雑誌論文など）は、一九九九年の時点で二百五十点にもものぼる（Matos Moctezuma, et. al., 1999:9-10）。

記憶の都市のことを語るためには、つまり私たちの記憶の中に蓄積される中央神殿のことを語るためには、ここでマトス・モクテスマが第三の局面と呼んでいる考古学的作業こそが、じかに関係してくるのだろう。第三の局面とは、解釈、価値づけなのだからだ。考古学の仕事にはこれがあるので、単なる穴掘りでは終わらない。そしてまたこれがあるから、同じ一つの遺跡を前にして、人々の異なる想念を導き出す。つまり、記憶としての都市の様相にかかわってくる。私たちが考古学的な遺跡を前にするとき、考古学者たちの行った価値づけから自由になることは難しい。

中央神殿とカテドラルに挟まれた空間をマヌエル・ガミオ広場と呼ぶ。先ほどの書店、つまり建物や施設の名前だけでなく、地名や通りの名にこうして人名をつけるのは記憶の都市の作り方のわかりやすい例のひとつだが、では、このマヌエル・ガミオとは何者か？ 二十世紀メキシコ考古学を代表する学者だ。二十世紀の初頭に見つかった遺物をもとに、中央神殿がカテドラルの真下（それまではそう思われていた）ではなく、その横に存在するということを突き止めた人物だ。彼の時代には中央神殿はまだなかつたわけだけれども、一部が発見されてはいた。その一部を調査したのがガミオなのだ。中央神殿の記憶を語るとき、マトス・モクテスマらと並んでガミオは、忘れてはならない人物である。そして事実、神殿前のこの広場に立つとき、私たちは常にマヌエル・ガミオの名を思い出すのである。マヌエル・ガミオの名の上に立つことになるのである。

当然のことながらガミオもまた、「解釈」の作業を行った。中央神殿のみに携わつたわけではないが、数多くの考古学・人類学上の発掘・修復作業に携わつた業績を後ろ盾に、行つた「解釈」というのは、つまり、彼の著作のことだ。代表的なのが『祖国を鍛造する』*Forjando patria*（一九一六年）で、これは二十世紀のインディヘニスマを基礎としたナショナルリズムの核となつた著作（落合、一九九六年、六〇頁）と評価されるべきものである。古典的名作だ。しかし、この本においてガミオは「本当の意味での、また広い意味での人類学は、良き統治（*buen gobierno*)を行うための基礎知識とならなければならぬ」ということは、「反論の余地がない」（Garnio, s.）などと書きつけ、学問の側から国家、国策へ寄り添う態度を見せており、その点

に関して私も批判したことがあった（柳原、二〇〇七年、一八四―一八七頁）。文化統合論者であり、現在、同時代に生きている先住民を、「メステイソ文化」として語られるメキシコの今ではすっかり公式イデオロギーの観を呈する認識に同化させようとするガミオの態度には、批判も生まれるところだ（落合、一九九六年など）。ガミオから百年近い時を隔てて、既に発掘の済んだ中央神殿の前に、これを「解釈」する作業は、ガミオからは違う地点でなされなければならないはずだ。

マトスⅡモクテスマの比較的最近の著作に『テノチティトランの生、受難、死』（Matos Moeztuma, 2003）というのがある。「これから私たちは過去の声に耳を澄ませるといふ特権を享受することになる」（8）としてここでマトスⅡモクテスマがやっていることは、コルテスやベルナル・ディアス・デル・カステイリヨの書き残したテノチティトランの描写、サアグンが採取した先住民たちの声、彼らのいずれもが記した征服戦争の記録を、そのまま彼らの書物（クロニカと総称される）から抜粋し、それらを「生」、「受難」、「死」の三つのパートに分配して編集、掲載することだった。

果たして征服期のスペイン人たちの声を編集、採録するだけのこの作業は「解釈」と言えるのだろうか？ 編集する作業であるのだから、そこにはある種の判断が介入するのであり、その意味では確かに、「解釈」と言えるかもしれない。けれども、ただ切り貼りしただけでは、やはり中途半端の感は否めない。穿った見方をするなら、先住民擁護の思想、いわゆるインディヘニスマの基礎となろうとして成果はあげたけれども、さまざまに反省を強いられているガミオの考古学思想とそれ以後の

流れに介入することを注意深く避けているようにも見える。

私としては、ここでしかしメキシコの考古学・人類学のあり方に対する批判を展開するつもりはない。ただマトスⅡモクテスマが、あたかも私たちからのあり得べき批判をも回避するかのように、彼自身の中央神殿に対する解釈に代えて、ある人物を引用していることを指摘しておきたい。「アルフォンソ・レイエスは『アナワクの眺め』で、この驚くべき大都市の風景と鼓動とを実にうまく謳ったものだ」「かつての、そして現在の言葉であるこれらに対する序文として、アルフォンソ翁が一九一五年に表したものにしくはない」（9）として、レイエスの著作（二九一七）*からの引用で『テノチティトランの生、受難、死』の「イントロダクション」を結ぶのだった。レイエスの著作冒頭近くの一部分であるその引用箇所をここにも引いてみよう。

貴族的な味気なきがなくもないあの風景の中では、目は分別を持っていても欺かれるので、心の目で線のひとつひとつを解読し、波打つ曲線のひとつひとつを撫でなければならぬ。あの光り輝く空気の下で、一帯を覆う涼しさと心地よさの中で、初めてその地に足を踏み入れたあれらの人々は、視野が広く、思慮深い精神の目を巡らせたのだ。鷲と蛇とが留まるというあのウチワサボテン——わたしたちの野原の幸福なる縮図だ——にうつとりとしながらも、彼らは不吉な鳥の鳴き声で、敵意に満ちた湖の存在を知り、安息の地を約束されたように思ったのだ。少し経つと、あの水上家屋の向こうから、都市が姿を現すだろう。その都市にかの七つの洞窟——わたしたちの地に散ら

ばった七つの大家族の揺り籠だ——から、神話の人物たる騎乗の人が、侵入してくるのだ。さらに先に進むと都市は帝国へと変わる。バビロニアやエジプトにもたとえるべき巨大な文明の音が、苦悩するモクテスマの不吉な日々まで、疲弊しながらも続くだろう。そのとき、脅威を与えるのにまさにこれ以上はないという絶好の機に、雪を被った火山を越え、コルテスの配下の者たち（「埃と汗、そして鉄」）が、響きと輝きのあの世界、山に囲まれた広大な円形の世界に、姿を現すのだ。

彼らの足下には、蜃気楼のように美しい土地が広がっており、それがあたかも、ひとつの寺院から流れ出るかのように作られていた。その都市の放射状の道路が、ピラミッドの四方の隅へと延びていたのだ。(Reyes, 2008: 14)

ガミオの『祖国を鍛造する』出版の翌年、スペインにあつたレイエスは「古文書館のポエジー」の成果としてこれを発表した。勤務していた在仏メキシコ大使館が第一次大戦の戦火を嫌って解体したため、職をなくしてスペインに渡つたレイエスは、オルテガの主宰する雑誌などで原稿を書き、あるいは図書館等での調べ物を請け負つたりして糊口をしのいだ。ひとりの書き手というよりは、下働きのな位置づけであつたらしい。しかし、こうした経験は、碩学ラモン・メネンデス・ピダル率いる歴史学研究所文献学部門での文献学研究、古典叢書編集の仕事に携わることになったその後のキャリアにとってみれば、格好の基礎訓練として役だつたとも言えるだろう。もちろん、すでに『美学の諸問題』（一九一三年）という著書もあつた作家レイエスは、そうした役割に満足することはせず、委託を受け

て行つた調査を調査に終わらせるのではなく、自らの執筆にも利用して数多くの記事を書き、やがて書き手としても認められるようになる。

『アナワクの眺め』発表の二年後には、「古文書館のポエジー」というタイトルの短文を発表して、歴史的文書そのものと、それが被ることになる転変とに、学問に回収しつくすことのできない「ポエジー」の存在を嗅ぎ取つている(Reyes, 1956)。こゝでマトス・モクテスマが引いている『アナワクの眺め』とは、レイエスがマドリッドでの下働き時代、歴史的文献を渉猟して得た知識を、歴史学や歴史記述に活かすことで満足するのではなく、そこから彼ならばこそ引き出し得る要素を引き出すとした結果にほかならない。彼ならばこそ引き出し得た要素とは、一種の詩情だ。つまり、このエッセイは「古文書館のポエジー」の最大の成果なのだ。

レイエスはメネンデス・ピダル率いる歴史学研究所で文献学者としての仕事に就いたとは、今紹介したばかりの、良く知られた事実だが、実際のところレイエスは、スペイン二〇世紀を代表するこの大文献学者の、科学的、歴史実証主義的な厳密な学問態度には、一種の不満を抱いていたらしい。そこに詩情が介入することがなければ、学問は虚しいと考えていたようだ(Monivais)。そんなレイエスが求めて止まなかつた「ポエジー」の発露なのだから、ほぼ同じ時期に発表されたものとはいへ、数々の考古学的発掘、つまり事実の実証的確認を前提としたガミオの態度などとは、レイエスの立場は大きく異なるに違いない。『アナワクの眺め』は、確かに、コルテスらの征服期の文物からの引用と解釈によって成り立つ書ではあるけれども、事

実の羅列ではない何かがあるのだ。

そもそもマトスⅡモクテスマによって引用された部分の第一文目にしてから、事実と、それをつぶさに観察する態度とには目を背けることを宣言したものでないか。「貴族的な味気なさがなくもないあの風景の中では、目は分別を持っていても欺かれるので、心の目で線のひとつひとつを解読し、波打つ曲線のひとつひとつを撫でなければならぬ」と。つまりレイエスは『アナワクの眺め』において、スペイン人征服者たちの見たままのメキシコの姿を再現しようとしているわけではないのだ。そんな目には見えなかったかもしれない、「心の目」に見えることを描こうとしているのだ。『アナワクの眺め』は正確には『アナワクの眺め（一五一九）』というタイトルであり、ということとは、コルテスによるメキシコ征服よりも二年前の「眺め」を描いたという結構になっているテクストなのだった。レイエスはつまり、スペイン人たちの文献を通じ、スペイン人たちが到着する以前のメキシコを再現して見せたのだ。引用の箇所はその導入として、コルテス一行が見たはずのアナワクの盆地を、テノチティランの湖上都市を、そしてその中央部に存在する中央神殿の壮麗さを記述したものだ。

征服者たちの記録を引用しながら、征服者たちの到着以前のメキシコを描くものであれば、このレイエスのテクスト『アナワクの眺め』は、征服者たちの記録をそのまま提示するというマトスⅡモクテスマの態度とも相容れないものであろう。実証性の見地から見れば疑わしいことかもしれないが、レイエスはそこにこそ価値を置いたのであり、そうして行った彼の記述が今、しかし、皮肉にも、マトスⅡモクテスマにはこれ

に「しくはない」ほど中央神殿およびその周辺の叙述として本当らしいと思われるのだ。発表から百年近くを経て、レイエスの想像力は考古学などの科学的知性を納得させたのだ。実際、おそらく、レイエスのこの記述は、現在の私たちの想像力に実にぴったりと適合したものである（図四）。



図四 V.A.1992より

空気の最も澄んだメキシコ

アルフォンソ・レイエスがこの『アナワクの眺め』で得た達成は、想像力によるスペイン人到達以前のメキシコの再現という以外に、もうひとつある。彼はひとつの表現、ひとつのトピックを作り出したのだ。それは、この本の冒頭にエピグラフとしてあげた、彼自身の実は創作になる言葉だ。「旅人よ、君は

空気のもつとも澄んだ地に着いたのだ」(6)というこの一文は、この後、テキスト本文でアレクサンダー・フォン・フンボルトの名前を出していることから、長い間フンボルトの言葉だと勘違いされたらしいが、その後、文学作品などでたびたび、メキシコ市、およびその周辺の盆地部を表す枕詞や比喻表現のように使われている。

たとえばキューバの小説家アレホ・カルペンティエールの小説『春の祭典』(一九七八年)では、二人の主人公「語り手のうちのひとりエンリケが、メキシコを訪れた一九三〇年ころのことを回想しながら、こう述べている。

ところで、この革命という日常言語は、ある朝大気澄み渡るアナワクの地で目覚めて以来、単に革命という用語となつて僕の周りを巡っていた。(五六頁。傍点は邦訳原文、傍線は引用者)

ここではメキシコ中央盆地の古名アナワクを修飾する句として、まるでいわゆる枕詞のように「大気澄み渡る」という表現が使われている。

枕詞のようというよりは、比喻として「大気澄み渡る」(「空気のもつとも澄んだ」)地という表現をメキシコ市に用いているのが、ロベルト・ボラーニョだ。『野生の探偵たち』第二部第二十四章の語り手アウクシリオ・ラクチュールはこう語る。

というのも、誰もが知っているか考えているか想像しているとおり、DFで生活するのは簡単なことですが、いくらかのお金を持つているか、奨学金をもらうか、仕事を持つかしてさえない

ればという意味で、わたしには何もなかったのです、空気のもつとも澄んだ土地にやってくるまでの長い道のりでわたしからいろいろなものが抜け落ちてしまったのですが、その中には、どんな仕事でもこなすエネルギーも含まれていたのです。(上、二六七頁、傍点引用者)

ウルグアイ人アウクシリオ・ラクチュールは、彼女が住んでいた一九六〇年代のメキシコ市、あるいはメキシコ連邦首府(DF)を言い換え、「空気のもつとも澄んだ土地」と言っている。

極めつけは小説家カルロス・フエンテスだ。彼の最初の長編小説は、その名も『大気澄み渡る地』*La región más transparente* (二九五八年)という。原語を示せば、レイエスの表現には何語か(「空気が」に相当する語句)足りないけれども、現在確認できる日本語の紹介文(小説の翻訳はない)はどれも、「空気が」澄んだ地と補っているから、これが問題のレイエスの表現を踏まえたものであることは間違いない。だいたい、小説の最終章はまさに、「空気のもつとも澄んだ土地」と題されている。

レイエスのエピグラフはこのように、受け継がれ、再生産され、誰もが踏襲するひとつのトピックに転じている。

皮肉なことに大気汚染が問題となり、世界で最も空気の汚い都市との汚名を着せられた後のメキシコ市しか知らない私たちにとっては意外なことかもしれないが、湖上の都市メキシコは、古来その澄んだ空気とそこに展開される美しい景色で知られてきたのだった。大気汚染以後も繰り返されるこうした文学的なトピックは、しかし、そこがかつてそういう美しい土地であったことを絶えず思い出させてくれるだろう。そしてその透

明な空気を誇る土地の中央には大神殿がそびえている。私たちが日常的に目にするメキシコ市中央広場は、その表面の層を剥がせば、そういう相貌を露わにするのだった。

注

本論は二〇一一年十一月二十六日(土)立教大学内で行われた、同大学ラテンアメリカ研究所主催の講演会「第四十二回現代のラテンアメリカ ラテンアメリカの都市を歩く——文学と建築の視座から」における講演内容の、約三分の一を文章化したものである(他の三分の一は同大学同研究所『立教大学ラテンアメリカ研究所報』第四十号に掲載予定)。個人的な体験から語り起しているのは、講演会という性質を考慮に入れていることである。

* 『アナワクの眺め』末尾には、「マドリード 一九一五年」の記述がある(レイェス、33)。ただし、出版は一七年。

文献一覧

- Gamio, Manuel, 1992: *Forjando patria* (México, Porrúa)
- López Luján, Leonardo & Colin McEwan (coordinador), 2010: *Moctezuma II: Tiempo y destino de un gobernante* (México, Instituto Nacional de Antropología e Historia)
- Matos Moctezuma, Eduardo, 2003: *Vida, pasión y muerte de Tenochtitlan* (México, FCE)

——(coordinador), 1999: *Excavaciones en la catedral y el sagrario metropolitanos: Programa de arqueología urbana* (México: Instituto Nacional de Antropología e Historia)

Monsiváis, Carlos, 2005: “Prólogo” a Reyes (2005), pp. 7-65.

Reyes, Alfonso, 2008: *Visión de Anáhuac* (1519) (『アナワクの眺め』二言語版、柳原孝敦訳) (Monterrey, Universidad Autónoma de Nuevo León)

——, 1956: *Obras Completas, Tomo IV: Simpatías y diferencias* (1921): “La musa de la Geografía” (?1919?), pp. 70-73; “La poesía del Archivo” (?1919?), pp. 74-77.

——, 2005: *México, coord. de Carlos Fuentes, pról. de Carlos Monsiváis* (México: FCE / Cátedra A. R. del Tecnológico de Monterrey)

V. A., 1992: *La ciudad iberoamericana* (Valencia: Generaliat Valenciana)

V.A., 1997: *La ciudad hispanoamericana: El sueño de un Orden* (Madrid: Centro de Estudios Históricos de Obras Públicas y Urbanismo / Centro de Estudios y Experimentación de Obras Públicas)

カルペンティエール、アレホ、二〇〇一年、『春の祭典』柳原孝敦訳(国書刊行会)

デイーアス・デル・カステイリヨ、ベルナル、一九八六年、『大航海時代叢書エクストラ・シリーズIII メキシコ征服記』小林一宏訳(岩波書店)

ボラーニョ、ロベルト、二〇一〇年、『野生の探偵たち』上下、柳原孝敦、松本健二訳(白水社)

落合一泰、一九九六年、『文化間性差、先住民文明、レイスタンクシオン：近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費』(『民族学研究』61巻1号、五二―八〇頁)

野谷文昭、二〇〇三年、『失われた映画館』『マジカル・ラテン・ミステリー

ツアー』（五柳書院）、二五二―二五四頁。

柳原孝敦、二〇〇七年、『ラテンアメリカ主義のレトリック』（エディマン
／新宿書房）

――、二〇一〇年、『映画に学ぶスペイン語…台詞のある風景』（東洋書店）

語りの文化差に関する検討——複数の予備的調査結果を踏まえて

上原泉

はじめに

認知のあり方、感じ方はもちろんのこと、言語使用を含む社会的行動の基本的な部分の多くは人類で共通している。この点は、比較心理学や進化心理学の研究知見と照らしあわせても納得がいくだろう。しかし、個人差があるうえ、人は集団の中で、集団のルールや慣習のもとと社会生活を営んでいるため、周囲をとりまく環境や人、その集団内で形成される文化からの影響も無視できない。

本論文では、文化と行動、その中でも特に、語りとの関係性に焦点をあて、文化の違いによって語り方などのような差が生じうるのかを、複数の調査結果を紹介しながら検討していく。最初に、文化と心理・行動の関係性についての本論文の立場を述べておく。

従来、文化が一方的に個人の行動や心を規定しているかのようにとらえられてきたが、近年、個人による文化の生成という側面に注意が向けられるようになり (Levine, Logoff, Rapport, Gjerde, Azuma)、文化には個人文化という側面と、文化的経験の共有によって形成される集団文化という側面が存在すると考えられるようになった。個人文化と集団文化の関係について

では、以下のようにまとめられる (東、二〇〇三; Azuma, 2006 参照)。個人は、多様な文化をあわせもつ形で、自分独自の文化環境を有し、その個人の集まりである集団の文化は、流動的で固定化されたものとはなりえないため、集団文化の特徴を把握するのは容易ではない。異なる集団文化間の差異を検討することはさらに難しいといつてよいだろう。とはいえ、個人が幼少期から長期にわたり同じ集団文化内で生活していれば、所属集団内で共有されるような、どうふるまい、評価し、理解するのがよいかに関する認知的枠組、すなわち、日常的な出来事や事柄に関する常識的な筋書き的知識 (ライフ・スクリプト) を身につけていくと考えられる。集団文化自体が固定化されていないため、ライフ・スクリプトも変化していくものと思われるが、集団内で生活していくうえでの規範的なものとして機能しているため、劇的に変化するとは考えられず、その変化は徐々にすすむものと思われる。一般的によくいわれる、行動や心理面でみられる文化差は、集団間のライフ・スクリプトの差異として現れるのではないか、すなわち、異なる集団文化間では、そのスクリプトの分布や内容に差があるため、ときとして、同じ出来事に対する解釈や感じ方、対処の仕方等で違いが生じるのではないかというのが、本論文

の考え方である。

次に、文化を心理学で追究する上での、理論と実証の関係についての本論文の立場を述べておきたい。文化にはあまりにも多くの要素が含まれるため、それらを説明するための理論のレベルやタイプはいろいろあり得るが、心理学における文化研究の現状は、多くの文化的知見・事象の説明のよりどころとなるような理論があるとはいいがたく、文化的事象に関する（偏った見方や解釈を払拭するだけの）実証的なデータも充分ではないといつてよいだろう。

そのような状況においては、文化のどの部分を追究するのかを明確に焦点化し、地道に調査を積み重ねていくという方法が賢明ではないかと考えている。研究の進め方として、既存の理論あるいは（自ら提唱する）新理論を検証するような調査・実験を行っていくという方法もあるが、今述べたとおり、文化差に関して、確固たる理論があるとはいえない混沌とした状況では、無理に理論に固執することなく、データ収集とその結果に対する説得力のある解釈を提示していく、という作業の積み重ねが必要ではないかと考える。時間はかかるだろうが、調査結果を積み重ねていきながら理論を形成していくという方法が、より誤解のない客観的な知見提供へとつながっていくのではないかと思われる。

文化差に関しては、依然として「西洋文化 vs 東洋文化」という二分法的な視点、さらに「西洋⇨個人主義、東洋⇨集団主義」（当該研究分野ではそのような見方は少なくなってきたが）という見方が強い。しかし、近年の知見から、諸文化をこのような単純な図式では決して把握しきれないこと、同じ「東洋

文化圏」といわれる文化間にもさまざまな差があること、どの文化も、その文化なりの個人主義的部分、集団主義的部分の双方を持ちあわせていることなどが示されてきている（増田・山岸、二〇一〇；高野・櫻坂、一九九七；山本、二〇〇八他）。この流れを受け、本論文でも、文化差の調査を実施する際に、二分法的な対極的な比較を避けるため、三文化間（以上）での比較、さらに、同一文化圏内の比較（国内比較）や性差、世代差もあわせて調査することが必要だとの立場をとる。とはいえ、筆者が関わった調査のうち、三文化間比較を行えたのは、一部の調査のみで、二文化のデータしか得られなかった調査もある。二文化間比較のデータの解釈には、対極的な比較になりすぎないように注意したつもりである。

以上のような立場、考えのもと、以下では、過去に筆者が関わった、語りと他関連事象の文化差に関する調査結果を中心に紹介していく。なお、語りに注目するのは、語りには、人が経験や行為をどうとらえ、どう意味づけているかが現れており（Bruner, 1990）、そのような語りは、幼少期からの社会生活の中で身につけ蓄積してきた文化的なライフ・スクリプトに基づき生成されると考えられるからである（東、二〇〇七）。

自己についての語りと文化差

本章では、自己についての語りに関する文化差を検討した調査結果をみていく。日本、中国、米国の大学生を対象に、向田・東（二〇〇七）、Mukaiida, Azuma, Crane, & Crystal (2010) は、自

分の将来の一時点において自分がどうなっているかを予想させる作文課題を、高崎・東(二〇〇七)は、過去に行った目標志向的な努力について書かせる作文課題を実施している。これらの調査結果の概要を順に紹介したい。

向田・東(二〇〇七)、『Mukaiidaら(2010)』では、「十年後のある一日」の生活について、行動、内面を含め詳しく書くようもとめている。その結果、「情景描写」や「日常生活」に関する記述の割合は、日本、中国の学生より米国の学生において有意に高く、仕事への言及は三つの国においても多かつたという。しかし、「仕事上の具体的な行動」は中国の学生がもつとも高い割合で言及し、日本の学生での言及の割合がもつとも低かつたという。「具体的な職業」への言及は、日本の女子学生で顕著に低いため、日本人学生全体での言及率も有意に低くなっていたという。「家族に関する記述」は米国の学生でもつとも多くみられ性差はなく、中国の学生では言及の割合が低く性差もなかつたが、日本の学生においては性差があり男性よりも女性で有意に多く述べており、しかも、「家庭と仕事の両立」に言及していたのは、日本の女子学生のみであったという。「一生懸命」「頑張っている」といった、前向きで意欲的な行動スタイルの記述は、中国において半数近くともつとも多く、「肯定的感情」の記述は、中国、米国の学生が七割以上と比較的高かつたのに対し、日本の学生の記述の割合は、半数程度と低かつたという。国別の物語の傾向として、日本の学生の記述は、性差が著しく伝統的な役割観が反映されており、具体的な行動より役割や立場への言及が多かつたという。中国の学生の記述は、男女問わず、仕事面での記述が多く具体的にあり、否定

的な部分も言及されるが前向きな姿勢が伝わる物語になっていたという。米国の学生の記述は具体的で、仕事より家族関係の記述が特に詳しく対人関係を強調する物語であり、否定的な要素がなく、ハッピーエンド的な描かれ方だったという。一般的には、東洋文化圏で、より対人関係を重視するイメージを持たれがちだが、作文結果は逆になっている点は興味深い。この結果について、向田・東(二〇〇七)は、今後の追究が必要だとしながら「他者と切り離されていることが前提となっている社会では、あえて人とのつながりを強調する必要があるのかもしれない」(二二頁)と述べている。物語が具体的に性差が少ないという点で中国と米国の学生で共通しているなど、「西洋文化 vs 東洋文化」という枠組みではこの調査結果はうまく解釈できないことがわかる。

高崎・東(二〇〇七)では、ここ一、二年以内に(中国では「一年以内に」、米国では「数カ月以内に」と教示)目的を達成するために一生懸命努力したことについて詳しく記述するようもとめている。その結果、内容面では、「学業」についての記述は米国の学生より日中の学生のほうが有意に多く、全体的に少ないとはいえず、「進路」に関する記述は中国の学生において日米の学生より有意に多く、「対人関係」と「他の人のため」という記述は、米国の学生において日中の学生よりも有意に多かつたという。何のために努力したかについては、日本の学生において「達成／競争」の記述が中米より有意に多く、米国の学生では「内発的」への言及が、中国の学生では「報酬／罰」への言及が他二国の学生よりも有意に多かつたという。「目標の明確な記述」は日本の学生において有意に多かつたが、「結果に関

する記述」や「結果に対する気持ち」は米国の学生において有意に多く、「プロセス（手段、努力中の気持ち）」の詳細は日中で異なる部分があるとはいえ、「プロセス」については、日中の学生のほうが米国の学生よりも有意に多く言及していたという。数量化三類の分析結果も踏まえ、国別の物語の傾向を以下のようにまとめている。日本の学生では、学業の達成を目的としたものが多く、目的の記述とプロセスの記述は明確だが、結果の記述が曖昧な傾向にあり、中国の学生では、目標の記述は曖昧だが日本と同様にプロセスに関する記述が多い傾向にあるものの、「報酬／罰」を目的に努力したとする記述が他二国の学生よりも多かったという。米国の学生では、「身の回り／生活」面で「内発的に」努力したと書く傾向がみられ、「結果に関する記述」が明確であったという。結果の記述を重視する米国とは異なり、努力プロセスを重視する傾向が、日中で共通しているようにみうけられるが、努力内容や目標などの記述では日中間で差異がみられ、この結果も、「西洋文化 v s 東洋文化」という単純な枠組みでは説明しきれないことを示している。しかも、語りのスタイルが、高崎・東（二〇〇七）の過去の努力の記述では日中で似ている部分があるもの（結果よりプロセスを詳しく語るスタイル）、向田・東（二〇〇七）の将来の自分に関する記述では、内容は大きく異なるとはいえ、むしろ中米で似ている部分がある（明るい未来を具体的に語るスタイル）ことが示され、語る内容によって、文化差の現れ方が異なってくる可能性を示唆しており、一文化圏内にも多様な要素が含まれ、各文化圏を単純には特徴づけられないことがわかる。

次に、日本、中国、米国の三国間比較ではないが、本研究室で日本とブラジルの学生を対象に行われた、自己紹介に関する予備的調査について方法も含め少し詳しく紹介したい¹。この調査では、東京都内の一大学の日本人学生七一人（男子学生一四人、女子学生五七人）、ブラジル人学生二五人（男子学生一人、女子学生一四人）を対象に²、「今、あなたが新しい学校（大学、専門学校など）に入学したと想像してください。そして初めてクラスの皆に会って自己紹介をする場面を想定してください。その時、あなたはどのように自己紹介をしますか？ 五行以上で書いてください」と、簡単な自己紹介の記述をもとめる質問紙調査を実施した。分析に際し、コーディングカテゴリーを作成し、そのカテゴリーに基づき、調査者と別のコーディング者が独立に、記述内容を分類したところ、分類判定が九六%一致することが確認され、一致しなかった部分については話し合いで判定を行った。その結果について、まず、二国間で有意差のみられた項目をみていく。「やあどうも」といった挨拶を記述した割合は、日本人学生（一・四%）よりもブラジル人学生（六八・〇%）で有意に高かったが（ $\chi^2(1, N=96)=53.82, p < .01$ ）、「はい、こんにちは」と記述した割合は、ブラジル人学生（4.0%）よりも日本人学生（二三・九%）で有意に高かった（ $\chi^2(1, N=96)=4.83, p < .05$ ）。「元氣？」という呼びかけ」の記述は、日本人学生（一・四%）よりもブラジル人学生（二〇・〇%）で有意に高かった（ $\chi^2(1, N=96)=53.82, p < .01$ ）。「会えて嬉しい」といった記述は日本人学生ではみられなかったが、ブラジル人学生（二二・〇%）で見られた（ $\chi^2(1, N=96)=8.80, p < .01$ ）。「出身地」の記述は、ブラジル人学生（四〇・〇%）より日本人学生（八四・五%）で有意に多くみられたが（ $\chi^2(1,$

$N=96=18.55, p < .01$)、「現在住んでいる場所」の記述は、日本人学生 (11.3%) よりブラジル人学生 (32.0%) で有意に多くみられた ($\chi^2(1, N=96)=5.72, p < .05$)。「趣味・特技」への言及は、ブラジル人学生 (36.5%) より日本人学生 (76.1%) において有意に多かった ($\chi^2(1, N=96)=13.15, p < .01$)。「現在の学校・仕事関係」の記述の割合は、日本人 (16.9%) よりブラジル人 (60.0%) で有意に高かった ($\chi^2(1, N=96)=17.00, p < .01$)。「過去の部活」に関する記述は、ブラジル人学生ではなかったが、日本人学生では二割強 (21.1%) みられた ($\chi^2(1, N=96)=6.26, p < .05$)。「年齢」の記述は日本人学生 (5.6%) では少なかったが、ブラジル人学生では4割強 (44.0%) みられた ($\chi^2(1, N=96)=20.64, p < .01$)。日本での定番の文言といえる「よろしく願います」という記述はブラジル人学生ではなかったが、九割近くの日本人学生 (87.3%) でみられた ($\chi^2(1, N=96)=61.64, p < .01$)。「聴衆に年齢や出身などを尋ねる」記述は、ブラジル人学生 (44.4%) でのみみられた ($\chi^2(1, N=96)=35.28, p < .01$)。

なお、有意差がなかった記述カテゴリーは、「名前を述べる」(ブラジル人学生一人を除く全員、 $\chi^2(1, N=96)=2.87$)、「初めまして」(日本 32.2% 、ブラジル 20.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=1.38$)、「ありがとう」(日本 1.4% 、ブラジル 4.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=0.61$)、「通学手段」(日本 2.8% 、ブラジル 4.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=0.09$)、「過去の学校・仕事」(日本 16.9% 、ブラジル 24.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=0.61$)、「未来の学校・仕事」(日本人 21.1% 、ブラジル人 24.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=0.09$)、「現在の部活」(日本 7.0% 、ブラジル 0% 、 $\chi^2(1, N=96)=1.86$)、「未来の部活」(日本 11.3% 、ブラジル 0% 、 $\chi^2(1,$

$N=96=3.07$)、「性格・特徴」(日本 14.1% 、ブラジル 20.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=0.49$)、「仲良くしてください、声をかけてください」(日本 35.2% 、ブラジル 20.0% 、 $\chi^2(1, N=96)=1.99$)であった。同じ自己紹介といっても、日本とブラジルで違いがあることが示されている。簡潔にまとめると、聴衆者に話しかけるような語り(聴衆者への挨拶や質問)がブラジル人学生で多くみられ、「出身地」や「過去の部活」(いずれも過去の自分)、趣味や特技への言及は日本人学生で多く、「現在の学校や仕事関係」、「現在住んでいる場所」については、ブラジル人学生のほうが多く言及していた。一見すると、日本人学生の自己紹介の内容は、日本の履歴書で記述がまとめられる内容と一致しているようにみうけられる。就職や応募時などにもとめられる、履歴書に書くべき内容に、文化的差異がみられる可能性を示唆しており、興味深い。一方、ブラジルでは、一方的に自分について語るスタイルではなく、聴衆に質問を投げかけたり、自分に質問したいことをきくよう促すなど、より双方向的に自己紹介が行われる可能性が示された点に注目している。ブラジル人学生内で共通する、自己についての語りのパターンが見出されたとはいえ、調査後に若干よせられたコメント等から判断すると、そもそも、クラス、集団メンバー同士が初対面るときに、定番の自己紹介を行うという習慣は日本で顕著である可能性が高く、自己を語るとなったときに、自己のどのような側面を語るのかについては、他の課題でも検討していく必要があると思われる。

以上、三種類の調査結果を紹介した。三文化間比較により、相違ばかりが目立つことになる二文化間比較で陥りやすい二

極対立的な解釈を避けることができ、それぞれの文化に複数の要素が含まれること、文化間（日中間、中米間、日中米の三国間など）で共通する部分もあること、が把握されやすいことがわかる。三つ目の調査結果は、データ数が少ない上、調査内容が非常に限られていたため、この結果からだけでいえることは少ないが、従来、ほとんど比較対象として追究されてこなかったブラジルと日本の学生間の差や共通する部分を少しでも示唆できたことは、今後の文化研究にとつて貴重な参考資料となるだろう。一般的な自己観を探る調査として、「二十の私」テスト（特に文脈を設定せずに対象者に「私は―――です」を提示し、―――部分に自由に文章を書かせる課題）が複数の文化圏を対象に、過去実施されているが、欧米人よりも、中国、日本など東アジア圏で、社会的属性や役割を記述する割合が高いという知見（Triandis, McCusker, & Hui, 1990; Bond & Cheung, 1983 他）が知られている。前述の、将来の自己記述の調査や自己紹介の調査において、まさに、日本人学生が属性や役割を記述する割合が高かった点は、この過去の知見に共通している。ただし、同じ東アジアとはいえ、日中で自己観やその表出法がかなり似通っているかというところではないことも、前述の二調査から明らかであり、「自己についての語り」の文化差を把握するには、今後さまざまな課題、方法により、多くの文化圏のデータを蓄積していく必要があるだろう。

物語の人物記述に関する文化差―日中米比較研究の中間報告

本章では、物語の人物記述の際、どのような点を重視するかに関する文化差を検討した調査について、方法も含め詳しく紹介する。

上原・東は初期の調査分析で（上原・東、二〇〇七）、日本、中国、米国の学生を対象に、物語の主人公に関する情報で重視する項目を評定させた後、偏った評定項目を除いて因子分析を行い³、三国間で共通する因子構造（三因子…「プロフィール・履歴書」因子、「成功者」因子、「近親者との関係」因子）を見出し、因子得点による差の有無を検討した。その結果、「プロフィール・履歴書」因子得点は日本において中国・米国より有意に高く、「成功者」因子得点は日本・中国が米国より有意に高いことを見出した。各項目レベルの分析でも、日本の学生はプロフィール的な情報を重視し、中国の学生は、皆に評価されるような前向きな人物像を重視する傾向が強いことを見出している。

その後の調査で、データ数が非常に少なかった米国人大学生のデータを多数追加することができたため、分析法を見直し、新たな分析を行った（上原・東・Crane、発表準備中）。その分析結果の詳細を、調査方法とあわせて以下で紹介する。

調査では、日本人大学生二三五人（男子学生一〇二人、女子学生一三三人、平均年齢一九・七歳）、中国人大学生八一人（男子学生四〇人、女子学生四一人、平均年齢二〇・九歳）、米国人大学生一六八名（男子学生九五名、女子学生七三人、平均年齢一九・〇歳）⁴を対象に、「物語を作成するのに、主人公の特徴

として示した三二の情報がどれくらい重要だと思ふか」を三段階（一…重要でない。二…どちらともいえない。三…重要である。）で評定させ、さらに、三二項目のうち物語作成のために特に重要だと思われる五項目を選択させた。本分析では、特に評定値に偏りのある項目を除くことはせず、そもそも三国内で因子構造自体が異なる可能性を想定し、三国のデータで独立に因子分析を行った（主因子法、スクリープロットにより因子数を決定（各因子の固有値はいずれも1より大きい）、プロマックス回転）。分析過程は以下のとおりである。共通性が〇・一六、因子負荷が〇・三二五に満たない項目を削除し、因子負荷が一つの因子について〇・三二五以上で、かつ二因子にまたがって〇・三二五以上の負荷を示さない項目を各国データにおいて選出することにした⁵。最終的に、日本データでは十五項目、中国データでは十三項目、米国データでは十八項目が選出された。

因子分析の結果、三国間で異なる因子構造が存在する可能性が示唆された。日本のデータからは四因子が抽出された（累積寄与率五二%、表1参照）。第一因子は、将来の希望や最近の入賞、最近の精神状況や部屋の状況、性質といった項目から構成されており、いずれも、現在の自分に関する情報であるため「現在の自分」因子と命名した。第二因子は、生い立ち（過去の苦勞や仕事の成功）、性格、結婚など、第一因子と似通った個人的な情報からなるが、第一因子の情報より、履歴書やプロフィールに記入されることの多い内容であるため「プロフィール」因子と命名した。第三因子は、収入の高さ、十分な貯金、優秀な学業成績といった項目から構成されているた

表1: 因子負荷(日本)

質問項目	因子			
	因子1	因子2	因子3	因子4
28. 将来の希望は本を出版することである。	0.72	0.06	-0.11	-0.74
24. 最近、エッセイコンテストで入賞した。	0.70	-0.06	-0.10	-0.07
23. きまじめである。	0.40	0.05	0.15	0.05
30. ときどきひどくふさぎこむ。	0.39	-0.11	0.20	0.05
11. 掃除をあまりしないので部屋は散らかっている。	0.38	0.18	0.09	0.08
2. 友だちに人気がある。	-0.17	0.70	-0.18	0.00
6. 子どもの時父親が亡くなり経済的に苦勞した。	0.17	0.50	-0.07	0.14
21. 仕事で成功した。	-0.03	0.50	0.34	-0.12
5. 人から注目されるのが好きである。	0.18	0.43	0.00	-0.06
8. 結婚している。	0.00	0.39	-0.05	0.11
13. 収入は同年齢の人の中では上位である。	-0.03	0.20	0.64	-0.05
31. 十分な貯金を持っている。	-0.02	-0.16	0.62	0.02
19. 学校の成績は上位であった。	0.08	-0.16	0.60	0.08
12. 先祖の墓参りや法事は大切だと考える。	0.00	0.03	-0.02	0.81
16. お正月には家族が集まる必要があると考える。	-0.04	0.07	0.07	0.53

表2: 因子間の相関係数(日本)

因子	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1	1.00			
因子2	0.31	1.00		
因子3	0.13	0.17	1.00	
因子4	0.20	0.00	0.12	1.00

め「成功者」因子と命名した。第四因子は、家族、先祖に関する項目から構成されているため「親類との関係」因子と命名した。四つの因子間の相関を表2に示した。因子一と因子二の間に弱い正の相関関係がみとめられる。中国のデータからは三因子が抽出された（累積寄与率四八%、表3参照）。第一因子は、夫の高い収入、十分な貯金、収入の高さ、若い外見、結婚といった項目から構成されているため「成功者」因子と命名した。第二因子は、家族、先祖、近所づきあい、夫との仲のよさに関する項目から成っているため「親類・近所との関係」因子と命名した。第三因子は、幼少期の

苦勞に関する項目も含むが、仕事内容に関わっているため「仕事」因子と命名した。三つの因子間の相関を表4に示した。米国のデータからも三因子が抽出された。因子数は中国と共通するが、その内容はむしろ日本の構造に似ていた（累積寄与率四五%、表5参照）。第一因子は、結婚、趣味、最近の精神状況、性質、生い立ちなどの項目からなっているため「履歴書・プロフィール」因子と命名した。第二因子は、収入の高さ、十分な貯金、若い外見、夫の高い収入、優秀な学業成績に関する項目から成るため、「成功者」因子と命名した。第三因子は、夫との仲のよさ、家族、近所づきあい、生き方や将来への希望に関する項目から成っているため、「親類・近所との関係や生き方」因子と命名した。三つの因子間の相関を表6に示した。因子一と因子二の間、因子二と因子三の間に、弱い正の相関関係がみとめられる。

この因子分析結果から何が読み取れるか。見出された因子自体は、三国間で大きく異なっているわけではない。「成功者」因子と「親類（近所）との関係」因子は、構成する項目内容が少し異なっているものの、三国で共通して抽出された。しかし、物語の主人公に関する情報を評価する際の視点が、三国間で若干の違いがある可能性も読み取れる。中国においてのみ、日本・米国と異なり、「プロフィール・履歴書」に関わる情報が因子として抽出されず、「仕事」因子が抽出された。プロフィール情報、日常的な情報といった視点が希薄な可能性が高い。日本では、第一因子、第二因子のいずれもが「プロフィール・履歴書」に関わってくるような情報であり、米国では、親類、近所とのつきあいに關する項目と生きる姿勢に關する項目が一緒

表3: 因子負荷(中国)

質問項目	因子		
	因子1	因子2	因子3
15. 夫には十分な収入がある。	0.74	0.06	-0.11
13. 収入は同年齢の人の中では上位である。	0.70	0.09	-0.16
31. 十分な貯金を持っている。	0.67	-0.12	0.31
14. 実際の年齢より若く見える。	0.63	-0.04	0.10
8. 結婚している。	0.46	-0.16	-0.22
16. お正月には家族が集まる必要があると考える。	-0.01	0.69	-0.23
12. 先祖の墓参りや法事は大切だと考える。	-0.13	0.42	0.23
20. 近所づきあいを大切にしている。	-0.06	0.42	0.21
18. 夫と仲がよい。	0.27	0.40	-0.08
21. 仕事で成功した。	0.18	0.30	0.58
9. IT関連の仕事にたずさわっている。	0.05	-0.18	0.41
28. 将来の希望は本を出版することである。	-0.19	0.14	0.38
6. 子どもの時父親が亡くなり経済的に苦勞した。	-0.17	0.05	0.33

表4: 因子間の相関係数(中国)

因子	因子1	因子2	因子3
因子1	1.00		
因子2	0.18	1.00	
因子3	0.15	-0.18	1.00

に第三因子を形成していた点が注目し値する。実際にどのような項目が各国で重視されているのか詳細を検討するため、三二項目それぞれが三二項目それぞれに特に重要なと思われる五項目を選択させた結果について順にみていく。

まず、三二項目に対する評定結果であるが、各国での項目ごとの評定の比率と有意差について記した表7にあるとおり、項目七、一八、二〇、二二、二九の五項目を除く二七項目で、評定の仕方に国間で有意差があることがわかる。日本では、項

表5: 因子負荷(米国)

質問項目	因子		
	因子1	因子2	因子3
8.結婚している。	0.70	-0.02	0.19
30.ときどきひどくふさぎこむ。	0.63	-0.11	-0.12
4.絵を書くのが趣味である。	0.57	-0.07	-0.01
23.きまじめである。	0.56	-0.07	-0.14
5.人から注目されるのが好きである	0.50	0.17	-0.11
9.IT関連の仕事にたずさわっている。	0.49	0.09	0.06
6.子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した。	0.47	0.04	-0.15
27.夫は高校の同級生だった。	0.41	0.07	0.15
13.収入は同年齢の人の中では上位である	0.09	0.70	-0.12
31.十分な貯金を持っている	-0.04	0.58	0.10
14.実際の年齢より若く見える	0.03	0.57	-0.14
15.夫には十分な収入がある	0.11	0.56	0.12
19.学校の成績は上位であった	-0.16	0.46	0.07
18.夫と仲がよい。	0.33	-0.11	0.64
16.お正月には家族が集まる必要があると考える。	-0.00	0.18	0.61
20.近所づきあいを大切にしている。	-0.16	-0.14	0.53
29.一生懸命していれば、いつかいいことがある。	-0.04	0.01	0.48
25.将来に希望をもっている。	-0.27	0.09	0.45

表6: 因子間の相関係数(米国)

因子	因子1	因子2	因子3
因子1	1.00		
因子2	0.33	1.00	
因子3	0.05	0.28	1.00

目四(絵を描くのが趣味)、項目五(人から注目されるのが好き)、項目八(結婚している)、項目一(掃除をあまりしないので部屋が散らかっている)、項目一三(収入が同年齢の中では上位である)、項目二二(小型の犬を飼っている)、項目二四(最近、エッセイコンテストで入賞した)、項目二七(夫は高校の同級生だった)、項目二八(将来の希望は本の出版)、項目三〇(ときどきひどくふさぎこむ)など、趣味や性質などのプロフィールの情報や、より日常的な内容が、中国、米国より有意に重視されたが、米国では、このようなプロフィール情報は軽視される傾向にあった(項目一、項目一五、項目二二、項目二四、項目二七の判定は有意に低かった)。一部の個人的情報、例えば、項目九(IT関連の仕事にたずさわる)、項目一四(実際の年齢より若くみえる)、項目一五(夫には十分な収入がある)、項目一九(学校の成績は上

表7: 32項目に対する評定の比率

(1:重要ではない、2:どちらともいえない、3:重要である)

項目内容	日本			中国			米国			χ ² 値
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
1.健康に注意している	31.9%*	37.9%	30.2%	7.4%*	30.9%*	61.7%*	27.1%	51.2%*	19%*	52.6**
2.友だちに人気がある	13.2%	20.4%**	66.4%**	3.7%*	17.3%*	79.0%*	18.5%*	45.2%**	36.3%**	56.9**
3.毎晩その日の仕事の反省をする	33.2%*	30.2%**	36.6%	27.2%	35.8%	37.0%	22.0%*	44.0%**	33.9%	9.8*
4.絵を描くのが趣味である	24.7%**	27.7%	47.7%**	48.1%**	32.1%	19.8%**	51.8%**	32.7%	15.5%**	58.9**
5.人から注目されるのが好き	20.4%**	23.8%**	55.7%**	30.9%	40.7%**	28.4%**	39.3%**	36.3%	24.4%**	47.5**
6.子どもの時父をなくし経済的に苦労	18.3%*	17.4%**	64.3%**	38.3%**	32.1%	29.6%**	20.8%	37.5%**	41.7%**	45.0**
7.先週俳優にレストランでサインもらう	69.4%	19.1%	11.5%	77.8%	21.0%	1.2%	74.4%	17.9%	7.7%	8.6
8.結婚している	14.5%**	23.8%**	61.7%**	30.9%	33.3%	35.8%**	33.3%**	38.1%**	28.6%**	49.2**
9.IT関連の仕事にたずさわる	34.5%**	36.6%	28.9%**	37.0%	37.0%	25.6%	51.8%**	33.9%	14.3%**	17.1**
10.数人の親友がいる	8.5%	24.3%**	67.2%**	8.6%	18.5%**	72.8%**	11.9%	40.5%**	47.6%**	22.1**
11.掃除をあまりせず部屋は散らかって	26.0%**	36.2%	37.9%**	35.8%	38.3%	25.9%	50.6%**	38.1%	11.3%**	42.5**
12.先祖のお墓参りや法事は大切	40.4%	30.2%	29.4%	53.1%**	33.3%	13.6%**	28.0%**	39.3%	32.7%	19.5**
13.収入は同年齢の人の中で上位	23.8%	32.3%**	43.8%**	19.8%	51.9%**	28.4%	32.1%**	42.9%	25.0%**	21.9**
14.実際の年齢より若くみえる	19.6%**	29.8%**	50.6%**	17.3%	34.6%	48.1%	34.5%**	40.5%**	25.0%**	30.9**
15.夫には十分な収入がある	24.3%**	42.6%**	33.2%**	37.0%	37.0%	25.9%	48.8%**	41.7%	9.5%**	40.8**
16.お正月には家族が集まる必要がある	38.3%**	33.6%	28.1%**	12.3%	32.1%	55.6%**	23.2%	39.9%	36.9%	31.1**
17.しっかり目標をたて人生を自分で開く	6.8%	17.4%	75.7%	2.5%	12.3%	85.2%**	5.4%	25.6%**	69.0%**	9.8*
18.夫と仲がよい	12.3%	21.7%	66.0%	9.9%	24.7%	65.4%	13.1%	25.0%	61.9%	1.3
19.学校の成績は上位であった	37.9%	34.9%	27.2%**	28.4%**	49.4%**	22.2%	51.8%**	33.9%	14.3%**	20.0**
20.近所づきあいを大切にしている	23.4%	37.0%	39.6%	14.8%	44.4%	40.7%	19.0%	47.6%	33.3%	6.5
21.仕事で成功した	14.0%	25.5%	60.4%	4.9%	34.6%	60.5%	7.7%	32.7%	59.5%	9.1
22.小型の犬を飼っている	36.6%**	30.6%**	32.8%**	58.0%	23.5%	18.5%	73.8%**	19.6%**	6.5%**	62.8**
23.きまじめである	14.5%**	31.1%	54.5%**	1.2%**	29.6%	69.1%**	41.1%**	35.1%	23.8%**	82.4**
24.最近エッセイコンテストで入賞	40.4%**	31.9%	27.7%**	49.4%	39.5%**	11.1%	76.2%**	19.0%**	4.8%**	65.4**
25.将来に希望をもっている	10.2%*	18.3%**	71.5%	1.2%*	12.3%**	86.4%**	7.1%	34.5%**	58.3%**	28.9**
26.平凡に暮らすのがいいと思っている	19.6%**	32.8%**	47.7%**	19.8%	44.4%	35.8%	32.7%**	42.9%	24.4%**	25.6**
27.夫は高校の同級生だった	42.6%**	30.6%	26.8%**	51.9%	33.3%	14.8%	56.0%**	36.3%	7.7%**	25.0**
28.将来の希望は本の出版	26.4%	28.9%**	44.7%**	32.1%	45.7%	22.2%**	29.2%	48.8%**	22.6%**	30.7**
29.一生懸命していればいつかいいことがある	11.1%	24.7%	64.3%	9.9%	22.2%	67.9%	7.7%	29.2%	63.1%	2.6
30.ときどきひどくふさぎこむ	11.5%**	24.3%**	64.3%**	12.3%	43.2%**	44.4%	26.2%**	34.5%	39.3%**	34.6**
31.十分な貯金を持っている	34.5%	37.0%**	28.5%**	33.3%	38.3%	28.4%	32.1%	53.0%**	14.9%**	15.0**
32.くじで10万円あつた	67.2%	20.4%	12.3%	79.0%**	17.3%	3.7%*	61.3%**	29.8%**	8.9%	12.5*

χ²値、残差分析において、p < .05は、p < .01は**

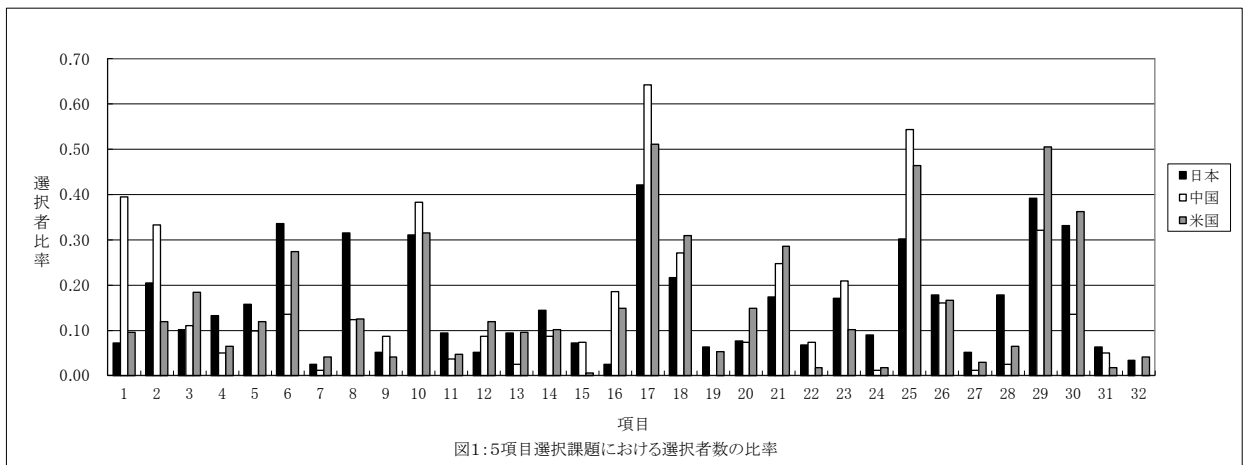
位であった)、項目三二(十分な貯金を持っている)は、日本と中国とともに、米国よりも有意に重視する傾向にあった。プロフィールの重要性判定は、中国は、日本と米国の中間にあるといった印象を受けるが、性質や日常的な内容は中国での判定は米国と同様に低いため、因子分析結果とあわせて考慮すると、個人的情報のとらえ方が日本と中国で質的に異なる可能性は高い。なお、項目二六(平凡に暮らすのがよいと思つている)は日本で有意に判定が高く、米国で有意に判定が低かつた点も興味深い。

中国において、項目一（健康に注意している）、項目二（友だちに人気がある）（米国が一番有意に低い）、項目一〇（数人の親友がいる）（米国が一番有意に低い）、項目一六（お正月には家族が集まる必要がある）（日本が一番有意に低い）、項目一七（しっかり目標をたてて、人生を自分でできりひらいていきたいと思つている）、項目二三（きまじめである）（米国が一番有意に低い）、項目二五（将来に希望をもっている）（米国が一番有意に低い）といった、人間関係を大切にして積極的に生きる姿勢に関わる項目の評定値が、有意に日本、米国より高い傾向にあった。ただし、項目一二（先祖の墓参りや法事は大切であるとの考え）が中国で日本、米国より有意に評定が低かった点（日本と米国では同程度に評定）は注目に値する。

米国においてのみ、日本、中国より有意に重視されている項目はなかった。日本、中国より有意に評定が低かった項目として、友だちづきあいや夫の個人情報に関する項目（項目二、項目一〇、項目一五、項目二七）があげられる。また、項目九（IT関連の仕事にたずさわる）、項目二三（きまじめである）、項目三一（充分な貯金を持っている）も有意に日本、中国より評定が低かった。項目六（子どもの時父を亡くし経済的に苦労した）は日本について米国が、中国より評定が有意に高く、項目一六（お正月には家族が集まる必要がある）が日本と中国の中間の評定であった。

次に、重要だと思われる五項目の選択結果についてみていく。項目ごとに、選択数をそれぞれの国の対象者数で割つてもとめた比率を図1に表した。前の項目ごとの評定結果では、プロフィール的、日常的情報の評定値が日本においてどれも高い

傾向にあったが、選択数が5個と限られ、選択が分散されたためか、日本で中国、米国より目立って高く選択されている項目は少なかった。項目八（結婚している）は日本で中国・米国より突出して高く選択されていた（ $\chi^2(2, N=484)=25.80, p < .01$ ）。ほか、日本での選択率も決して高くないとはいえ、中国、米国より有意に高く選択されていたのは、項目四（絵を描くのが趣味）（ $\chi^2(2, N=484)=7.39, p < .05$ ）、項目二四（最近、エッセイコンテストで入賞した）（ $\chi^2(2, N=484)=13.30, p < .01$ ）、項目二八（将来の希望は本の出版）（ $\chi^2(2, N=484)=20.11, p < .01$ ）であった。項目一六（お正月には家族が集まる必要がある）は、項目ごとの評定と同様に、日本で中国、米国より有意に



低く選択されていた ($\chi^2(2, N=484)=26.50, p < .01$)。

中国では、項目ごとの評定結果と類似した傾向が五項目の選択行動にも反映されていた。日本、米国より、項目一（健康に注意してやる） ($\chi^2(2, N=484)=57.34, p < .01$)、項目二（友だちに人気がある） ($\chi^2(2, N=484)=16.09, p < .01$)、項目一七（しっかりと目標をたてて、人生を自分でできりひらいていきたいと思っっている） ($\chi^2(2, N=484)=12.30, p < .01$)、項目二五（将来に希望をもっている） ($\chi^2(2, N=484)=19.21, p < .01$)、日本の選択率が有意に一番低かった）が有意に高く選択されていた。

前述の項目ごとの評定結果ではみられなかった、米国での特徴が、五項目の選択の仕方では示された。日本、中国でも比較高い選択率であったが、日本、中国より米国で有意に高く選択されたのは項目二九（一生懸命していればいつかいいことがあると思っっている） ($\chi^2(2, N=484)=7.39, p < .05$) であった。米国での選択率も高くはないとはいえ、日本、中国より有意に高く選択されていたのは、項目二（毎晩その日の仕事の反省をする） ($\chi^2(2, N=484)=7.39, p < .05$) であった。日本と同様に米国で、中国より有意に高く選択されていたのは、項目六（子どもの時父を亡くし経済的に苦労した） ($\chi^2(2, N=484)=12.04, p < .01$) と項目二〇（ときどきひどくふざぎこむ） ($\chi^2(2, N=484)=14.23, p < .01$) であった。一方、中国と同様に米国で、日本より有意に高く選択されていたのは、項目二一（仕事で成功した） ($\chi^2(2, N=484)=7.21, p < .01$) であった。

以上の結果をまとめると、物語作成の際に、日本、中国、米国の学生が重視する主人公の特徴に、国間でさまざまな類似点や違いがあることが示された。日本においては、趣味や性質、

履歴などのプロフィールの情報や日常的な内容を重視する傾向が強いが、米国においては、逆に、プロフィール的な個人情報はほぼ重視されないことがわかった。ただし米国において、日本と同様に「子どもの時父を亡くし経済的に苦労した」「ときどきひどくふざぎこむ」といった内容は重視される傾向にあり、ほか、「毎晩仕事を反省する」「一生懸命していればいいことがあると思っっている」が少し重視の度合いが高い傾向にあった点は注目に値する。中国においては、「絵を描くのが趣味」と「将来の希望は本の出版」は米国と同様に評定が低いものの、一部の個人的情報は日本と同様に重視し、他のプロフィール的情報の多くは、日本と米国の中間的な評定値であった。ただし、これらのプロフィール的な情報は、日本や米国とは異なり、中国ではひとくくりの内容としてはとらえられていない可能性が示されており（日本と米国では因子として抽出されたが中国では抽出されなかった）、単純に、プロフィール的情報のとらえ方が、日本と米国の中間とはいきれないように思われる。また、中国では、日本や米国と異なり、友人や家族との関係性、積極的に生きる姿勢に関わる項目を重視する傾向が強かった点は注目に値する。このようにみると、日本、中国、米国の反応の違いや類似度が一次元的に表現できるものではないこと、また、従来多くの分野で当たり前のようにとらえられてきた、「西洋 vs 東洋」という枠組みで今回の結果を単純には解釈できないことがわかる。一部の項目で、日本と中国で顕著に異なる特徴も示されている。項目レベルの評定値に基づき一見すると、特に個人的情報のとらえ方については、日本と米国の間に中国が位置するようにみえなくもないが、他の側面や

五項目の選択結果、因子分析結果をみると、日本と中国から、際立って米国がかけ離れているという結果では決してない。この結果は、文化差を論じるとき、多様な視点から考慮する必要があることを示唆していると思われる。

ただし、この調査結果から、日本、中国、米国の文化差を結論づけるのは尚早である。さらなる吟味が必要である。まず、原案が日本で作成されたこと、翻訳に際する項目内容の妥当性などの確認作業は、米国研究者（一名）とも行つたが、中国研究者（五名）の方が時間をかけて行つたことから、設定した項目自体が日本の特徴を反映したものになり、米国で重視されやすい項目が入らなかつた可能性が考えられる。今後、項目自体の改良と、他の国も含めたデータの蓄積により、物語ることに関する文化差についての理解が深まると思われる。

いずれにせよ、先に、自己についての語りの調査として紹介した、日本、中国、米国の比較研究結果とは、また異なる三国の特徴も示されており、興味深い。先に紹介した、自己紹介のデータで、日本の学生が自己紹介のとき、過去の部活動や、趣味を述べる割合がブラジルの学生より高いことが示されているが、主人公に関する情報でも、中国、米国より、趣味を含むプロフィール情報を重視する傾向が強いことが示され、このような情報を重視する（あるいはこのような情報に注意を向ける）ライフ・スクリプトが日本人の間で共有されている可能性は高いと思われる。

どのような物語・主人公に興味や共感を覚えるか？——日米差に関する予備的検討

直前に紹介した調査は、物語作成の際に主人公のどのような側面を重視するかに焦点をおいていたが、ここでは、どのような物語を好むかに焦点をおいて実施した、日本と米国の比較調査の中間報告（上原・東・Crane、発表準備中）を紹介したい。

この調査では、日本人大学生一二七人（男子学生二九人、女子学生九六人、性別不明二人、平均年齢一八・七歳、標準偏差〇・八三歳）と米国人大学生一〇九人（男子学生六三人、女子学生四六人、平均年齢一九・一歳、標準偏差〇・八七歳）を対象に質問紙課題を行った⁶。男女別の人数等の詳細は次のとおりであった。日本と米国あわせた（以下日米と称する）男子学生は九二人（平均年齢一九・〇歳、標準偏差〇・八一歳）、日米女子学生は一四二人（平均年齢一八・八歳、標準偏差〇・八九歳）、日本人男子学生は二九人（平均年齢一八・九歳、標準偏差〇・八二歳）、米国人男子大学生は六三人（平均年齢一九・〇歳、標準偏差〇・八一歳）、日本人女子大学生は九六人（平均年齢一八・七歳、標準偏差〇・八三歳）、米国人女子大学生は四六人（平均年齢一九・一歳、標準偏差〇・九四歳）であった。

質問紙には、ストーリーパターンが異なる4つの物語の概要が四、五行で記されており、最初に、その四つの物語に対して興味を感じられる順に1、2、3、4と順位づけ、次に、その同じ四つの物語に対して共感できる順に1、2、3、4と順位づけよう対象者は教示された。四つの物語の概要は（文言を少し省略）、①主人公（女性）が両親を早くに亡くし精神的にも経

済的にもつらい幼少期を過ごしたが、必死に勉強してエリート大学に入り、卒業後は大学の先輩との結婚、有名企業での仕事経験を経て、夫と興じた新しいビジネスで成功をおさめ大邸宅に住んでいる。②主人公（女性）は、小さい頃、花屋さんになりたいと思いながら平凡な生活をおくり、ピアノが得意でよく演奏していた。大学卒業後は仕事についたが出世は考えておらず、仕事後にスポーツジムや料理教室に通い、いつかいい人と出合いのんびりと彼と子どもと暮らせたらと思っている。③主人公（女性）は、大学卒業後、小さな印刷会社に就職し5年勤めた頃結婚し、出産を機に退職。夫とは友人の紹介で知り合い、夫は銀行の支店長である。子どもの手がかからなくなり、家族に内緒で、夜中にワープロで執筆を続け、昨日、密かにエッセイ・コンテストに応募した。④主人公（女性）は、広告業界で十年間ばかりと仕事していたが結婚を機に退職。著名な弁護士の子、子ども、犬と邸宅に暮らしよくホームパーティを開いていたが、夫の借金で離婚。その後、子どもが病にかかり治療代のため昼夜働く生活となったが、すべてがよい方向に向かうと信じている。であった。

まず、日本と米国のデータを別にして、興味の順位づけについて、四つの物語間で有意な差があるか検討したところ（平均順位と有意差の結果の詳細は表8を参照）、日本、米国でもともに、有意差がみとめられた（フリードマン検定、日本： $\chi^2_{(1)}=18.8$ 、米国： $\chi^2_{(1)}=27.6$ 、 $p < .05$ ）。多重比較（ボンフェローニ）を行ったところ、日本、米国いずれにおいても、物語②は、有意に他の三つの物語より興味の度合いは低いと判断されていたが、①③④の物語間の興味の度合いに有意差はみとめられなかった。同様に、共感の度

合いの順位づけについて、各国で四つの物語間で検討したところ（平均順位と有意差の結果の詳細は表9を参照）、有意差がみとめられた（フリードマン検定、日本： $\chi^2_{(1)}=6.8$ 、米国： $\chi^2_{(1)}=84.4$ 、 $p < .05$ ）。多重比較（ボンフェローニ）を行ったところ、日本では、物語②、③いずれもが、物語④、①よりも共感の度合いが有意に高いと判断されていたが、物語②と③の間、物語④と①の間では共感の度合いに有意差はみとめられなかった。米国では、有意に、物語②が一番共感をもたれ、次に物語③が共感をもたれ、①と④の間では共感の度合いに有意差はみとめられなかった。四つの物語に対する興味の度合いは、日米で同じであり、共感の度合いにおいてのみ若干異なる部分があったが（日本では②と③の間で有意差はなかったが、米国では有意に② \vee ③であった）、類似する結果であった。

性差、性差と国の交互作用の有無をみるため、男女別、各国における男女別に、四つの物語間の興味の度合いと共感の度合いについて検討した（平均順位と有意差の結果の詳細は表8、表9を参照）。おおよその傾向は一致していたが、若干、有意差の出方に違いがみられた。まず、興味の度合いについてだが、日本人男子大学生と米国人女子大学において、四つの物語間で有意差がみられなかった。また、日本人女子大学生においては、物語②のランクが他の群と同様に一番低かったものの、物語③との有意差はみられなかった。次に、共感の度合いについてだが、日本人男子大学生では①のみが、②③よりも有意に共感の度合いが低いことが示された。一方、米国人女子大学生では、②が一番共感の度合いが有意に高く、④が一番共感の度合いが有意に低いものの、①と③の間で有意な差が認められなかつ

表8: 4つの物語に対する順序評定(興味の度合い)

属性	興味の度合い(平均ランク)				χ^2 値	多重比較(Bonferoni、有意水準5%)					
	物語①	物語②	物語③	物語④		①と②	①と③	①と④	②と③	②と④	③と④
日本人大学生	2.35	2.91	2.46	2.28	18.8**	*			*	*	
米国人大学生	2.48	3.00	2.43	2.09	27.6**	*			*	*	
男子大学生(日米)	2.47	3.07	2.42	2.04	29.5**	*			*	*	
女子大学生(日米)	2.36	2.89	2.48	2.27	18.8**	*			*	*	
日本人大学生(男子)	2.59	2.90	2.28	2.24	4.9						
米国人大学生(男子)	2.41	3.14	2.49	1.95	27.3**	*			*	*	
日本人大学生(女子)	2.26	2.93	2.54	2.27	16.9**	*				*	
米国人大学生(女子)	2.57	2.80	2.35	2.28	4.6						

* χ^2 値(Friedman)において $p < .05$ は*、 $p < .01$ は**、多重比較で有意差がみられた箇所は*を記した。

表9: 4つの物語に対する順序評定(共感の度合い)

属性	共感の度合い(平均ランク)				χ^2 値	多重比較(Bonferoni、有意水準5%)					
	物語①	物語②	物語③	物語④		①と②	①と③	①と④	②と③	②と④	③と④
日本人大学生	3.01	1.88	2.20	2.91	68.8**	*	*			*	*
米国人大学生	2.87	1.69	2.28	3.17	84.3**	*	*		*	*	*
男子大学生(日米)	3.05	1.87	2.25	2.83	48.2**	*	*		*	*	*
女子大学生(日米)	2.87	1.74	2.23	3.17	105.2**	*	*		*	*	*
日本人大学生(男子)	3.10	2.07	2.24	2.59	10.9*	*	*				
米国人大学生(男子)	3.03	1.78	2.25	2.94	39.9**	*	*		*	*	*
日本人大学生(女子)	2.97	1.82	2.19	3.02	60.3**	*	*			*	*
米国人大学生(女子)	2.65	1.57	2.30	3.48	52.2**	*		*	*	*	*

* χ^2 値(Friedman)において $p < .05$ は*、 $p < .01$ は**、多重比較で有意差がみられた箇所は*を記した。

わかりやすくまとめると、日本、米国ともに、四つの物語の興味の度合いについては、一番日常的内容(平凡な幸せをのぞむ)の②の物語が有意に低いという結果だったが、共感の度合いについては、逆に、一番日常的内容(平凡な幸せをのぞむ)の②が一番、あるいは、②と、平凡だがささやかな夢を持つ③の物語がともに、①の立身出世物語や④の華やかな生活から辛い生活になった物語より有意に高かった。おおよその傾向は類似しているが、日本人男子大学生と米国人女子大学生で、若干異なる部分があった。興味の度合いでは、日本人男子大学生と米国人女子大学生ともに、四つの物語間のランクに有意差はみられなかった。共感の度合いでは、日本人男子大学生において、④と有意差はないものの①の立身出世物語のランクが一番低いという結果が示され、米国人女子大学生においては、日常的な内容の②のランクが有意に一番高く、④が有意に一番低いという結果であった。

先に紹介した、物語の主人公に関する情報の重要度評定の結果を考慮すると、日本人大学生における、より日常的な内容の②、平凡だがささやかな夢を持つ③の物語に対する興味や共感の度合いが、米国人の大学生より高いのではないかと推測されたが、そうではなかった。物語の主人公に関する情報の重要度評定と異なり、本調査で用意した物語間の興味や共感の度合いにおいて、日本と米国の大学生間でほぼ差がみられず、日米において、より日常的で平凡な生活の物語に対する興味の度合いは低いが、共感の度合いは高いという結果であった。用意した物語の問題で、他の種類の物語を用意すれば、日本と米国の差が明確に表れた可能性は考えられる。

とはいえ、この結果から、文化差とは、多方面で一様に存在するわけではないことが読み取れる。人気のある映画に、ときとして、文化差がある点を考慮すると、まったく、物語への興味や共感の度合いに文化差がないとは思われないが、インターネット等の進展により、世界各国のアニメ、映画、小説などが流通するようになり、特に若い世代を中心に、一昔前よりは、物語に対する嗜好差は、ある側面においては小さくなってきたという可能性は充分考えられる。

この調査は、日本と米国の大学生しか対象にしておらず、他の文化圏での実施と、もう少し他の物語パターンを加えての検討が必要であると考える。

その他でみられる文化差―複数の予備的調査結果の紹介

上記では、自己の語り、物語の主人公についての語り、物語の嗜好に焦点をおいた文化間の違いを検討する調査を詳しく紹介してきたが、以下では、直接語りとは関わりのない内容での文化差に関する予備調査の結果について紹介していきたい。

まず、日本人に対するイメージを日本人と日本滞在中の外国籍の若者（以下、留学生と称する）を対象に行った調査結果を紹介する⁷。この調査では、東京都内の一大学の日本人大学生三七人（男子学生一六人、女子学生二一人、平均年齢二二・〇歳）、同大学の外国人留学生三七人（男子学生一五人、女子学生二二人、平均年齢二三・三六歳）を対象に質問紙調査を行った。留学生の日本滞在期間は、二ヶ月～六年（平均一年二ヶ月）、留学生の国

籍の内訳は、アメリカ三人、イギリス二人、イタリア二人、インドネシア二人、ウクライナ一人、ウズベキスタン一人、エルサルバドル一人、オーストラリア一人、カナダ一人、韓国二人、キルギス一人、スイス一人、スペイン四人、セルビア一人、タイ一人、台湾二人、中国三人（うち香港一人）、チリ一人、ドイツ一人、トルコ一人、フランス一人、ブルガリア一人、ロシア三人（五十音順）であった。質問紙は四設問からなっており、設問1は、片桐（二〇〇二）で使用されたイメージ評定尺度の五項目からなり、各項目につき、それぞれどのくらいあてはまっていると思うかを五段階評定させた。設問2では、日本人の特徴だと思う点を三つ記入させた。設問3では、日本人の長所だと思う点を三つ、設問4では、日本人の短所だと思う点を三つ記入させた。

その結果、五項目のイメージ評定のうち、「個性的」(M:2.44, p < 0.05)、「威張る」(M:2.98, p < 0.01)において、留学生の方が日本人自身の評定より、得点が有意に高いことが示された。「信頼できる」(M:1.08, p < 0.05)「親しみやすい」(M:0.57, p < 0.05)「けち」(M:1.46, p < 0.05)では有意差はなかった。留学生による日本人の「威張る」というイメージ得点が高かった点は、片桐（二〇〇二）における中国人による評定結果と一致しており、外集団全般の日本人イメージである可能性を示唆しており、興味深い。設問2、3、4については、コーディングカテゴリーを作成し、そのカテゴリーに基づき、調査者と別のコーディング者が独立に、記述内容を分類したところ、分類判定が九〇%以上一致することが確認され、不一致の部分は話し合いで分類判定を行った。

その結果、日本人の特徴として、「勤勉、まじめ」が、日本人（一三・五二％）よりも留学生（四三・二四％）の方が言及する割合が有意に高く（ $\chi^2(1, N=74)=8.05, p<.01$ ）。「和、調和、一致」については、留学生（八・一〇％）よりも日本人（五一・五三％）の方が言及する割合が有意に高かった（ $\chi^2(1, N=74)=16.56, p<.01$ ）。興味深いことに、「個人的」と言及した日本人（〇・〇〇％）はいなかったが、言及する留学生（二三・五一％）が有意に高い割合であった（ $\chi^2(1, N=74)=5.36, p<.05$ ）。なお、有意差のみられなかった記述カテゴリーは、「几帳面、正確」（日本人一〇・八一％、留学生二・七〇％、 $\chi^2(1, N=74)=1.93$ ）、「礼儀正し」（日本人一〇・八一％、留学生一三・五一％、 $\chi^2(1, N=74)=0.13$ ）、「親切、気を配る」（日本人一三・五一％、留学生一〇・八一％、 $\chi^2(1, N=74)=0.56$ ）、「恥ずかしがりや」（日本人二七・〇二％、留学生四三・二四％、 $\chi^2(1, N=74)=0.70$ ）、「あこまら、遠まわし」（日本人八・一〇％、留学生八・一〇％、 $\chi^2(1, N=74)=0.00$ ）、「建前、表面的」（日本人一六・二二％、留学生一八・九一％、 $\chi^2(1, N=74)=0.09$ ）、「保守的、排他的」（日本人一〇・八一％、留学生五・四〇％、 $\chi^2(1, N=74)=0.73$ ）、「冷たい」（日本人〇・〇〇％、留学生八・一〇％、 $\chi^2(1, N=74)=3.13$ ）、「静か、落ち着いている」（日本人一三・五一％、留学生二・七〇％、 $\chi^2(1, N=74)=2.90$ ）、「時間を守る」（日本人〇・〇〇％、留学生八・一〇％、 $\chi^2(1, N=74)=3.13$ ）、「外見、流行に関する発言」（日本人二七・〇二％、留学生一三・五一％、 $\chi^2(1, N=74)=2.09$ ）であった。日本人の特徴に関する認識において、日本人と留学生の間で、若干差異もみられるが、比較的一致していることがうかがえる。

次に、日本人の長所として、「和、調和」は、留学生（二・七％）より日本人（二九・七二％）で有意に多く言及され（ $\chi^2(1, N=74)=9.95, p<.01$ ）、「信頼できる」は、日本人（〇・〇〇％）は言及しなかったものの留学生（二四・三二％）が言及する割合が高かった（ $\chi^2(1, N=74)=10.25, p<.01$ ）。また、「外見、容姿に関する発言」の割合が、日本人（二・七％）よりも留学生（一六・二二％）で有意に高かった（ $\chi^2(1, N=74)=3.95, p<.05$ ）。なお、有意差のみられなかった記述カテゴリーは、「真面目、勤勉」（日本人四五・九四％、留学生四五・九四％、 $\chi^2(1, N=74)=0.00$ ）、「正確、丁寧」（日本人八・一〇％、留学生五・四〇％、 $\chi^2(1, N=74)=0.21$ ）、「礼儀正し」（日本人一八・九一％、留学生二一・六二％、 $\chi^2(1, N=74)=0.08$ ）、「親切、気を配る」（日本人六二・一六％、留学生四〇・五四％、 $\chi^2(1, N=74)=3.46$ ）、「謙虚」（日本人一三・五一％、留学生五・四〇％、 $\chi^2(1, N=74)=1.42$ ）、「尊敬、敬意」（日本人五・四〇％、留学生一〇・八一％、 $\chi^2(1, N=74)=0.73$ ）、「誠実、責任感」（日本人二・七〇％、留学生一三・五一％、 $\chi^2(1, N=74)=2.90$ ）、「時間を守る」（日本人一三・五一％、留学生一〇・八一％、 $\chi^2(1, N=74)=0.13$ ）であった。長所についても、日本人と留学生の間で、若干差異もみられるが、比較的共通した認識を有していることがわかる。

最後に、日本人の短所として、「本音を言わない」は、日本人（二四・三二％）よりも留学生（五一・三五％）で有意に多く言及されたが（ $\chi^2(1, N=74)=4.72, p<.05$ ）、「主張がない、個性がない」は、留学生（五・四〇％）よりも日本人（三七・八三％）の言及する割合が有意に高かった（ $\chi^2(1, N=74)=10.12, p<.01$ ）。「自信がない」、「他人の目を気にする」は、留学生は誰も言及しなかったが（ともに〇・〇〇％）、日本人（順に一〇・八一％、二四・三二％）では言及されていた（ $\chi^2(1, N=74)=4.23, p<.05$ ）（ $\chi^2(1, N=74)=10.25, p<.01$ ）。「排他的」は、日本人（八・一〇

%)より、留学生(三七・八三%)の方が有意に多く言及した($\chi^2(1, N=74)=9.24, p < .01$)。なお、有意差のみられなかった記述カテゴリーは、「まじめすぎる、働きすぎ」(日本人一〇・八一%、留学生二四・三二%、 $\chi^2(1, N=74)=2.33$)、「内向的」(日本人二九・七二%、留学生一八・八一%、 $\chi^2(1, N=74)=1.18$)、「自己中心的」(日本人八・一〇%、留学生一六・二一%、 $\chi^2(1, N=74)=1.14$)、「無関心」(日本人一三・五一%、留学生二・七〇%、 $\chi^2(1, N=74)=2.90$)、「社会的地位を意識しすぎ」(日本人〇・〇〇%、留学生八・一〇%、 $\chi^2(1, N=74)=3.13$)、「融通がきかない」(日本人八・一〇%、留学生一〇・八一%、 $\chi^2(1, N=74)=0.16$)、「創造力がない」(日本人八・一〇%、留学生〇・〇〇%、 $\chi^2(1, N=74)=3.13$)であった。短所については、日本人と留学生の間で、半分以上の項目で差はなかったが、一部の項目で有意差がみられた。

留学生の国籍が多様で、しかも日本に一定期間以上滞在しているため、日本に來たことがない外国人のイメージと必ずしも一致しないかもしれないが、日本人自身による日本人のイメージと、留学生による日本人イメージに、共通する部分も多いが、明確に差が表れた部分がある点は注目してよいだろう。ただし、結果で示された日本人と留学生によるイメージの違いのすべてが、日本人イメージの違いともいえない点は留意する必要がある。たとえば、「排他的」というイメージは、内集団内でも、外集団のメンバーが感じやすい点であり、自分が所属しない外集団のイメージ評定の際には、自分が属する内集団のイメージ評定より高く評定する可能性が考えられるからである。

おそらく、この調査結果が示唆する重要な点は、自分(自

分たち)がとらえている自分(自分たち)と他者(他の人たち)がとらえる自分(自分たち)には必ずずれがあり、異文化間、異集団間の交流の際のみならず、通常の間関係においても、他者(他の人たち)と接する際には、「互いに違う」という認識のみならず、「お互いに相手に対して持つイメージは自己(自分たち)イメージと必ずずれがある」との認識をもつ必要があるという点ではないかと思われる。

この調査は日本人と日本人以外の比較調査であったが、以下では、同じアジア圏といわれる、日本と中国の比較調査の結果の詳細と日本とベトナム間の比較調査の結果の概要について順に紹介する。

日本と中国の学生間での、大金を手にしたときの使い道の違いに関する調査では⁸⁾、日本の首都圏に住む日本大学生五〇人(男子学生二〇人、女子学生三〇人、平均年齢二〇・八歳)と中国人留学生四〇人(男子学生一六人、女子学生二四人、平均年齢二三・六歳・日本の滞在期間は半年未満、大方三カ月未満)を対象に、「今、あなたが一億円(中国では一万元)を手にしたとします。もしそれを自由に使ってよいとしたら、あなたはどのように使いますか。一〇分以内で自由にお書きください」とお金の使い方を問う自由記述の質問紙調査を行った。分析の際、コーディングカテゴリーを作成し、そのカテゴリーに基づき、調査者と別のコーディング者が独立に、日中それぞれ一〇人ずつの記述内容を分類したところ、判定が九六%以上一致することが確認され、不一致の部分は話し合いで分類判定を行った。残りのデータについては調査者が分類した。その結果、「貯金をする」という記述が日本で有意に大きな割合を

占めていた（日本八〇%、中国二五%、 $\chi^2(1, N=90)=27.2, p<0.01$ ）。日本人学生の八割が貯金と答えた点は注目に値する。一方、投資等により「財産を増やす」という記述は中国人留学生の方が有意に多く記述していた（日本二〇%、中国四三%、 $\chi^2(1, N=90)=5.36, p>0.05$ ）。また、日本人学生では、「買ひ物（形が残る）」（日本五四%、中国一八%、 $\chi^2(1, N=90)=12.60, p<0.01$ ）や「趣味（形が残らなう）」（日本五八%、中国二五%、 $\chi^2(1, N=90)=9.86, p<0.01$ ）に言及する割合が中国人留学生よりも有意に高かった。誰のために使うかにおいて、「友人・所属集団のため」との記述があつた割合は、日本人学生において有意に高かつた（日本一一%、中国〇%、 $\chi^2(1, N=90)=5.14, p>0.05$ ）。なお、「学業」（日本一六%、中国三三%、 $\chi^2(1, N=90)=3.38$ ）、「寄付」（日本二四%、中国一八%、 $\chi^2(1, N=90)=0.56$ ）、「身の回り・生活」（日本二〇%、中国一〇%、 $\chi^2(1, N=90)=1.69$ ）、「両親・兄弟姉妹プレゼント」（日本四〇%、中国三五%、 $\chi^2(1, N=90)=0.24$ ）、「不動産」（日本一八%、中国二三%、 $\chi^2(1, N=90)=0.28$ ）、「自分のため」（日本九六%、中国九五%、 $\chi^2(1, N=90)=0.05$ ）、「家族のため」（日本四〇%、中国三五%、 $\chi^2(1, N=90)=0.24$ ）、「その他の人のため」（日本二六%、中国二三%、 $\chi^2(1, N=90)=0.15$ ）で国間の有意差はみられなかつた。

国間以外で、若干性差が、各国内でみられた点は興味深い。日中それぞれにおいて、「趣味（形が残らない）」の記述する割合が、男子学生よりも女子学生において有意に高かつた（日本一男子四〇%、女子七〇%、 $\chi^2(1, N=50)=4.43, p<0.05$ ）；中国一男子六%、女子三八%、 $\chi^2(1, N=40)=5.00, p<0.05$ ）。日本では、「財産を増やす」との記述の割合が、女子より男子のほうが有意に高かつた（男子三五%、女子一〇%、 $\chi^2(1, N=50)=4.69, p<0.05$ ）。

中国では、「両親・兄弟姉妹へのプレゼント」（男子一三%、女子五〇%、 $\chi^2(1, N=40)=5.93, p<0.05$ ）、「家族のために使用する」（男子一三%、女子五〇%、 $\chi^2(1, N=40)=5.93, p<0.05$ ）と記述する割合が、有意に女子のほうが高く、一方、「貯金する」との記述の割合は、女子より男子のほうが有意に高かつた（男子四四%、女子一三%、 $\chi^2(1, N=40)=5.00, p<0.05$ ）。

短期間とはいえ日本に滞在している留学生であるため、中国国内に滞在し続けている中国人大学生と傾向が異なる可能性は考えられる。また、この課題は、お金に関する内容のため、このような語りや記述の結果には、文化的な価値観の違いのみならず、経済、社会システム、個人の経済状況の違いが反映される可能性が考えられる。このような調査の場合、できる限り個人的な経済状況の部分は対象者間でそろえるか、あるいは、経済状況による群分けをしたほうがよいかもれない。今後、文化差を検討するうえで、経済、社会システムの違いも重要な要素として考慮していく必要がある。

次に、日本とベトナムの大学生における家族・友人関係と対人不安の関連に関する予備調査結果について概要のみ簡潔に紹介する。この調査では、東京の一大学の学生一一〇人（男子学生二二人、女子学生八五人、平均二〇・〇歳）、ベトナム、ハノイの一大学の学生五四人（男子学生九人、女子学生四五人、平均二〇・〇歳）を対象に、家族機能尺度（Olson, McCabbin, Larsen, Muxen, & Wilson, 1985; 草田・岡堂、一九九三）、友人関係尺度（岡田、一九九五）、対人不安尺度（平石、一九九〇）と家族や友人との関係性を問う質問（家族の人数、家族との会話時間、友人との会話時間、自宅への友人招待頻度）からなる質問紙調査を行った。

た。その結果、「家族機能尺度の「凝集性」と「適応性」、「家族や友人との会話時間」、「友人の招待頻度」において、ベトナム人学生のほうが有意に日本人学生より高いこと、日本においてのみ、友人関係尺度における「ふれあい回避」、「群れ」評定が対人不安尺度の「自己閉鎖性」と有意な正の相関関係が示されていたという。データ採集地域が限定的で、両国とも女性のデータ数が圧倒的に多く、他改良すべき点もあるが、同じアジア圏とはいっても、日本人とベトナム人の間で、人間関係の築き方、距離の取り方に違いがある可能性が示唆されている点は興味深い。今後さらなる追究が必要であろう。

おわりに

本論文では、筆者が関わった研究を中心に、少数の知見を詳しく紹介してきたが、これらの知見からのみでも、「西洋 vs 東洋」という二分法的な視点からは、各文化は説明しきれないことがよくわかる。今回紹介したデータにおける、いわゆる「西洋文化圏」はほぼ米国のみであるため、「西洋文化圏」内の多様性は、本論文内では説明することができなかつたが、同じ「東洋文化圏」とされる日本と中国の間で、複数の調査結果を通じて、共通する点もあるものの、異なる点も多いことが示された。ただし、文化差の調査結果を解釈する上で以下の点に留意する必要がある。第一に、質問内容、課題内容、状況によって、文化差の現れ方は異なるという点である。先に紹介した「二十の私」テストでも、特定の場面や状況を設定すると、結果の出方

が変わってくる（増田・山岸、二〇一〇他）。第二に、あくまでも、調査した各文化圏を代表する、サンプル群の傾向における差であり、各文化圏データ内で個人差はもちろんあるし、各文化圏を代表するデータに忠実にその文化の特徴が反映されているとは限らないという点である。第三に、文化圏間の差ほどではないとしても、性差、世代差、地域差なども存在するという点である。前述のとおり、上記で紹介したデータの一部で、性差が報告されている。今回、紹介しなかつたが、上原・東（二〇〇七）では、同じ物語課題を、日本と中国の学生世代、親世代を対象に実施し分析した結果、世代差や性差がみとめられた。一部を紹介すると、中国の親世代が他よりも有意に「成功者」因子を重視し、「近親者との関係」因子は日中いづれにおいても親世代が学生世代よりも有意に重視していること、「成功者」因子、「プロフィール・履歴書」因子とも、男性よりも女性が有意に重視することが示された。クイズや仕事を三人グループで行い報酬を得たときを想定させ、どのように報酬を分配するのがよいかを、日本と中国の学生世代、親世代を対象に検討した、Mukaiida & Azuma (2006) では、全体的には、日本のほうが平等分配（三等分）を評価する傾向が強く、日中とも、クイズ場面より仕事場面で公平分配（貢献度に応じた分配）のほうがよいとする傾向が強いものの、日本でのみ顕著な世代差（親世代が学生世代よりも、平等分配を有意に強く好む傾向）が示された。調べる内容によつては、同一文化圏内の地域差も存在することが指摘されている。柿沼、上村らの研究グループではこれまで、母親に絵カード（四種類）を用いて子どもに話をするように指示し、母子間での語りの様子

を、文化圏間（日本・中国・米国）、同一文化圏内（山形・沖縄・東京）で比較検討してきているが、語りのスタイルに、文化圏間ほどではないとしながら、山形、沖縄、東京の間にも差がみられることを示している（上村・柿沼、二〇〇六）。また、唐澤・林・松本・向田・トビン・朱（二〇〇七）では、日本、中国、米国における教育学・発達心理学の学生を対象に、幼稚園で学ぶのに大切なこと、幼稚園・保育園の必要性などに関して、項目を用意し各設問で三項目選択させるといふ課題を一九八九年と二〇〇三年に行つた結果を比較しているが、文化圏間の差はもちろん各年でみられるが、一九八九年と二〇〇三年の間の同じ文化圏内での変化も日本、中国、米国のすべてで示されている。いずれにせよ、文化差の調査結果を解釈していく際には、性差や世代差、地域差などの他の諸要因も十分考慮し、慎重に結論を導いていかなければならないだろう。

今回焦点をおいた、語りに表れる差と文化差について少し考えたい。心理・行動に関する文化的差異については、ライフ・スクリプトの差としてとらえようとする立場をとっていることは先に述べた。子どもが周囲の出来事や行動の意味を理解できようになる発達過程において、スキーマやスクリプトによる知識構造の構築が必須であると広く考えられている。スキーマは関連する知識の塊、スクリプトは物事の順序、筋道を含む、物語的知識のことである。例えば、レストランスクリプトとは、席に案内される、メニューを受け取る、注文をする、注文したものがくる……といった一連の流れをなす、レストランに関わる物語的知識である。発達の過程で、こういったスクリプトを積み重ねていくことにより、子どもはその社会でどのように物

事が進んでいくのか、このようなときにはどういったふるまいがあり得るのかを学び、社会生活のさまざまな場面で、その場面に適した、行動、判断、推測ができるようになっていくと考えられる。「語り」とは、いくら短いとしても、また書き言葉であろうと、話し言葉であろうと、相手を想定し相手に伝えるために行うものであり、一種の起承転結をなすような物語表現になるため、過去自分が蓄積してきたスクリプトに基づいてなされる。例えば、自己紹介をするときは、その聴衆に覚えてもらえそうか、あるいは、皆に好感を持つてもらえそうか、話をしようと思うだろうが、そのときに、どういふ話をすれば皆の興味をひきつけるか、自己紹介といったときに通常どういったことを皆、知りたいと思つているかといった、その社会で機能しているスクリプトに基づいて語るだろう。そのスクリプトに基づいて表出される語りには、まさに、その社会・文化で通用している考え方や特徴が反映されやすいと考えられる。

今回、紹介した研究データにおいて、文化圏間での語りの差が存在することが示され、その背景には、スクリプトの分布や内容の差が推測される。特に、複数の知見で対象となつていた、日本、中国、米国間で、（表出する、もしくは、こうであることと想定する）語りに、互いに共通性や差があることはよくわかったが、見出される共通性や差は課題内容によつても異なるため、（今回紹介しなかった）他知見とあわせて検討しても、その背景にあるスクリプトがどう異なるのかまでは、簡単には特徴づけられそうにない。もう少し多くの知見を積み重ねていく必要があるだろう。とはいえ、自己紹介データ、一〇年後の自分、物語の人物を語る上で重要な情報、また従来から知られている

「二〇の私」に関する調査で共通して、日本のデータでは、趣味、役割、所属、仕事名（具体的な内容ではない）などの日本の履歴書でよく記述するような内容が含まれており、このような内容が、公の場面で人について語るときに、日本で起動されやすいスク립トの一部を成している可能性が考えられる。今後、他の課題でもこの点追究できたらと考える。

最後に、文化差を検討する調査を実施することの意義について触れておきたい。理論との関係性が明確ではないデータの公表に批判もありうるだろうが、まだ文化的事象に誤解の多い世間に、理論的な裏付けのない、実証的な知見を公表することにも意義はあると思われる。意外な側面を伝えたり、誤解を解くようなきかけにもなりうるからである。文化的事象の場合、不確かな状況で無理な解釈をするより、地道により客観的なデータを積み重ねていく作業が必要ではないかと思われる。文化差の研究は、自分が属する文化圏のスク립トと、自分とは異なる文化圏の異なる文化的スク립トを学ぶことにとどまらず、自分とは異なる他者への理解と受容について考えるきっかけを与えてくれるのではないかと思われる。

注

- 1 林千尋氏の平成二三年度の卒論研究
- 2 ブラジル人学生は、ブラジルの大都市圏からオーストラリアに語学留学してきたばかりの学生とブラジル国内の大都市圏で大学に通う学生の違いがであった。

3 日中で、どれか一つの国、あるいは二つの国のデータにおいてのみ三分の二以上の対象者が3もしくは1と評定している項目をあらかじめ除外した。

4 日本の大学生は、東京都内の四つの男女共学の大学、一つの女子大学、もしくは、長野県内の一つの男女共学の大学のいずれかに所属していた。中国の大学生の所属は、北京近郊の二つの男女共学の大学のいずれかであった。米国の大学生の所属はワシントンD.C.郊外の一つの大学とオハイオ州の一つの大学のいずれかであった。

5 中国のデータでは、因子負荷〇・三三以上で、かつ二因子にまたがって〇・三三以上の負荷を示さない一三項目を抽出した。日米より対象者数が少ないため、今後、データを追加し再分析を行う必要があると考える。

6 日本大学生は都内の一つの大学に所属し、米国人大学生はオハイオ州の一つの大学に所属していた。なお、日本での調査協力者数は一五六人であったが、文化差の調査であるため、海外居住経験が六カ月以上（六カ月は一人のみ、大方数年以上であった）の日本人学生と留学生の計二九人のデータは含めなかった。

7 宮下知氏の平成二〇年度の卒論研究

8 新里紹太氏の平成二〇年度の卒論研究

9 合田千寿氏の平成一八年度の卒論研究

引用文献

- 東洋 (二〇〇三)．日米比較研究ノート——文化心理学と異文化間比較——．発達研究、十七、107—113頁。
- Azuma, H. (2006). *The Era of Fluid Culture: Conceptual Implications for Cultural Psychology*. In Q.Jing, M.R. Rosenzweig, G.d'Ydewalle, H.Zhang, H.C.Chen,

- & K. Zhang (Eds.), *Progress in psychological science around the world*. Vol. 2
New York, NY: Psychology Press. Pp.305-318.
- 東洋 (二〇〇七)'. 序にかえて. 平成一七年度〜平成一八年度科学研究補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因: 国際比較と国内変動の総合的研究」, 1—3頁.
- Bond, M. H., & Cheung, T. (1983). *College students' spontaneous self-concept. Journal of Cross-Cultural Psychology*, 14, Pp.153-171.
- Bruner, J.S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 平石賢二 (一九九〇)'. 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康—. 教育心理学研究, 三八, 320—329頁.
- 唐澤真弓・林安希子・松本朋子・向田久美子・トビンジョセフ・朱瑛 (二〇〇七)'. 幼児教育の文化的意味—日本、アメリカ、中国における文化間および文化内比較— 平成一七年度〜平成一八年度科学研究補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因: 国際比較と国内変動の総合的研究」, 35—44頁.
- 片桐雅義 (二〇〇一)'. 日本人のイメージ—日中大学生の比較—. 宇都宮大学国政学部研究論集, 一四, 1—8頁.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (一九九三)'. 家族関係査定法. 岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版, 573—581頁.
- 増田貴彦・山岸俊男 (二〇一〇)'. 心理学の世界専門編 文化心理学(上) 培風館.
- Mukai, K., & Azuma, H. (2006). *Rule use in reward allocation in China and Japan*. 平成一四年度〜平成一六年度科学研究補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書「行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト」, 55—62頁.
- 向田久美子・東洋 (二〇〇七)'. 自由作文に見る一〇年度の将来—日中米比較—. 平成一七年度〜平成一八年度科学研究補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因: 国際比較と国内変動の総合的研究」, 13—23頁.
- Mukai, K., Azuma, H., Crane, L.S., & Crystal, D.S. (2010). *Cultural scripts in narratives about future life: comparisons among Japanese, Chinese and American Students*. パーソナリティ研究, 一九, Pp.107-121.
- 岡田 努 (一九九五)'. 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, 四三, 354—363頁.
- Olson, D. H., McCabbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985). *Family Inventories*. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (一九九七)'. 『日本人の集団主義』と『アメリカ人の個人主義』—通説の再検討. 心理学研究, 六八, 312—327頁.
- 高崎文子・東洋 (二〇〇七)'. 「努力したこと」についての回想的記述の分析: 日米中比較. 発達研究, 二二, 1—10頁.
- Triandis, H.C., McCusker, C., & Hui, C. H. (1990). *Multimethod probes of individualism and collectivism. Journal of Personality and Social Psychology*, 59, Pp.1006-1020.
- 上原泉・東洋 (二〇〇五)'. 物語作成の際に重視する項目は何か—日中比較の中間報告—. 発達研究, 一九, 55—64頁.
- 上原泉・東洋 (二〇〇七)'. 日本・中国・米国の学生が重視する主人公の特徴・発達研究, 二二, 55—68頁.
- 上原泉・東洋 (二〇〇七)'. 主人公について重視する項目の日中比較—性差・世代差の検討—. 平成一七年度〜平成一八年度科学研究補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因: 国際比較と国内変動の総合的研究」, 4—12頁.

上村佳世子・柿沼美紀(二〇〇六)・文化的学習の場面としての母子の語り(二)——東京・山形・沖縄における社会的相互行為——. 発達研究、二〇、23—32頁.

山本登志哉(二〇〇八)．お小遣いから見えてくる親子・友達関係発達の文化性——日韓中越国際共同研究から(特集 東アジア文化の心理学)．心理学ワールド、四〇、5—8頁.

新民叢報第二十三号にみる嘉納治五郎の教育思想

東憲一

一、はじめに

嘉納治五郎については、一連の拙稿「嘉納治五郎の研究の動向と課題」¹、「学校教育における嘉納治五郎」²、「熊本における嘉納治五郎とラフカディオ・ハーン」³、「嘉納治五郎と柔道、教育、スポーツのかかわり」⁴、「嘉納治五郎と臨時教育会議」⁵、「臨時教育会議にみる嘉納治五郎の体育思想」⁶、「臨時教育会議における嘉納治五郎」⁷、「貴族院における嘉納治五郎」⁸、「嘉納治五郎再考」⁹において述べているように主に教育の面から検討を行ってきた。

嘉納治五郎（一八六〇年…万延元年—一九三八年…昭和一三年）は柔道の父、教育の父、スポーツの父であることはよく知られている。柔道についてはそれまでの柔術・柔をもとに講道館柔道を創始した。スポーツについては第一代大日本体育協会会長を務め、アジア初の国際オリンピック委員会委員として選出され、第五回オリンピック・ストックホルム大会（一九一二年…明治四十五年）に役員二名、選手二名の役員として参加した。また、国際オリンピック委員会において、一九三八年（昭和一三年）、第十七回オリンピック・東京大会の招致を成功させた。

教育については、東京高等師範学校校長三期約二十六年を勤

めていたことを中心として、学習院教頭、第五高等中学校長、第一高等中学校長、文部省に長くかかわった。これらの他に私塾である嘉納塾等にかかわった。

これらの教育関係の他に、留学生教育にかかわったことはよく知られるところである。留学生教育は清国人留学生を対象とした宏文学院（一八九六年…明治二十九年—一九〇九年…明治四十年）において行われた。嘉納の留学生教育や宏文学院についての研究は酒井¹⁰、老松¹¹らを始めとして様々行われている。

嘉納に関する留学生問題について、新民叢報第二十三号、第二十四号余録に「支那教育問題」として嘉納の講話と留学生との対話が掲載されている。二十三号は講話を中心として、二十四号は留学生楊度との対話を中心とした内容である。二十三号の講話内容は嘉納の教育についての発言内容が多く所見できる。従来行ってきた嘉納研究は、嘉納の教育についての嘉納や日本人による資料を基にした考察が多いが、今回は、清国人…外国人が刊行した新民叢報二十三号に多く見られる嘉納の教育思想について、従前からの考察の結果を踏まえ、検討・考察を行うものである。

二 資料とその考察について

資料として、新民叢報（一九〇二年・明治三十五年―一九〇七年・明治四十年）の影印版（台北、芸文印書館一九六六）二十三号、二十四号余録「支那教育問題」について、日本語訳（本学卒業生小松宏一氏訳）された内容をもとにした。宏文学院や新民叢報についての研究は内外において様々行われているが、嘉納の教育思想との直接的な比較検討は見られない。嘉納の教育について検討を行ってきた拙稿（注の1から9を参照）や、その他の文献とともに今回は二十三号にみられる嘉納の教育思想について比較検討を行った。

三 本論

1 梁啓超について

新民叢報の主筆である梁啓超（一八七三年・明治六年―一九二九年・昭和四年）は清国における政治家、ジャーナリストとされる。日本に亡命後、新民叢報他の諸雑誌を刊行し、啓蒙活動にあたった。

2 楊度について

二十三号後半と、二十四号は嘉納と楊度（一八七五年・明治八年―一九三一年・昭和六年）との論議から成り立っている。楊度は政治家・学者とされる。楊度は清国人留学生として日本に留学し、宏文学院で学んだ後、法政大学及び早稲田大学の前身で

学んだ¹²。

3 新民叢報について

新民叢報（一九〇二年・明治三十五年―一九〇七年・明治四十年）は横浜において全九六号が刊行された。各号の内容は多岐にわたる。二十三号、二十四号余録は「支那教育問題」として、宏文学院における嘉納の講話と、嘉納と宏文学院留学生楊度との論議から成り立っている。二十三号は嘉納の講話が中心であり、二十三号後半は二十四号に続く楊度との論議が始まる。二十四号は主に嘉納と楊度との論議が中心である。

3-1 二十三号の余録「支那教育問題」の構成内容の概略

「光緒二十八年（一九〇二年）より日本は支那に代わり自ら教育を興すことを任とした。その翌年、文部省、外務省は協力して東京に宏文学院を創設し、支那遊学人を教育した。高等師範学校長嘉納治五郎がこれを主導し、中に教育の一科を設け、速成と普通の二部門に分けた。中国各省は速成師範学生を派遣したが、湖南省の十人がまず入学した。……そして各省の士大夫で教育目的で日本に遊学した者は湖南省の……楊度……らであった。……嘉納は支那のためにまさに教育を興さんとしていた。北京、江蘇、浙江、湖北、湖南等の省を歴訪し、その国政と民風を見て教育の本旨を定めたのであった」¹³。

このことについて、嘉納は明治三十五年七月二十一日から十月一六日まで約三ヶ月にわたって清国を視察している¹⁴。

「嘉納の帰国後、丁度、湖南速成師範生が満期帰国することになった。そこで嘉納は西暦十月二十一日、講演することとした。湖南省及各省の師範生が多く集合した。しかし、傍聴者は湖南の載展誠君、楊度君のみが来た」¹⁵

二十三号が刊行されたのが十二月一日であるから講演後間もない時期に嘉納の講演内容が掲載されたことになる。

十月二十一日の宏文学院での講演内容は、清国視察の帰国報告、清国視察の思いを述べてみたいと語っている。特に普通教育の目的について述べている。

十月二十三日の宏文学院での講演は実業教育について述べている。

4 一九二五年（明治三十五年）十月二十一日の講演内容について

「私は教育という問題のために貴国を訪ね今帰国しました。その視察により多少思うことがあり、今、湖南の師範諸君が帰国されるにあたり、少しく思いを述べてみたいと思うものです。教育の種類は様々なものがあり、普通・専門・実業・美術などですが、貴国の今日の情勢からみて最も急なるものは普通と実業の二種で専門・美術はその次になります。今はまず普通教育について話をしましょう。普通というの専門の対立語です。また、専門のための基礎ということでもありません。まず、普通教育がなければいきなり専門に進むことは出来ません。理

科については特にそうです。（中略）普通教育のいかる所以は基本的に三つの意味があると思う。」¹⁶

4—1

「目的の一 道徳教育 (1) 智識 (2) 智識と情 (行為) の連携 (3) 習慣

智識というのは国民の心得と個人の心得をして深くその理を明らかにさせることである。（中略）(2) 智識と情の連携というのはその行為が善であれば心は愉快であり、不善であれば恥じ恐れるということである。（中略）(3) 習慣とは徐々にしみ込んでいくと言うことであり、善をなして困難と思わないようにすることである。強制する必要はなく、自然にできるということである。この三者を徳育という。国民にこの徳育の根底が備わっていれば専門の学なくても公衆の災、国家の害にならない。」¹⁷

4—2

「目的の二 智識 (1) 生活上必須の智識 (2) 高等教育の基礎 (3) 国には少数の高等智識の人と必ず多数の普通智識の人がいる。

(1) 生活上必須の智識とは国民の高い学問を求めることができる者がこれを得て、十分に利用して自らの生活をはかるものである。嘉納氏はここまで話したとき、湖南師範生に問うて曰く、(中略) 高等教育の根底の理について話してくれたまえ。師範生が語る。(中略) 嘉納氏曰く国に少数の高等智識の人がお

り、また多数の普通智識の人がいる必要がある。そしてそれが一つのものにまとまる必要がある。一人が知り、多数はぼんやりとしているのでは事は成らない。かくして普通の学問をもつて専門学の用に備え、これを助けるといふことになる。この三者を智育という。国民の智識程度が高ければすなわち国家の智識程度が高いことである。日本の人口は四千万あり、数としてはフランスに匹敵する。しかし、国税の額はこれに及ばず国民の学問はなお自然と人為の利を尽くすことができない。従つて国民の程度も及ばない。国家の程度も遠く及ばない。貴国は人口は四億ある。しかし、人々はその力を發揮できず、国力は日に衰えている。もし、他日、皆智育を得てその程度が高まればフランスに十倍する人数は国力もまた十倍に成育するであろう。これは教育上の法則により予測することができよう。」¹⁸

4—3

「目的の三 身体強健

ここでいう体育というのは国民をして労働に慣れさせるということである。健康ですばしこい者が大きい任務をにない国事に従事することができる。身体が弱いがゆえに精神がまとまらず、気力もなく、国事の進歩を阻害することがあつてはならない。国民にこの体育があれば国に政のおこたりなく、(中略)戦わずしても力を示すことが出来、強国の容がある。今日の世界は人種の競争である。これまた人種の一要件である。」¹⁹

「今すでに三目的の列举を終えたので貴国に適する方法について

て論を進めたいと思う。

徳育については孔子の道を用いるのがいいであろう。そして必ず学ぶ者にその精理を体得させて教科書とせねばならない。浅きより深いに入り、祖から精に入り、幼児及び児童に教えることである。ただ、世界の大勢を調べはかり、国民のよい性格を養成せねばならない。(以下略)

智育においては基礎が重要である。空理に走らず、実理を重んじなければならぬ。貴国ではこの方面の学問を知る人はきわめて少ない。もし、教育で徳育のみを重視するならばこのことは末のことになる。国民はただ国語の精神のみあつてこれを指示する芸術工商のことは人任せで自立の備えがない。もし、時勢の必要が急であり、しばし普通を学ばず、急ぎ専門をならうのはそれは便宜の方法ではある。しかし、普通が不足すると必ず様々な障害が出てきて普通を補い学ばなければならぬ。これは急がば廻れということである。(以下略)

体育は重文軽武の国にあつては他国に比して重大である。それによつて積弱の弊害を挽回して強健を回復せねばならない。貴国の人士は学問はやや優れるものの、身体はやせおとろえ、国事を担当する気力もない。国家には何が重要か。こういう人は無用というものである。国民がこのようであれば、強い精神で国力を進め健全にすることは出来ない。今日の弱体はまたその所以である。今は速やかに文者は武をならい、武者は文をならい、互いに短所・長所を補いあつて、片や頭脳を開化し片や体力をつよくして重文軽武の風を逆転させ、全国皆兵の利を実行し、尚武の精神を養い、これを学問を以て支えるならば国が

どうして強くないことがあるだろうか。今、学校はすべて体操を習わなければならない。武を軽視する書人はこれを児戯とみるかもしれないが、これは一顧もせず、是非実行せねばならない。また、学校を多く作り、疾病を防ぎ、国民の成育を保たなければならない。」²⁰

4—4

「教員養成について

小学校の教員の養成が急務である。国民教育の根本はその創造による。(中略) 教員は師範学校の卒業生を正式のものとする必要がある。しかし、師範の前に普通が必要である。そのあとに教育学を云々することが出来る。貴国は今ほこれを行うのは難しいだろう。中学校と師範学校を分けなくてその中間的な学校を作り、卒業生をある者は教員に、ある者は専門を勉強させるのもよからう。(中略) 教育者は普通の学がないと確実に人を教えることが出来ない。また、普通を学んだ者も教育の方法に習熟することが出来ないので教員に充当することが出来ない。二つを兼ね備えた者の養成には相当の時間が必要である。」²¹

「大学校は各専門の程度の非常に高いものいい、今貴国では各省で命令で大学を作ろうとしているが、私の考えではうまくいっても漢籍を学んだ者を取るのが関の山ではないかと思う。(中略) 従って貴国でも他は大学を作らざるを得ないと思うが、今はしばし延期してもいいのではないだろうか。」²²

「専門では医学と法学の二つの専門学校はただちに作っていないだろう。(中略) まず、普通を学ばせるのも又容易だろうと思う。」²³

「法学は必ずしも普通学の準備を必要とはせずただちに学ぶことが出来る。従って今、ただちに学校を建設し、人々に各国の政治体制と法制、経済に通じさせることが出来よう。」²⁴

以上のことは嘉納が清国視察を終えて宏文学院の清国人留学生に語った教育に関する内容である。

嘉納が清国視察に出かけたのは、一九〇二年(明治三十五年)七月のことである。嘉納四十三歳、高等師範学校長の時である。啓蒙雑誌「國土」の発行が明治三十一年十月であり、宏文学院における講話が、一九〇二年(明治三十五年)十月二十一日であることから「國土」に宏文学院での講話が掲載されているかについて検索したが掲載はみられなかった。ただし、「國土」第六卷第五十号(明治三十五年十一月十日)、同五十一号(明治三十五年十二月十日)巻頭に清国巡遊所感(一)、(二)として清国視察の感想が述べられている。特に清国巡遊所感(三)において官吏登用試験について所見を述べているが、宏文学院の講演と結びつくものはみられなかった。ただ「一国の学問の方法がその国の興廢に関する如何に大なるものかは容易に之を知るを得べし。我が国に於ける教育の方法の如きも今日一步を誤る時は……」と述べ、清国に於ける教育の状況を批判的に述べている。

従って、当時の嘉納は高等師範学校長であったことから嘉納

なりの教育理念をもとに校長としての教育にあたっていたことは当然のことであろう。嘉納の言説に関する資料目録としては田中らのに詳しいが²⁵、資料収集に課題が残り、今後の課題としたい。今回は嘉納の教育思想についての公的な集大成である臨時教育会議委員²⁷²⁸²⁹³⁰、貴族院議員³¹の発言から検討してみる。

臨時教育会議は一九一七年(大正六年)―一九一九年(大正八年)に行われたものであり。嘉委員として出席し、教育に関する様々な発言を行っている。これは嘉納が東京高等師範学校校長最後の在任期間にあたる。従って学校教育現場に於ける最後の発言と考えられる。貴族院議員は一九二一年(大正十年)―一九三八年(昭和十三年)の在任であるがこれも教育に関する様々な発言を行っている。貴族院における様々な教育に関する発言は臨時教育会議をもとにした発言と考えられるので、臨時教育会議の発言内容をもとに宏文学院十月二十一日の教育に関する発言内の比較検討を行う。

1 道徳教育について

嘉納は道徳教育について(1) 智識 (2) 智識と情(行為)の連携 (3) 習慣と述べている。臨時教育会議第三回総会一九一七年(大正六年)「小学校教育ニ関スル」審議において、

「……日本は教育勅語という教育、道徳という指針がありながらその方法を知らなし、現在の道徳の退潮を嘆いている。嘉納がここでいう道徳は、学校教育だけが道徳の場でなく、社会全体の勤労等を含めた道徳教育の必要性を唱えている」³²。

また、

「嘉納は臨時教育会議のかなり多くの発言部分で「道徳」についての内容を述べているが、狭い部分の道徳だけでなく、国民全体の道徳の指針について述べていることが特徴である」³³。

また、臨時教育会議において、高等普通教育や通俗教育においても「徳育」が必要であると述べている³²³³。

嘉納の啓蒙雑誌「國土」、「柔道」、「有効の活動」、「大勢」、「作興」等やその他の雑誌に掲載された道徳・徳育に関する内容は多数みられるが、「精力善用」、「自他共栄」に通じる道徳的な理念の基本は変わっていないと考えられる。今回の弘文学院における道徳教育に関する内容についてもその後の嘉納の道徳教育に関する理念と共通するものがみられた。

2 智識について

これらの内容についての解説も嘉納の啓蒙雑誌「國土」、「柔道」、「有効の活動」、「大勢」、「作興」等やその他の雑誌に掲載された内容によくみられるものである。また、「普通」ということは弘文学院のみならず各種啓蒙雑誌、臨時教育会議の発言、貴族院議員の発言によくみられる。これは、社会や智識として基礎的な習得の重要性を説いたものである。言い換えれば、社会的な常識、基礎的な学力、教養というものが専門教育の前提として存在することを主張したものであろう。

3 身体強健について

嘉納が講道館柔道を創始したのが一八八二年（明治十五年）二十二歳の時である。それ以前から柔道、すなわち身体運動の効果については意識していたと考えられる。この項については身体、健康は国家の用に結びつくとして述べている。臨時教育会議においても様々な体育に関する発言がみられる。嘉納は、体育の持つ価値は身体と精神であり、教育の目的である知育、徳育に相当するものであるとしている。その他の啓蒙雑誌や講演においても様々な視点から体育の効用について述べているが、弘文学院における講演においては国家ということ強調している点のみがみられた。

4 教員養成について

これについては一貫した師範学校や高等師範学校の立場を代弁したものと同じと考えられる。これらについては拙稿に述べたとおりである。弘文学院における師範教育に関する発言は嘉納の師範教育に関する理念の一部に過ぎない。

5 楊度の発言について

最後に楊度が質問して以下のように発言した。「我が国の教育についての普通と専門、緩急前後については先生の言われることについては皆当然のことで敬服するという程のことではありません。そのやり方についてもつばら平和主義にありというのとはわかりますが、万やむを得ず和平主義をすて、激烈に走るというのが実情です。先生の学術的な眼で我が国を觀察されたのでは、その社会的情勢について見通せないところがあるのでありませんか。我が国のことについて分かっているものは皆

知っています」³⁴。楊度は清国の実情を話し、嘉納の理想論について反論している。嘉納は「君の言うことは重要なことだと思ふ。貴国の実情はそうかもしれない。しかし、これも時勢いかんということではないだろうか。この話は次回にしよう。その時君と論じ合おう。かくて各自散会した」³⁵。ここにおいて注目すべきは嘉納に対する反論である。当時の日本人において、嘉納に反論するなどということは考えられないことである。本論の趣旨ではないが、嘉納と楊度の議論について、嘉納の発言の変化に注目したい。

6 一九二五年（明治三十五年）十月二十三日の講演内容について

「高等実業は即ち専門である。必ず普通学の準備がなければならぬ。ただし、これは理論上の実業教育についてのことであつて、実際の実業教育については普通学の準備がなくてもよい」³⁶。実業教育について嘉納は臨時教育会議で発言しているが、働しながら学ぶということを主張して、普通学については触れていない。

三 まとめ

新民叢報第二十三号、第二十四号の余録「支那教育問題」において 嘉納のことが取り上げられているが、嘉納の教育思想については二十三号に述べられている。その内容は主に（1）道徳教育、（2）智識（3）身体強健であるが、新民叢報にみ

られる嘉納の教育思想は、清国視察を終え、清国留学生を対象としたものであり、考慮しなければならない点もあるが、その後の嘉納の教育思想に通ずるものがあつた。二十四号における楊度との討論の分析は今後の課題としたい。

資料の提供をしてくださった、本学卒業生小松紘一氏に感謝します。本研究は日本武道学会第四十四回大会一般研究発表「新民叢報に見る嘉納治五郎の教育思想」——第二十三号について——（東憲一、飯島啓子）を加筆したものである。

注

- 1 東憲一 一九九二年、「嘉納治五郎研究の動向と課題」東京外国語大学論集、四五号：百二十九・百二十九頁。
- 2 東憲一 一九九五年、「学校教育における嘉納治五郎」東京外国語大学論集、五〇号：一・十二頁。
- 3 東憲一 一九九五年、「熊本における嘉納治五郎とラフカディオ・ハーン」東京外国語大学論集、五一号：百八十七・二百二頁。
- 4 東憲一 一九九六年、「嘉納治五郎と柔道、教育、スポーツのかかわり」東京外国語大学論集、五二号：百九九・二百九頁。
- 5 東憲一 一九九六年、「嘉納治五郎と臨時教育会議」東京外国語大学論集、五三号：九九・百十三頁。
- 6 東憲一 一九九七年、「臨時教育会議にみる嘉納治五郎の体育思想」東京外国語大学論集、五四号：二十三・三十五頁。
- 7 東憲一、村田直樹 一九九九年、「臨時教育会議にみる嘉納治五郎」講

道館柔道科学研究会紀要、第八輯、十一・二十二頁。

- 8 東憲一 一九九七年、「貴族院における嘉納治五郎」東京外国語大学論集、六三号：九九・百十三頁。

9 東憲一 二〇〇二年、「嘉納治五郎再考」Symposium / Nr.17 : 45-54、ドイツ語学文学研究会編。

10 酒井順二郎 二〇一〇年、「清国人日本留学生の言語文化接触 相互誤解の日中教育文化交流」、ひつじ書房。

11 老松信一 一九七六年、「嘉納治五郎の中国人留学生教育」日本武道学会第八回大会研究発表抄録

12 前掲書（注10を参照）

13 小松氏訳文より。

14 嘉納治五郎 一九九八年、「一九〇二年（明治三十五年）七月二十一日、公命をもって、清国視察のため、新橋出発。七月二十三日清国に着く。十月十六日帰国」講道館監修「嘉納治五郎体系第13巻」本の友社。

15 前掲書（注13を参照）

16 前掲書（注13を参照）

17 前掲書（注13を参照）

18 前掲書（注13を参照）

19 前掲書（注13を参照）

20 前掲書（注13を参照）

21 前掲書（注13を参照）

22 前掲書（注13を参照）

23 前掲書（注13を参照）

24 前掲書（注13を参照）

25 田中洋平、石川美久 二〇〇九年「嘉納治五郎の言説に関する資料目録（一）」『嘉納治五郎体系』未収録史料（明治期）を中心に――

- 武道学研究、第四二号―二三―二四六頁。
- 26 田中洋平、石川美久 二〇一二年、「嘉納治五郎の言説に関する資料目録（2）」―『嘉納治五郎体系』未収録史料（大正期）を中心に―、武道学研究、第四三―二号、二五―四〇頁。
- 27 前掲書（注5を参照）
- 28 前掲書（注6を参照）
- 29 前掲書（注7を参照）
- 30 海後宗臣編 一九六一年、「臨時教育会議の研究」東京大学出版会。
- 31 前掲書（注8を参照）
- 32 前掲書（注5を参照）
- 33 前掲書（注5を参照）
- 34 前掲書（注13を参照）
- 35 前掲書（注13を参照）
- 36 前掲書（注13を参照）

平安初期における日本紀講書

——中国三史の講書との関わりから——

顧姍姍

はじめに

上代における日本紀講書は、弘仁・承和・元慶・延喜・承平・康保度の六回に亘って行われてきた¹⁾。この六回の講書の諸問題について、訓詁学や歴史学の分野では、すでに多くの研究が蓄積されている²⁾。しかし、平安前期の姓氏問題、官学の変遷、皇統の交代を背景にした歴史学の視座から、或いは日本書紀の訓読を中心とした訓詁学の視座から行われた考察が中心であり、大学寮で平素より開催されていた中国三史（史記・漢書・後漢書）の講書と日本紀講書との関わりを詳細に検討した上で、日本紀講書の位相を捉える論考は未だに少ない。

近年、梅村玲美氏が『西宮記』における日本紀講書に関する記述と、天皇「御読書」などの漢籍講書に関する記述を比較し、「尚復唱文」・「詠詩之冊」という側面における両者の共通点を指摘しており、日本紀講書の儀式が漢籍の講書のそれに影響されているという側面を浮彫りにしている³⁾。こうして漢籍の講書との共通点を検討することを通じ、日本紀講書の位相の一端を明らかにした梅村氏の研究方法に導かれ、本論では中国三史の講書との相違点に視線を向け、双方の独自性を見いだす

ことにより、日本紀講書の位相に新たな光を当てることを企図する。そこで、中国三史及び日本書紀の講書の性格や意義を反映する様々な要素の中で、殊に相違が顕著である講書の受講者、講書の場所、講書の終了を祝う竟宴の状況に着目し⁴⁾、両者の特徴を対照することにより、初期に行われた弘仁度・承和度、及び大きな変貌を遂げた元慶度の日本紀講書の意義について再検討したい。

一、講書の受講者

講書の目的や意義は、講書の対象、即ち受講者の特徴を考察することにより、その一端をうかがい知ることが可能である。つまり、講書が如何なる人のために行われていたのかという問題は、中国三史と日本書紀との講書の意義を明らかにする作業と直接に繋がっているものだと言えよう。本論において、六国史をはじめとした史書や、平安前期の詩文集における関連資料を調査したところ、中国三史と日本書紀との講書が、その受講者の構成において顕著な相違を示していることが判明した。中国三史の講書が奈良時代から、天皇及び国家官吏の候補生たち

を第一義の受講者としていたのに対して、日本紀講書は、前者における第一義の受講者であった天皇を除外し、一部の国家官吏を主な講書の対象にしていたのである。さらに、日本紀講書自体は、弘仁・承和度に対し、元慶度以降は、その受講者としての国家官吏の構成上で大きな変貌を見せている。以下では、中国三史と日本書紀との講書の受講者をそれぞれ明らかにし、両者の特質を総合的に考えてみる。

中国三史の講書の受講者

中国三史の講書についてであるが、『続日本紀』宝亀六年（七七五）十月二日条の吉備真備の薨伝に

平五年帰朝、授正六位下、拜大学助。高野天皇師之、受礼記及漢書。

天平五年に帰朝して、正六位の下を授けられ、大学の助に拜す。

高野の天皇之を師として、礼記及び漢書を受け給ふ⁵。

とあるように、日本の天皇への中国史の最古の講書は、遣唐留学生の吉備真備が帰朝した後、高野（孝謙）天皇の在位期間、即ち天平勝宝元年（七四九）から天平宝字二年（七五八）までの間に遡ることができる。また、三善清行の「意見十二箇条」から、以下の通り天平頃に吉備真備が大学寮の学生に三史を学ばせたことが看取される。

至于天平之代、右大臣吉備朝臣、恢弘道藝、親自伝授。即令学生四百人、習五経三史、明法・算術・音韻・籀篆等六道。（『本朝文粹』卷二「意見十二箇条」）

天平の代に至り、右大臣吉備朝臣、道藝を恢弘し、親ら伝授す。即ち学生四百人をして、五経三史・明法・算術・音韻・籀篆等六道を習わしむ⁶。

なお、『続日本紀』天平宝字元年（七五七）十一月九日条に

勅曰、如聞。頃年、諸国博士医師、多非其才、託請得選。非唯損政、亦無益民。自今已後、不得更然。其須講經生者、三経。伝生者、三史……

勅して曰はく、如聞。頃年諸国の博士医師は、多くの其の才に非ず、託請して選を得たり。唯政を損なふのみに非ず、亦民に益すること無し、と。自今已後、更に然るを得ざれ。其経を講ずべき生は三経を、伝生は三史を……

とあるように、高野天皇の退位の前年に、三史を読めることが諸国の伝生（博士）の任命条件として、勅旨によつて定められるようになったのである。

要するに、中国三史については、天平期の朝廷による唐の文化や政治制度を受容しようとする趨勢の中で、中国から渡来して間もなく、天皇と官吏の候補者を対象とした講書の伝統が形成されていたと考えられる。

平安朝に至るまで、こうした中国三史の講書の伝統は、引き続き継承された。

まず、天皇への三史講書についてであるが、正史を紐解くと、『類聚国史』弘仁七年（八一七）六月十五日条に嵯峨天皇が史記、『続日本後紀』承和二年（八三五）七月十四日条と、同書承和十四年（八四七）五月二十七日条にそれぞれ仁明天皇が後漢書と漢書、『三代実録』貞観十七年（八七五）四月二十八日条に清和天皇が史記、『日本紀略』寛平三年（八九一）四月九日条に宇多天皇が史記、同書延喜六年（九〇六）五月十六日条に醍醐天皇が史記を受講したという記事が見られる。

これら天皇が講書を受けた時点の年齢を見ると、嵯峨天皇が四十歳、仁明天皇が二十五歳と三十七歳、清和天皇が二十五歳、宇多天皇が二十四歳、醍醐天皇が二十一歳であるため、天皇が成人後自ら三史の講書を行わせたのではないかと思われる。また、清和天皇については検討する余地があるが、その他の天皇、嵯峨・仁明・宇多・醍醐天皇は、何れも積極的に親政の姿勢を取っている天皇であるとされている。彼らは、国政を自ら行なうために、中国三史の学習が必要なものであると自覚したのではなからうかと考えられる。

一方、国家官吏の候補生と考えられる人たちは、平安朝に入り、中国三史の講書を受けることが制度的に規定されている。天長元年（八二四）八月二十日の太政官符には

緬尋古典、歴覧前王、勞於求賢、逸於經国。伏望、諸氏子孫、咸下大学寮、令習読経史。学業足用、量才授職者。宜五位已上子孫、年廿以下者、咸下大学寮。（『本朝文粹』卷二、〇五五「意見封事 公卿意見六箇條」）

古典を緬尋し、前王を歴覧し、求賢に勞し、經国に逸る。伏し

て望むらくは、諸氏の子孫、みな大学寮に下して経史を習読せしめ、学業用うるに足れば、才を量りて職を授けんことを、よろしく五位以上の子孫にして年二十より以下のもの、みな大学寮に下すべし。

とある。つまり、五位以上の貴族たちの子孫は大学寮に入り、経書と共に史書を勉強し、卒業後は才能に応じて官吏に登用する国家の政策が取り上げられている。殊にその根本的な目的については、「求賢」「経国」にあるとも明言されており、きわめて政教的なものである。

また『延喜式』における「大学式」に関する定め

凡擬文章生、以廿人為限、補其闕者。待博士挙、即寮博士共試一史文五条、以通三以上者補之。

凡そ擬文章生、廿人を以て限りと為せ、其の闕を補せんには、博士の挙を待ちて、即ち寮・博士共にも一史文五条を試し、三以上に通ずる者を以て之れに補せ⁷。

とあるように、大学寮の寮試では史記・漢書・後漢書のうち、一史の五条を読ませ、三条以上に通じた者を合格とすると定められている。なお、久木幸男氏が『日本古代学校の研究』において、「紀伝道入学者は明経道などに比べて若年で入内している上に、極位（最高到達位階）も高く大半が四位に達している。その中でも、史学を学んだ人は五十歳代後半に従四位上に達しているが、文学を学んだ人は平均五年位遅れている。」と述べているように、三史に通じた者は、朝廷において相当重んじら

れたようである。

さらに、三史の知識は、以上見てきたように官吏候補生が官吏になる時に重んじられると同時に、その生涯を終えた後も、彼を評価する基準の一つとして重視されているのである。事例が多いため、二三例を挙げることに留めるが、例えば、『続日本後紀』承和七年（八四〇）四月二十三日の条の藤原常嗣の薨伝における「少遊大学、涉獵史漢（少して大学に遊び、史漢を涉獵す）」、『続日本後紀』承和十年（八四三）六月十一日の条の朝野鹿取の薨伝における「少遊大学。頗涉史漢（少して大学に遊び、頗る史漢に涉り）」、『三代実録』貞観三年（八六一）九月二十四日の条の豊階安人の薨伝における「涉読史伝。最精漢書（史伝を涉読す。最も漢書に精ずる）」などの記述から、史記・漢書・後漢書に精通することが、賢明な官吏の素質として大いに評価されていたことが分かる。

こう考えると、天平期から平安初期までの中国三史の講書は、中国的な律令国家の政治をより円滑に運営するために、天皇から官吏まで広範囲の受講者を有する国家の事業であると言っても過言ではなからう。

日本紀講書の受講者

一方、日本書紀は、天皇の教養の書物の範囲から除外され、国家官吏の養成機関である大学寮の教科書にも採用されていない。その講書は、ただ一部の官人のみを受講者の対象としていたのである。中国三史の講書の対象との相違から考えると、

日本書紀の講書が、天皇、国家官吏が国家政治を運営するに当たり不可欠であると考えられた上で行われた行事ではないとは言えよう。

まず、初回の講書と考えられる弘仁度の日本紀講書についてであるが、『日本後紀』弘仁三年（八一二）六月二日条に

是日、始令参議從四位下紀朝臣広浜・陰陽頭正五位下阿倍朝臣真勝等十余人讀日本紀。散位從五位下多朝臣人長執講。
是の日、始めて参議從四位下紀朝臣広浜・陰陽頭正五位下阿倍朝臣真勝等十余人をして日本紀を讀ましむ。散位從五位下多朝臣人長執講す。

とある。また、『日本書紀私記』（甲本）（『弘仁私記』とも）に

冷然聖主、弘仁四年在祚之日、愍旧説將滅、本紀合訛。詔刑部少輔從五位下多朝臣人長、使講日本紀。即課大外記正六位上大春日朝臣穎雄、民部少丞正六位上藤原朝臣菊地麻呂、兵部少丞正六位上安倍朝臣藏繼、文章生從八位上滋野朝臣貞主、無位嶋田臣清田、無位美努清庭等受業、就外記曹局而開講席。

冷然聖主弘仁四年在祚の日、旧説の將さに滅びむとし、本紀の訛りを合めるを愍ふ。詔して刑部少輔從五位下多朝臣人長をして日本紀を講ぜしむ。即ち課大外記正六位上大春日朝臣穎雄、民部少丞正六位上藤原朝臣菊地麻呂、兵部少丞正六位上安倍朝臣藏繼、文章生從八位上滋野朝臣貞主、無位嶋田臣清田、無位美努清庭等受業し、外記曹局に就きて講席を開く。¹⁰

とある。受講者の構成では、『日本後記』と『日本書紀私記』には一致しない箇所があるが¹¹、それぞれ記した受講者の官位を見てみると、公卿と言えぬ者には参議の紀広浜一人しか見当たらない。陰陽頭正五位下の阿部真勝以外、六位及び六位以下という下級官人が殆どである。

また、承和度の受講者に関する史料が見当たらないが、「承和度の開講は中務省の実務官僚に故事を知らしめるため」と関晃氏に指摘されるように¹²、承和度も実務官僚たる下級官吏が受講者の中心であることがわかる。

先行研究によりすでに指摘されてきたように、弘仁度、承和度の講書は平安初期に起こった氏姓問題にその開催の背景がある。なお、葉子の変・承和の変という皇統交代の歴史的事件と緊密に関連しているという見解もある¹³。これらの論考における、特別な時代背景のもとで、各時期に行われた講書が何等かの目的を有するという指摘は、日本紀講書が一部の特別な受講者に対しての講書であることを裏付けているものであろう。

さらに、元慶期を境として、受講者の身分構成には大きな変化が生じてくる。『三代実録』における三つの記述を見てみよう。それぞれ開催・再開・終了後の記述である。

元慶二年（八七八）二月二十五日条

於宜陽殿東廂、令従五位下行助教善淵朝臣愛成、始読日本紀、
従五位下行大外記嶋田朝臣良臣為都講。右大臣已下参議已上、
聴受其説。

宜陽殿東廂に於て、従五位下行助教善淵朝臣愛成をして、始めて日本紀を読ましめ、従五位下行大外記嶋田朝臣良臣を都講と

為しき。右大臣已下参議已上その説を聴受しき。

元慶三年（八七九）五月七日条

令従五位下守図書頭善淵朝臣愛成、於宜陽殿東廂、読日本紀。
喚明経紀伝生三四人為都講。大臣已下毎日便開読。前年始読、
中間停廢、故更読焉。

従五位下守図書頭 善淵朝臣愛成をして、宜陽殿の東廂に於て日本紀を読ましめ、明経紀伝生三四人をめて都講となし、大臣已下毎日開読しき。前年始読み、中間にして停廢す。故に更に始め読みき。

元慶六年（八八二）八月二十九日条

於侍從局南右大臣曹司、設日本紀竟宴。先是、元慶二年二月廿五日、於宜陽殿東廂、令従五位下助教善淵朝臣愛成、読日本紀。従五位下大外記嶋田朝臣良臣及文章明経得業生学生通都講。太政大臣右大臣及諸公卿並聴之。

侍從局の南右大臣の曹司に於いて日本紀の竟宴を設けき。是より先、元慶二年二月二十五日、宜陽殿の東廂、従五位下助教善淵朝臣愛成をして、始めて日本紀を読ましめ、従五位下大外記嶋田朝臣良臣、及び文章明経得業生学生数人たが通ひに都講となり、太政大臣右大臣及諸公卿並びに之を聴き、五年二月二十五日講竟りき。

傍線部から、元慶度の日本紀講書では、大臣以下、参議以上、所謂公卿が受講者であり、下級官吏が講書の受講者であった弘仁・承和度と異なっていることが分かる。

ここで二つのことに注目したい。一つは、幼帝の陽成天皇の参加が確認できないことに加え、延喜講書のように宣旨が出された形跡もないため、日本紀講書を開催させることを決めたのは、政治運営の実権を握っている摂政の藤原基経である可能性が高いことである。これに関しては、玉井力氏が、幼帝の儀式における役割について、「幼帝であつても主宰せねばならない事柄は神事・儀式を中心として少なくない。それは権威の部分、つまり支配者層統一の思想的なよりどころとなる行為は、摂政の設置とは関わりなく天皇に残されていたからである¹⁴」と述べている。こう考えると、元慶年間、陽成天皇が日本紀講書という儀式から疎外されたことは、かなり興味深い。摂政の基経は王権代行者の立場、ひいては自分を天皇の立場に引き換えて講書の儀式を主催しているのではないかと考えられる。

もう一つは、元慶度の講書に参加する者、即ち、受講者、講書者、傍聴者らが一つの政治の世界を構成していることである。その中で、最も身分の高い人物は基経である。彼は、講書の勅が下った元慶二年の時点では、摂政右大臣であり¹⁵、講書が再開された元慶三年の翌年十一月に関白に補任され、同年十二月に太政大臣に任ぜられている。また、受講者には、源多をはじめとした公卿たちがいると同時に、太政官の中で実務を扱う下級官人は陪席の立場に、官吏の予備軍である大学寮の学生は講書の助手の立場にある¹⁶。基経、及び彼を擁護する者たちは、講書の場合において基経を頂点とした世界を形成したと考えられる。

これらは、基経が自邸で文人を招き、文事を開催したことを想起させる。滝川幸司氏は「藤原基経と詩人たち」において、「宮

廷詩宴は、天皇を賛美する詩が詠まれることで、天皇を頂点とする社会の秩序を認識させ、君臣の紐帯を再確認させる機能をもっていた」と述べ、「基経は自らを主とし奉仕する官人達が参集する極めて政治的な場を作りあげようとしたことになろうか¹⁷」と指摘している。この説に依拠し、元慶六年における基経を中心とした日本紀講書の政治的な意義を認めてもよからう。

すなわち、受講者に着目すれば、元慶度の日本紀講書は、藤原基経が最高官位者として受講し、また彼を囲む官人たちが共に参加しており、基経を頂点とした政治的世界が形成されると言えよう。これが、天皇・官吏の候補者（大学寮の学生など）をそれぞれ対象としている中国三史の講書、或は下級官吏が殆どの受講者であった弘仁・承和度の日本紀講書には窺えない特質であると言ってもよからう。

二、講書の場合

平安京の都市構造は、天皇を頂点とした律令国家の秩序に基づき、空間的秩序を有するものである。そのために、講書対象の身分によって講書が行われる場所は異なるわけである。これは、公卿を講書の主要な受講者とした、内裏における日本紀講書を検討する際に、念頭に置くべき重要なポイントである。

中国三史の講書の場所

天皇を対象とした中国三史の講書の場所は内裏である。以下は、それを明記した史料である。

『続日本後紀』承和二年（八三五）七月十四日条

天皇御紫宸殿、正四位下菅原朝臣清公侍読後漢書。数日之後不遂而輟。

天皇、紫宸殿に御して、正四位下の菅原朝臣清公、後漢書を侍読す。数日之後、遂げずして輟む。

『続日本後紀』（卷七十七）承和十四年（八四七）五月二十七日条

皇帝引文章博士春澄宿祢善繩於清涼殿、始読漢書。

皇帝、文章博士春澄宿祢善繩をして清涼殿に於て、始めて漢書を讀ましむ。

紫宸殿は、内裏内郭の南部にある正殿であり、国家儀式などが行われる公的な空間を構成した殿舎で、当時の国政の中心の場であった¹⁸。『三代実録』の貞観十三（八七二）年二月十四の条に

承和以往、皇帝毎日御紫宸殿、視政事。仁寿以降、絶無此儀。

承和以往、皇帝毎日に紫宸殿に御して政事を視給ふ。仁寿以降、絶えて此の儀が無し。

とあるように、仁明天皇から文徳天皇以前は、天皇は毎日紫宸

殿に御して聴政を行なっていた。これと同時に後漢書の講書が行われたのである。即ち、中国史の講書が国政と深く関わることが窺える。

清涼殿は、紫宸殿の西北側に位置しており、嵯峨朝・淳和朝からそこで仏教の行事・内宴・曲宴が開催されたという記事がみられる¹⁹。ただ、『日本後紀』弘仁十四年（八二三）十一月十三日条に

右大臣正二位藤原朝臣冬嗣・大納言従二位藤原緒嗣等、於清涼殿口奏言……天皇勅答……

右大臣正二位藤原朝臣冬嗣・大納言従二位藤原緒嗣等、清涼殿に於て、口奏して言さく……天皇勅答すらく……²⁰

とあるように、弘仁年間には、清涼殿において、嵯峨天皇が大嘗祭についての公卿の口頭奏上を聞いたこともある。清涼殿は、紫宸殿に比べ私的な空間と見なされるが、弘仁年間には政治的な場として用いられたことは否定できない。

要するに、九世紀前期において天皇への中国三史の講書は、内裏の公的な空間で行われていたことが分かる。これは、天皇自身が三史の講書を国家政事の運営と繋がる重要な行事として考えていたことを物語っているであろう。

また、中国三史は、平安時代では大学寮の紀伝道の教科書であるため、大学寮の北堂で教授されると同時に、私学の発達により、大学寮教育の補助的性格を有した大学別曹の勸学院や、菅家の私塾などにおいても、その講書が行われるようになった²¹。

大学寮は、朱雀大路の東、二条大路の南、壬生大路の西、三

条坊門小路の北に当たる四町の区域を占めており、大内裏の南側に位置している。勸学院は、坊城小路の東、壬生大路の西、姉小路の南、三条大路の北に位置しており、大学寮の南側にあたる。なお、菅家の私塾は、道真の「書齋記」（『菅家後集』）に「東京宣風坊に一家あり」とあるため、左京五条に位置するとされている²²。つまり、国家官吏の候補者としての学生を対象とする講書は、国家政治の場である大内裏の外側で行われていることが明らかである。

最後に、九世紀には公卿が内裏において中国三史を受講した事例も確認してみよう。島田忠臣の詩作「右丞相の省中の直廬に於て史記を読み竟りぬ。史を詠じて「高祖」を得たり」（『田氏家集』三七）から、貞観三年（八六一）から六年（八六四）までの間のある時期に、当時の右大臣の藤原良相の「省中直廬」、即ち内裏の中において、史記の講書が行われたことを推測することができる。『三代実録』貞観九年（八六七）十月十日条の藤原良相の薨伝によると、

及於弱冠、始遊大学、雅有才弁……愛好文学之士、挾大学中貧寒之生、時賜綿絹、冬天慘烈、多縫造被、遍賜四学堂夜宿者、時節喚学生能文者、賦詞賚物数矣。

弱冠に及びて、始めて大学に遊び、雅より才弁有り……文学の士を愛好し、大学の中の貧寒の生を挾びて、時に綿絹を賜ひ、冬天慘烈なれば、多く被を縫ひ造りて、遍く四学堂に夜宿する者に賜ひ。時節学生の文を能くする者を喚して、詞を賦せしめ、物を賚くこと数ありき。

と見え、藤原良相が若くて大学寮に入学し、学業に優れており、文学および文学者を愛好している人物であることが分かる。「省中直廬」における史記講書は、恐らく藤原良相、およびその近習のために行われたものであり、私的な性格を有していると思われるが、右大臣の内裏において直廬が設置されたこと、また内裏において史記の講書がされたのは、清和天皇の政治的立場と、前期摂関政治の展開に起因するだろう。これについては、鈴木琢郎氏が、良相の娘の多美子が清和天皇の最初の女御であるという要因を指摘し、「藤原良房の内裏直廬を清和の代りに内裏で政務を執るための施設と捉えたが、良相の重臣の曹司もこれと関連して理解すべきである。良相は幼帝清和の政務代行を行なっている良房のもとで、右大臣としての政務を執るのである、すなわち良房・良相の兄弟間での政務とは、「天皇―大臣」間の政務処理に相当する²³」と述べている。この説に従うと、内裏の場における公卿を対象とした講書の開催が可能となったことは、前期摂関政治の展開と緊密な関連を有するといってもよからう²⁴。

ここで平安前期における中国三史の講書の場所の特徴を纏めてみると、天皇への講書が内裏で行われるのに対して、また国家官吏の予備軍と考えられる者達を対象とする講書が、内裏から遠く離れる場所、即ち大内裏の東南側にある大学寮・勸学院・菅家私邸で行われることが明らかである。なお、公卿を受講者とする講書は、極めて稀であり、特別の事情として認識すべきではないかと考えられる。

天皇を頂点とした律令制の国家秩序は、三史講書の空間秩序においても現れていると言っても過言ではない。換言すれば、

内裏を国政の中心とした九世紀の平安京の都市構成の空間秩序に基づき、三史講書の場所を確認することにより、受講者の政治的地位を窺うことができる。

日本紀講書の場所

こうした中国三史の講書と比較して、日本紀講書の場所についてはどうであつたらうか。弘仁・承和度と元慶度との間には大きな変遷が認められる。殊に、藤原基経を中心とした元慶度の講書については、新たな視座からの考察が可能である。

弘仁度は、前述した『日本書紀私記』にあるように、講書の場所が「外記曹局」である。外記曹局は、内裏外郭の東門にあたる建春門の東側に位置している。また、承和度は、『続日本後紀』承和十年（八四三）六月一日条に

令知古事者散位正六位上菅野朝臣高年、於内史局、始読日本紀。古事を知る者の散位正六位上菅野朝臣高年をして内史局に於て、始めて日本紀を読ましむ。

とあるように、内史局²⁵であつたことが分かる。ただし、内史局の場所については、一致した見解が未だに見出せない。関晃氏は内史局を「釈紀講例の建春門南掖曹局と同所であろう²⁶」と指摘し、その場所が内裏外郭の外側に位置することを示唆している。橋本不美男氏は、内史局が内記局の唐名であり、「宜陽殿の東にあつた内記局の詰所²⁷」と述べ、内裏内郭の東門に

あたる宜陽門の南側にある内記局と同所であると指摘している。両者の説は異なりながらも、内史局が内裏内郭の外側にあるという点では一致している。

だが、元慶度を契機として、日本紀講書の場所は内裏内郭の外側から、内裏内郭にある宜陽殿に移され、それ以降も宜陽殿東廂で行われるのが慣例となつた。ここで以下の三点に注目したい。

一つは、内裏内郭は本来男性官人が入ることのできない空間である。吉川真司氏の考察によると、飛鳥時代には、内郭に男性官人が立ち入る場合、闈司により天皇の許可を得るべきであるとされていたが、八世紀末の延暦年間に、内裏内郭は公卿が日常的に詰める場所となつた²⁸。また、『養老令』の「宮衛令」によれば、そうした特権を持つ男性官吏は、五位以上の貴族に限られている。なお、飯淵康一氏らの「平安宮内裏承明門・日華門の儀式時における性格」が言及しているように、内裏内郭における儀式には、「立太子」「立后」「任官式」「讓位」「天皇元服・拝賀」だけに限り、六位以下の官人の参加が許されている。しかし、たとえその参加が許可されていても、「五位以上は承明門内・南庭、六位以下は承明門外に列立する²⁹」とあるように、六位以下の官人は内裏内郭に立ち入れないことが分かる。しかしながら、元慶度の講書は、「喚明経紀伝生、三四人為都講（明経紀伝生三四人を喚して都講と為し）」とあるように、無官位の大学寮の学生も参加しており、毎日内裏で開催されている。彼らを内裏に入れるために、天皇の許可を得るなど、ある程度の手数を要したのであろう。こう考えると、基経がわざわざ内裏の外側に位置している場所、例えば弘仁・承和度の

講書が用いた外記庁・内史局を放棄し、決して自由に入れるとは言えない内裏内郭において講書を行わせたことは、彼にとつて何らかの特別な意義を有しているといえるのではなからうか。

もう一つは、宜陽殿の政治的な空間としての性格である。宜陽殿は、紫宸殿の東にある殿舎である。その母屋には累代の御物が収められ、また母屋の三面に廂がある。北廂の西半は次将座、東半は脇陣である。西廂の南部は上古の左近陣、北部は公卿座である。この公卿座は、天皇不出御の場合の、公卿の控所である³⁰。日本書紀の講書が行われた東廂には、北に大臣の宿、その南に上官侍、南東隅には議所があり、叙位と除目の儀が行われる。叙位と除目の儀は、何れも親王や国家官吏の関心事であり、国家政治機構の人的構成、ひいては国家政治の行方を左右する重大な政事である。

さらにもう一つは、宜陽殿その場でこそないものの、宣仁門を通じて宜陽殿と連絡している紫宸殿の東廊が、弘仁年間（或いは元慶年間）から公卿の議定である陣定が行われる場となったことである³¹。元慶年間の宜陽殿は、国家政治の中心の場にきわめて近隣している空間である。これは、前述した天皇への史記の講書の行われた紫宸殿が、九世紀の初葉における国政の中心であったことを想起させる。

要するに、中国三史の講書においては、受講者の身分の相違により、講書の場所は、それぞれ内裏の内郭と大内裏の外側とに峻別される。天皇を最高権力者とした律令国家の秩序を厳守しているのである。弘仁年間には内裏内郭の外側で開催された日本紀講書は、元慶期には宜陽殿という国政の重要な場に移つ

た。これは、基経が、摂政、後に関白の位に就き、天皇の権力と匹敵するところか、超越するほどの政治力を有したため、実現したことであろう。朝廷の権力紛争や政治変動は、ありのままに国家の文事に投影していると思われる。

こうして中国三史と日本書紀との講書の場所の特徴を検討することにより、元慶度の日本紀講書が、藤原氏の政治支配力の増大という時代の趨勢を忠実に反映しているものであることがより一層明白になろう。

三、竟宴の状況

竟宴は、講書の終了後に行われる宴会であり、その有無と、また開催された際の様子には、講書が重要視されていたことが反映されている。中国三史と日本書紀との講書は、竟宴の有無、竟宴の場所、竟宴での文学様式などの側面でそれぞれ特徴を有する。殊に、元慶度講書の終了を祝う日本紀竟宴の初回の開催は、同時代の中国三史のそれと比較すると、革新的な性格が顕著である。

中国三史竟宴

まず、日本紀竟宴より先に行われてきた中国三史の竟宴の状況をみてみよう。

『凌雲集』（弘仁五年（八一四））に「史記竟宴、賦して大使自

序傳を得たり」の竟宴詠史詩が収められているため、史記の竟宴は、『凌雲集』成立の弘仁五年以前に、すでに開催されていることが分かる。『文華秀麗集』（弘仁九年（八一八））「詠史」の部門には、嵯峨天皇の作品をはじめとした四首の竟宴詠史詩が見られる。ただし、弘仁期における中国三史の竟宴の場景に関する具体的な記述が見当たらないため、史記の竟宴では嵯峨天皇が参加したといっても、竟宴の場所が内裏における公的な場であると断定はできない。弘仁以降は、貞観三年から六年までの間に、藤原良相の「省中直廬」における史記竟宴が挙げられるが、それはやはり前述したように、藤原良相のために開催された私的記事と見なすべきであろう³²。

中国三史の竟宴の様子が初めて詳述されているのは、貞観六（八六四）年に行われた後漢書竟宴である。菅原道真の「八月十五日嚴閣尚書授後漢書畢。各詠詩得黃憲」の詩序における

嚴君知斯文之直筆、謂斯文之良吏、遂引諸生、校授芸閣。……遊宴之盛、亦復如是。子墨客卿、翰林主人、請各分史、以詠風流云爾。

嚴君斯の文の直筆なるを知り、斯の文の良吏たるを謂ひ、遂に諸生を引き、芸閣に校授す。……遊宴の盛なること、亦復是の如し。子墨客卿、翰林主人、請ふ各々史を分ち、以て風流を詠ぜんと云ふことしかり³³。

という記述から、公卿が参加したことを確認できると共に、芸閣即ち菅家廊下という私的な場所で行われたことも分かる。

また、元慶六年度の春に開催された後漢書の竟宴を見てみよ

う。これは同年に行われた日本紀竟宴より数か月ほど早いものであった。当時の竟宴の経緯などは、紀谷長雄の手によって綴られた「後漢書竟宴、各史を詠じて龐公を得たり」詩序と、菅原道真の「北堂にて澆章の宴の後、聊かに所懐を書して、兵部田侍郎に呈し奉る」とから伺うことができる。前者は竟宴の場所を明記していないため、後者を引用してみる。

北堂澆章宴後、聊書所懐、奉呈兵部田侍郎。

誇著槐林來客尊 祇迎宰相到黃昏

伶人枕鼓池頭臥 胄子懷詩壁下蹲

何更先談聞宿老 自然後幾發雲孫

公卿乍會初遊宴 幸甚生涯不測恩（『菅家文章』九〇）

北堂にて澆章の宴の後、聊かに所懐を書して、兵部田侍郎に呈し奉る。

槐林に誇著して來客尊し。祇みて宰相を迎へて黃昏に到る。

伶人は鼓に枕して池の頭に臥す。胄子は詩を懷にして壁の下に蹲る。

何ぞ更めて宿老に先談を聞かむ。自然の後幾 雲孫を發かむ。

公卿乍ちに會ひて初めて遊宴す。幸甚なり 生涯測らざる恩。

題目が示すように、大学寮の北堂で催されている。また、「祇みて宰相を迎へて黃昏に到る」、「公卿乍ちに會ひて初めて遊宴す」とあるように、宰相（參議の唐名）をはじめとした公卿たちも参加しているのである。川口久雄氏の考察によると、そのうち、参加者のうちで官位の最も高いのは民部卿藤原冬緒と治部卿在原平行である³⁴。

さらに、元慶以降の中国三史の竟宴については、菅原道真の「勸学院、漢書竟宴。史を詠じて叔孫を得たり」、「扶桑集」の「詠史」の部に収められた、菅原淳茂の「北堂、漢書竟宴、史を詠じて高祖を得たり」、橘在列の「北堂、漢書竟宴、各史を詠じて淮南王劉安を得たり」、紀長谷雄の「北堂、史記竟宴、各史を詠じて孫通を得たり」、菅原文時の「北堂漢書、史を詠じて路溫舒を得たり」、源訪の「北堂漢書、史を詠じて李廣を得たり」、紀有昌の「北堂、漢書竟宴、史を詠じて蘇武を得たり」の詠史詩の題目から分かるように、勸学院や大学寮の北堂において開催されてきたのである。

ここでまとめてみると、中国三史の講書の終了後は、弘仁期から竟宴が行われるのが伝統であった。また、場所から考えると、貞観以降は、公卿の参加は見られるものの、大学寮にある北堂、菅家の私邸という政治に直接関わらない所において行われる例が殆どであることが明らかである。

日本紀竟宴

日本紀竟宴はどうだろうか。まず、竟宴の有無の側面においては、九世紀前半においては、中国三史の講書が竟宴を伴って行われたのに対して、弘仁・承和度の日本紀講書の終了後は竟宴が開かれなかったことが明らかである。元慶度に至り、初めて侍従局の南にある右大臣の曹司において盛大な竟宴を開催することになり、それ以降の延喜度・天慶度も侍従所において竟宴を行なっていたことがわかる。以下では、日本紀竟宴に関

する史料を幾つかあげながら検討を加えてみる。

元慶度は、『三代実録』元慶六年（八八二）八月二十九日条に

於侍従局南右大臣曹司、設日本紀竟宴。

侍従局の南の右大臣の曹司に於て日本紀の竟宴を設けき。

とある。侍従局は、外記庁（建春門の東側に位置する）の南に位置している³⁵。右大臣の曹司は、この侍従局の南に位置し、右大臣の源多が外記庁の政務を迅速に扱うために設置された曹司であると考えられる。ここで、注意すべきなのは、平安初期より、本来公卿の会議が行われるはずの太政官庁では会議が行われず、実際には外記庁で実施されていたため、外記庁は、太政官庁の機能を有するものだといえるということである³⁶。延喜度は、『日本紀略』延喜六年（九〇六）閏十二月十七日条に

於侍従所、日本紀竟宴、每人分史詠歌。

侍従所に於て、日本紀竟宴、每人史を分かち歌を詠じき。

とある。天慶度の記述と考えられる『西宮記』「臨時二」における「始読日本紀事」に

二三年間、講読竟。定日、設宴座侍従所。

二三年の間に、講じて読み竟りぬ。日を定め、宴の座を侍従所に設く。

とある³⁷。この侍従所は、前述した侍従局（南舎とも）のことであり、外記庁と渡廊を通して繋がっている³⁸。

要するに、九世紀後半において、中国三史の竟宴が政治と直接関らない場所で行われたのに対し、日本紀講書の終了後は、その竟宴を政治の場において開催させたのである。

さらに、文学的要素から考えると、日本紀竟宴は、同時代の中国三史のそれを意識しながらも、新たな性格を示している。

竟宴の詩序を書いた菅原道真は、得業文章生であり、元慶六年の漢書竟宴の詩序を書いた紀長谷雄は、その一年前に文章得業生であり、讃岐権少目に任じられたばかりである。これに反して、三回の日本紀竟宴の序文は、それぞれ正六位上の大内記の菅野惟肖、三統理平、橘直幹が書いたものである。つまり、序文を書く者の資格を考えると、後者のほうがより儀式を重要視しているのではないかと考えられる。

竟宴の文学様式の点では、中国三史の竟宴では漢詩を創作するのに対して、日本紀竟宴では、和歌を通して、日本書紀に登場した神や天皇などを詠じるのである。これについて、講書の目的が日本書紀の訓読にあるという前提を強調し、訓読の効果を確認するために、竟宴において日本語で綴る和歌の文学様式を採用したと論じている研究者は少なくない³⁹。しかしながら、平安時代に、毛詩などの経書の講書は、訓読が行われているにもかかわらず、その竟宴の場では漢詩の文学様式を採用しているのである。そのため、訓読という講書の目的が、竟宴の場で和歌の文学様式を採用させた決定的な原因と言い難い。本論では、この原因を、元慶度の日本紀講書で、天皇親政の弘仁・

承和期における文学行事とは全く異なる世界を構築しようとした基経の意図に求めたい。なぜかというところ、文学様式上での革新のみに止まらず、元慶度の日本紀講書は、講書の受講者・場所、竟宴の有無・場所など多くの要素において、すべて中国三史の竟宴の先例に従わずに、革命的な様相を呈しているためである。

これらのことは、基経が撰関政治を進行させ、自分を頂点とした新たな秩序を作り出そうとする意欲を物語るものではないかと考えられる。殊に、『西宮記』『臨時二』における「講日本紀博士等例」に、

元慶六年。……式部卿親王・太政大臣等、皆被出詠哥也。

元慶六年。……式部卿親王・太政大臣等、皆な詠める哥を出さるるなり。

と見えるように、太政大臣の基経は親王や官人と共に参加し、また共に和歌を詠んでいる⁴⁰。これは、弘仁年間に行われた史記竟宴で嵯峨天皇を中心とした「君唱臣和」の世界と相似した色彩を帯びている。基経は、日本紀竟宴において、天皇が主催する詩宴と同じ構造で、天皇の部分に自分を置き換えようとしたのであろう。陽成天皇が元慶六年の春にすでに元服を迎えたにもかかわらず、朝廷の中堅の政治集団から除外されたことを考えあわせると、元慶度の竟宴は、やはり基経の天皇権力への対抗意識を表しているものだと考えられよう。基経は、養父の藤原良房の遺志を継ぎ、藤原北家を中心とした新たな政治形態の形成に大きな役割を果たし、撰関政治史における極めて重要

な人物であった。元慶六年よりさほど遠くない元慶七年に起こった、陽成天皇の廃位事件は、彼が従来の中央集権的律令国家の秩序を破壊し、新たな摂関政治の秩序を創出するための一つの決定的な政治行為であろう。

要するに、中国三史の竟宴の状況と比べてみると、日本紀竟宴が中国三史のそれを模倣するというより、むしろ革新を求めようとした傾向が大きかったことが窺い知れる。この傾向が基経の政治的野心を反映していると言えよう。

終わりに

以上中国三史・日本書紀の講書との関わりに注目しつつ、両者のそれぞれの特徴を総合的に考察し、平安前期、特に弘仁度・承和度・元慶度の日本紀講書の位相を再検討してきた。ここで改めて要点をまとめてみる。

中国三史の講書は、中国的律令国家を円滑に運営させようとする政治上の需要に応じて重んじられていたため、その講書は、嵯峨天皇、仁明天皇などのような親政姿勢を示した天皇、及び国家官吏の予備軍という広範囲の人々を中心の受講者とするようになっていた。それぞれの講書の場所は、平安京の都市構造の空間的秩序に厳格に即し、天皇を頂点とした律令国家の社会秩序を反映していることが了解される。そのうち、貞観年間に右大臣の藤原良相が内裏にある曹司において史記の講書を行ったという事例も存在しているが、それは、前期摂関政治の進行に原因があると考えられ、講書の場所の空間秩序が各

権力の消長による社会秩序の変化を表わす、という原理には背いていないと考えられる。他方、九世紀の日本紀講書は、ある特定の時代背景のもとで、一部の国家官吏のみを対象としている。殊に、摂関政治が進んでいる元慶年間における日本紀講書は、弘仁度・承和度の先例を破り、その講書の場所を内裏外郭から、内裏における重要な政治の場である宜陽殿に移行させ、その場で天皇の存在を排除し、基経を中心とした、高級官吏（公卿）、下級官吏（弁・少納言・外記・史・内記など）、及び官吏の予備軍（大学寮の学生）から構成した政治の世界を形成している。また、中国三史講書の終了を祝うための竟宴が政治の場と直接に関連していない私的な場で開催されているのに対して、日本紀講書は、元慶度を境にし、侍従所の南の右大臣曹司という政治的な場所において初めて竟宴を開催し、文学様式の選択などの面においても、中国三史の竟宴の先例に従うことなく革新性を打ち出しているのである。こうした斬新さを求める傾向は、基経が朝廷の従来の秩序を破り、自分を頂点とした新たな世界を作り出そうとする野心と関連しているであろう。元慶度の日本紀講書は、当時の政治状況が色濃く投影されており、きわめて特別な意義を有するものだと考えられる。

本論は、中国三史の講書との関わりという視点から、日本紀講書の位相に新たな光を当てるものである。今後、貞観期の神国思想、また元慶の乱などとの関連にも目線を向け、元慶度の日本紀講書をさらに考察し、論を深めていこうと考えている。

1 『日本後紀』(弘仁三年六月二日の条)、『続日本後紀』(承和十年六月一日の条)、『三代実録』(元慶二年二月二十五日の条)、『日本紀略』(延喜四年八月二十二日、承平六年十二月八日、康保二年八月十三日の各条)にそれぞれ日本紀講書の記事が見える。養老度の日本紀講書については、『日本紀』以外の正史にそれに関する記述がない。長谷部将司『続日本紀』成立以降の『日本書記』——『日本書紀』講書をめぐって——(『歴史学研究』、二〇〇七年四月、八二六号、青木書店)二十七頁に「養老度の講書は『続日本紀』に記載がなく、『日本紀』のみに見えるものだが、ただ「養老五年」と弘仁度以降の事例と異なり具体的な記載が見えない。そのため、戦前から宇佐神正康氏をはじめその存在を疑う意見が出されていた」とある。なお、清水潔「上代における毎朝御拝の伝統と神国思想」(『神道史研究』四十四巻二号、一九九六年四月、神道史学会)十九頁に「日本紀講書は養老に一度認められるものの、それは、養老四年(七二〇)に書紀が撰修された翌年のことであり、おそらく撰進を記念した披露の意味合いが強いものであり、講書の講師も、日本書記の選者の一人であった太田麻呂であったから、撰述行為の延長線上にあるものと考えられる」とある。しかし、最近、水口幹氏が「奈良時代の日本書紀講書——養老講書をめぐって——」(『史料としての日本書紀—津田左右吉を読みなおす』所収、勉誠出版、二〇二一年一〇月)において、養老度の講書の存在を認めている。

2 太田晶二郎氏が「上代に於ける日本書紀講究、(二)イ(ろ)」(史学会編『本邦史学史論叢』上、富山房、一九三五年)において、九世紀初葉の日本社会の現実には視線を向け、弘仁・承和度の日本紀講書の目的が当時の氏姓問題の解決に資することにあると指摘し、関晃氏が「上代に於ける日本書紀

講読の研究」(『日本古代の政治と文化』吉川弘文館一九九七年十月)において講書の精神を七世紀の大化改新の真精神に関連させ、その官学の変遷上における意義を論じ、日本紀講書の論考は広い視野で展開されてきた。また、「日本書紀私記」等の講書に関する覚書、或いは講書の終了後に開催された竟宴においての和歌の表記に注目した諸論考により、講書の第一義の目的が日本書紀の訓読にあることは、すでに実証されており、共通の認識を得る所である。

3 梅村玲美『日本紀竟宴和歌の研究——日本語史の資料として』(風間書房、二〇一〇年六月)を参照されたい。

4 講書を担当する執講の要素も考えられるが、弘仁・承和度の執講について不明な点が多い。弘仁度の執講の多人長は、大安万呂の子孫かと推測されているが、明確な根拠がない。なお承和度の執講の菅野高年は、当時散位正六位上だったとしか知られていない。それ以降の講書の執講については、大宰寮の明経道・紀伝道の関係者が執講となっていることは、橋本不美男「日本紀竟宴和歌」(『王朝和歌史の研究』所収、笠間書院、一九六二年一月)(二七頁)によりすでに指摘されている。

5 『続日本紀』における原文とその訓読は、『国史大系』・今泉忠義『訓読続日本紀』(臨川書店、一九八六年五月)に従う。

6 『本朝文粹』における原文とその訓読は、新日本古典文学大系『本朝文粹』(岩波書店、一九九二年五月)を参照。

7 『延喜式』における原文とその訓読は、『国史大系』・虎尾俊哉『延喜式』(吉川弘文館、一九六四年六月)に従う。

8 擬文章生になって初めて式部省の文章生の試に参加する資格を有するようになる。また、擬文章生より文章生になった人達の中で二名が文章得業者に選ばれ、七年以上の勉学を経てから、博士の推薦により、最高国家試験である対策を受ける。この試験で合格し秀才となり、漸く官吏に

- 登用される。『養老命』の「選叙令三十」に「秀才出身条。凡秀才出身、上上第正八位上。上中正八位下（秀才出身の条。凡そ秀才の出身、上上第を正八位上、上中を正八位下にせよ）」と記されている。
- 9 久木幸男『日本古代学校の研究』（玉川大学出版部、一九九〇年六月）三七四頁。
- 10 原文の訓読は、注1に掲載した長谷部将司氏の論考を参照した。
- 11 大春日頼雄は小内記（大内記は誤記）、滋野貞主は小内記（文章生は誤記）である。
- 12 注2 関晃氏前掲の論考。十五頁。
- 13 注1 長谷部将司氏前掲論考を参照されたい。
- 14 玉井力「二〇～二世紀の日本―摂関政治」（『岩波講座日本通史』第六巻古代5所収、岩波書店、一九九五年）二～三頁。
- 15 左大臣の源融は基経が摂政に任ぜられた貞観十八（八七六）年に上書し自宅に引き籠もった。
- 16 工藤重矩「延喜六年日本紀竟宴和歌の歌人たち」（『国語と国文学』五六・四、一九七九年四月）に「講書の性格は座の位置に端的に現れている。講書の直接の対象は大臣以下参議以上の公卿であり、弁・少納言などは、「聴衆」である。聴衆とは陪席を許された傍聴者の謂であろう。これらは講書の第一義的受講者ではあるまい。外記は博士を召したりなど、行事の雑役に預かっているが、弁・少納言・外記・史はみな太政官の下部組織である」とある。
- 17 滝川幸司「藤原基経と詩人たち」（『語文』第八十四・八十五号、二〇〇六年二月）三十五頁。
- 18 内裏及び大内裏の構造については、裏松光世『大内裏図考証』（新訂増補故実叢書）、陽明文庫所蔵の「平安京大内裏古図」（京都市編『京都の歴史―平安の新京』、学芸書院、一九七〇年）などを参照した。
- 19 仏教の行事については、『日本後紀』逸文（八二三）十二月二十四日条「請大僧都長恵、少僧都勤操、大法師空海等於清涼殿、行大通方広之法。終夜而畢也」と、『続日本後紀』承和十五年（八四八・嘉祥元年）二月十五日条「請百僧於紫宸殿及清涼殿、転読大般若經」などが挙げられる。内宴と曲宴については、『日本後紀』天長九年（八三二）正月二十一日条「皇帝於清涼殿内宴。献詩者十三人。有御製。賜禄有差」と、『続日本後紀』承和元年（八三四）八月十二日条「上曲宴清涼殿。号曰芳宜花讌。賜近習以下至近衛將監祿有差」などが挙げられる。
- 20 『日本後紀』における原文とその訓読は、黒板伸夫・森田悌編『日本後紀』（集英社、二〇〇三年十一月）に従う。
- 21 菅原道真の「勸学院、漢書竟宴。詠史得叔孫通」の題から、藤原氏族の子弟を対象とした漢書の講書が行われ、「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黄憲。」の詩序における「嚴君知斯文之直筆、謂斯文之良吏、遂引諸生、校授芸閣」から、芸閣と呼ばれている菅家廊下では、三史の講書が行われていることを看取することができる。
- 22 注18に掲載した『京都の歴史―平安の新京』。
- 23 鈴木琢郎「大臣曹司の基礎的研究」（『古代文化』五十九・一、二〇〇七年六月）五七頁。
- 24 諸星友美枝「前期摂関政治における摂政・関白の機能―関白藤原基経の政治的地位を中心に―」（『学習院大学人文科学論集』9、二〇〇〇年）「良房が摂政に任じられたことは、史料上では『日本三代実録』貞観八年（八六六）八月十九日によって初めて明らかになり、その記事は「勅太政大臣、摂行天下之政」と伝えている。だが一般的には、天安二年（八五八）の文徳天皇病死後、わずか九歳で即位した幼帝清和のもとで良房は摂政の実を行い、貞観八年勅によって正式に摂政に任じられた」と解釈されている」とある。
- 25 『続日本紀』天平宝字二年（七五八）八月二十五日条に「凶書寮、掌持

典籍、供奉内裏。故改爲内史局。(圖書寮は、典籍を掌持して内裏に供奉することを司る。故に改めて内史局と爲す)」とあるが、内裏の構造は、奈良時代から平安時代に至り、変動が生じているため、内史局が圖書寮であるとは安易に断定できない。

26注4 関晃氏前掲論考、二四〇頁。

27注4 橋本不美男前掲論考、十五頁。

28 吉川真司『律令国家の女官、日本女性生活史Ⅰ原始・古代』(東京大学出版社、一九九〇年五月)

29 飯淵康一ら「平安宮内裏承明門・日華門の儀式時における性格」(『日本建築学会計画系論文集』第五四三号、二〇〇〇年八月)二五六頁。

30注29に掲載した論考。二六〇頁に「公卿が参内したときのための公卿座が、宜陽殿と近衛陣に二種類設けてあり、改まった儀式などを行う際には宜陽殿の座に、普通の時には近衛陣の座に着いたとされる。

31注29に掲載した論考。二六〇頁。

32 当時の竟宴詠史詩については、ただ島田忠臣の一首しか確認することができない。

33 菅原道真の詩文の訓読は、川口久雄『菅家文章・後集』(岩波書店、一九五六年)を参照。

34 同前『菅家文章・後集』補注、六五九頁。

35 外記庁と侍從局と右大臣の曹司との地理的關係について、詳しくは注22鈴木琢郎「大臣曹司の基礎的研究」を参照されたい。

36注18『京都の歴史——平安の新京』「太政官と財政」二八三頁。

37『西宮記』「臨時二」における「始読日本紀事」に「二三年間の間に講じて読み竟りぬ」と記しているため、天慶度の講書であると推測することができ

る。元慶度は七年間を要し、延喜度は一年間しか要していなかったためである。

記庁の正庁からその南にある南舎へは渡廊で通じていたが、これを結政所ともいうのは、ここで政のはじまる前に関係文書を束ねて整理したことによる」とある。

39注2 関晃前掲論考と、注3 梅村玲美前掲論考を参照されたい。

40『日本紀竟宴和歌』には元慶六年の竟宴和歌が僅か藤原国経の二首しか残っていない。また、『新編国歌大観』には、元慶六年の竟宴和歌が応神天皇を題とした源多の一首「ひじかたのをぐらの山ははるけきを君もまもるにかげもはなれず」が残っている。そのため、現在その全貌を知りえない。

プラトーフ 『土台穴』 における動物と人間のあいだ

古川哲

1. はじめに

本論の議論の出発点は次のような一節にある。

熊は人間のように鎚でもって金敷のうえの赤熱した帯状の鉄を叩いていた¹。(299)

これは、ロシアの小説家アンドレイ・プラトーフ（一八九九—一九五二）による中編小説『土台穴』からの引用である。このなかの「人間のよう」という箇所は、この場面での熊と人間のあいだの類似を意味している。そして、ここで両者が似ているということの前提には、そもそも両者が異なっているという認識があると考えられる。そのうえで、引用箇所では両者に共通する何かが想像されているのだ。熊が「人間のよう」に行動するというとき、そこで暗黙に想定されているのは動物と人間という二つのカテゴリーだと考えられる。この二つのカテゴリーは通常切り離されて考えられている。つまり、動物と人間のあいだには、隔たりがある。それに対して上に引用した箇所を見ると、通常動物が行うとは予期されていない行為を熊が行っており、動物と人間との隔たりがより狭まっ

ていることがわかる。

プラトーフの作品世界を特徴づける一つの要素が、このような動物と人間との関係の近さであることは、以前から指摘されていた。たとえば、プラトーフ作品において、人間の形象が動物的な特徴とともに描き出されることを早い段階で指摘したものとしては吉原深和子の研究がある²。しかし、プラトーフ作品における動物の形象と人間の形象の関連そのものを包括的に検討しようとする試みは少なかつた。そのような研究状況のなかで、初期から後期に至る作品群を通じて検討することを試みたギュンテールの論文は注目すべきものだ³。ギュンテールは、プラトーフの作品では動物と人間が互いに置き換え可能であるかのように描き出されると指摘したうえで、そこに二種類の相反する要素を見出している。第一の要素は、動物が変化することによって人間同様の生活を営むようになるというものだ。たとえば初期の作品『たくさんの興味深いものについての話』では、動物も社会主義に参加するだろうと主人公イヴァン・コプチュクが語る。この第一の要素について、同時代のロシアの詩人ザボロツキーと、画家フィローノフとの共通性が指摘されている。それに対して第二の要素は、人間が変化することによって動物同様の生活を営むようになるというもの

である。その例として挙げられているのが一九三〇年台半ばに書かれた同時代のドイツを舞台とする『ごみの風』だ。この作品の主人公リフテンベルクはあるときから体中が毛で覆われるようになる。そして、周囲からは人間として識別されることすらなくなる。つまり、人間の社会から排除されるのである。

こうした研究を踏まえると、プラトーフの作品では、動物の形象と人間のそれとを連続性を持つものとして描かれており、それが作品の際立った特徴となつていくことがわかる。言い換えると、プラトーフの作品における動物と人間というカテゴリーのあいだには、中間的なものがあり得るような、比喩的な意味での空間が存在するといえる。そして本論文は、その空間に関する探究の試みである。

本論文では、一九三〇年に完成し、一九二〇年代末の五カ年計画開始に伴う農業集団化を都市と農村の描写を通して複眼的に描き出した中編小説である『土台穴』を扱う。その理由は第一に、動物と人間のあいだの空間というテーマがこの作品にとつてもつ際立った重要性のためである。プラトーフの作品群において、カテゴリーによつて区切られた人間社会という主題が、農業集団化に伴う富農撲滅を正面から扱った『土台穴』ほど本質的な位置を占める作品はない。そのような作品にあって、人間それ自体が相対化される場としての動物と人間のあいだの空間は他の作品にもまして、作品全体の構想に有機的に関連付けられているのである。動物と人間の関係の変化が、人間的な社会への参加あるいはそこから離脱という結果につながることは、ギュンテールが行った分析においてすでに示されているが、『土台穴』ではそのような相関が、本論文で詳述す

る馬と放浪者の挿話において劇的に示されている。

ロシア革命をプラトーフは繰り返し返し作品で取り上げた。したがって、作品の検討に移る前に、プラトーフが書いた作品について伝記的事項とともに確認することは有益だと思われる。

プラトーフが書いた最初の著作は『電化』（一九二一年刊行）だ。この小冊子で彼は、大規模な発電所と送電網の整備によるエネルギー生産と移送の効率化が革命の成就に不可欠であることを主張する。このように、プラトーフは社会評論の分野でまず頭角を現した。そして、この小冊子が出た一九二一年に鉄道技術専門学校の電気工学科を卒業した後は、ロシア南部の都市ヴォロネジやタンボフで、土壌の改良、そして灌漑事業などに従事した。この時期にプラトーフは小説を書き始めるが、この時期の代表的な作品は、物質を自在に生み出すための理論を発見した物理学者たちについてのSF小説『エーテルの道』（一九二七年完成）や、ロマノフ朝時代の運河建設とその挫折を描き出した『エピファニーの水門』（一九二七年発表）である。これらの小説には、科学的な探求や、治水工事など、作家の伝記的事項と対応する要素が含まれている。

それに対し、一九二七年にモスクワに移住し、執筆に専念し始めたあと、プラトーフはより直接的に、現実のロシア革命を扱った作品を書き、著作を世に問うていった。そうした作品には、内戦期の歴史の激動を一人の楽天的な兵士の視点から描く表題作を含む作品集『秘められた人間』（一九二八年刊行）、第一次世界大戦の勃発からロシア革命の初期にかけてのロシアを放浪する登場人物の視点から描かれた長編『チェヴェン

『グール』（一九二九年完成）などがある。しかしその成功は、これらと重なる時期に書きつがれ、発表されていった二つの作品が文壇において攻撃の対象となったために断ち切られた。その二つの作品とは、一九二〇年代末のモスクワを革命直後以来ひさしぶりに訪れた男の視点から描かれた風刺的な中編「疑惑を抱いたマカール」（一九二九年発表）、第一次五カ年計画に伴う急激な農業集団化が一段落した後の農村を旅する技師によるという形式をとった『ためになる』（一九三二年発表）である。

発表する場を失ったこの時期に、プラトノフは『土台穴』（一九三〇年完成）を書いた。一九三四年、プラトノフはソビエト作家同盟の結成大会に参加し、その一員になる。そして程なく、中央アジアにおけるソビエト政権樹立十周年を記念する作品集のために派遣されトルクメニスタンに赴いた。この旅行での取材に基づいて書かれた作品には、中央アジアの砂漠をさまよう民族に定住地を与え救済しようとする青年を主人公とする中編『ジャン』（一九三〇年完成）がある。しかし、作品を出版する上での困難が和らいだわけではなかった。『ジャン』が刊行されたのは作家の没後（一九五八年）である。例外的に、一九四〇年代前半は従軍作家として、戦争を題材にした小説を書くことよって、プラトノフは作品を発表できるようになった。一九四二年から一九四五年までの間に、単行本、作品集合わせて六冊の著作を刊行している。戦争のときの負傷、そしてまた戦時中すでに発症していた結核が原因となって、作家は一九五一年、没した。

2. プラトノフ『土台穴』における馬と放浪者の挿話

このように、ロシア革命の開始からソ連が国家として確立されていくまでの時期に主要な作品を残したプラトノフにとって革命は、自らの意思で参加する対象でもあり、同時に彼の人生を否応なしに決定していく環境でもあった。『土台穴』では、農業集団化に伴う悲惨な状況と、それに接した登場人物が抱く深い懐疑が描き出される。しかしそのとき注目すべきことは、この作品には、革命に対して一義的な否定は行っていないということだ。そこには、粘り強い吟味の姿勢が見られる。

本論文で検討する箇所を理解するためには、そこで描き出される動物を目撃する登場人物ヴォシェフの作品内での位置づけを把握しておくことが不可欠である。そのため、この作品の筋書きを確認しておくことが必要となる。

勤め先の工場から解雇されたヴォシェフは、町をあてもなくさまよっているうち、巨大な共同住宅の建築現場で働くことになった。プルシェフスキーは、工事現場で設計を担当している。技師と打ち合わせをしているのは、基礎工事を担当するチークリンだ。基礎工事の後、粗石を敷くときには、サフロノフがリーダーを務めることになっている。そうした工事が進む一方で、傷病兵のジャーチェフは、工事現場の周辺を回っては、物乞いをして食料などを人々から受け取っていた。コズロフは、ジャーチェフに暴力を振るわれて腹部に負傷し、土台穴での労働から離れてしまう。

秋が近づいて来たころチークリンは、革命以前から彼が恋していたブルジョアの女性が、廃工場でその娘のナースチャとい

るのを見つける。その女性の死をチークリンはみとつた。翌朝、チークリンと、孤児になったナースチャが労働者の住居にやってきた。ある日、土台穴の基礎工事の際に掘り出された棺桶を返せと要求するエリセイという男がプルシエフスキーのもとにやつてくる。多数の棺桶を紐でつないで、エリセイは自分たちの村に帰つていった。

傷から回復したコズロフが、労働組合地区委員長であるパーシキンの運転する車に乗つて土台穴に帰つてきた。労働から離れて年金生活者となつた彼は裕福になり、三つ揃いのスーツを着ていた。孤立している貧農を探し出すために、コズロフとサフロノフらが、エリセイたちが住んでいる村に派遣された。

プルシエフスキーはチークリンからの知らせで、サフロノフとコズロフが村で殺害されたことを知る。ヴォーシエフとチークリンが村に向かった。その村は、活動家によつてコルホーズとして組織されつつあったが、活動家は村を集団化する作業が遅れていることで苦悩していた。

活動家は急進的な集団化を決意し、富農や中農を筏で川に流した。馬に乗つて使者がやってきて活動家に、解任を告げる書類を届けた。活動家は、富農撲滅における行き過ぎを非難されたのである。チークリンは、小作人として酷使されていた熊を救い出して活動家のもとに戻つてきたとき、活動家に対する批判を知る。チークリンは活動家を殴り、活動家は動かなくなる。ナースチャは寒い屋外に長い間いたせいで発熱していた。夜があけるとナースチャは死んでいた。チークリンはナースチャのために墓を掘り始めた。

以上が『土台穴』の筋書きである。前半部分では集合住宅の建設が描かれ、後半では富農撲滅が描かれる。その二つは、一九二〇年代末から推進された五カ年計画のもとの工業化と農業集団化に対応している。

物語は、工業化の推進から落伍して放浪を始めるヴォーシエフの視点から描き出される。本節で検討する馬の挿話で、大半の途上人物が労働だけで精魂尽き果てていくなかで、動物に注目するのもこのヴォーシエフである。馬が登場するのは、コズロフとサフロノフの死亡を確認しに村に来たヴォーシエフが、チークリンとともにこの村の集団化を視察する途中のことだ。

いくらかの距離を通り過ぎて、彼らは道で立ち止まった。というのは右側から人間の働き無しで門がひとりでに開き、そこを通つて落ち着いた馬たちが出てきたからだ。(285)

この場面では、馬が道を通っているせいで人間たちが立ち止まらざるをえなくなっている。このことは、それ自体としてはごく普通の出来事に過ぎない。しかし、この部分の描写にはどこか非凡な点がある。この場面ではまず、門が開く。原文ではこのとき、開く動作を意味する動詞 *открылся* が「人間の働き無しで」を意味する副詞句 *без труда человека* によつて修飾されている。この修飾語は、門が開くという現象に通常伴っている動作主としての人間が不在であることを、強く印象づけている。言い換えればここには、門を開けるのは人間であるべきだという常識が裏切られたことへの驚きが刻み込まれてい

るのだ。しかしそれは誰の感情だろうか。もつとも妥当なのは、この驚きを、この光景を目撃している「彼ら」、つまりヴォーシェフとチークリンらのものだと考えることだろう（そしてこの推測は、ヴォーシェフに関してはこの場面の終りで裏付けられることになる）。同じ文の後半で、門を開けたのが馬だということとがわかる。その結果として、ひとりで門が開いたということの不可解さは解消される。しかしそのことによつて一層、そこに人間が関わっていないかつたということへの驚きは、確固たるものとなつている。

この場面で現れたばかりの馬について、すではつきりと指摘できることがある。それは、馬たちが道路上をゆく人間たちに対して、眺められる対象にとどまつてはいないということだ。というのも、まず、この馬たちは、人間たちの歩行を遮っているからだ。しかしそれだけではこの場面で進行している事態を説明するのに充分ではない。上の一節にある「落ち着いた」という形容詞がすでに示唆しているのだが、次の一節において、馬たちのこの行動が決して無自覚な行動の結果ではないことがわかる。

一定の足取りで、大地で育ちつつある食物に対して頭を下ろすことなく、馬たちは密集した大群となつて道を通り過ぎて、水が保たれていた窪地へと降りていった。規定の分量を心ゆくまで飲むと、馬たちは水の中に入りそこで自分の清潔さのため、いくらかの時間佇んだ。その後で乾いた岸へと抜け出して、もと来た方へと動き出したが、隊列とお互いの密接さを失うことはなかった。(285—286)

いま引用された一節において、馬たちは道を使用するために出てきたのだということがわかる。そして馬たちは人間のための運搬手段ではなく、道を使う自分たちの目的を持つている。だから道路の通行者としては、彼らは人間と対等な存在として現れる。ヴォーシェフたちは、やむを得ず馬たちのために立ち止まり、そして動きが制約されている状態で、馬たちが目的を持つて動いていることを知ってしまう。そして、そのまま彼らの動きを目で追い続けることにより、この場面での人間たちは、馬たちを対象として認識するのではなく彼らの意思をも事後的に承認させられている。つまりこの突然の状況の中で人間たちは、馬たちを自らの意思を持つ存在、つまり主体としても扱うことをも強いられているのだ。そして馬たちの側でも、人間に認識されるだけの対象にとどまつていることはできず、人間たちの歩行を止めることによつて彼らの生活に、一瞬とはいえ、関与している。というのも双方が、意思を持ちそれを互いに認め合った上で、行動しているからだ。ここには、人間と馬との行動における相互性がある。しかもこうした状況が、人間の意に反して起り特定の関係性を迫るものとして、ここでは描かれている。さらに、ここでは双方について心理的な記述がほとんどなく、人間と馬が門の前という路上の一つの場所をめぐつて繰り広げる身体的な運動として記述されている。それゆえにこそ、歩いてきた人間の思惟の外にありそれに先立つて存在するものとして、この場面で門を開けた馬の意思が示されることが可能になったのである。さらに、そのように馬の意思が示されているからこそ、考え行動する、人間以外の主体として馬が描かれることができ、この主体と人間との、相互的な関

係が描かれることができたのである。

そのような人間と動物の関係を踏まえた上で、上記の引用箇所ですらに注目すべき点がある。それは、馬たちの行動が、極めて統制のとれたものであることだ。農村におけるこの場面は、活動家が集団化を推進しようとしながらも思うように進まず苦悩している時期にあたる。そしてこの作品の中で人間の社会は、拡張され続ける建設計画と拙速な農業集団化のせいである。拡大されるべき間に共産主義的なのである。馬たちは水を飲み沐浴をする間、一切分派的な行動を取らない。そして集団全体としてみた場合の行動も全て目的にかなった合理的なものである。そうした合理性が、上記の引用箇所ですら「規定の分量」と訳出されている *Норма* (ノルマ) という語に集約されている。というのも、この語は、計画経済下の経済活動における生産や消費について予め決められた量を指すのに用いられる語だからだ。そのように、人間の社会で使われる語が馬の行動を記述するために使われることよって、混乱する人間たちと落ち着いた馬たちの行動の対比が仄めかされている。だから、飲み水について馬自身が決めた「規定の分量」という言い回しには、理性的な行動において馬に劣る人間という強烈な風刺が込められていると解釈することが可能である。

しかし最初の家のそばで馬たちは方々に散った。藁葺き屋根のそばに立ち止まって藁をそこから引き抜くものもいたし、貧弱な干し草が残っていたのをかがみ込んで束でくわえるものもい

た。そしてもつと不機嫌な馬たちは地主の屋敷に入りその知っている場所からまとめて取って口にくわえて道に運び出した。(286)

馬たちは緊密な隊列を崩すが、各自が目的にかなった行動を取っているために、馬たちの統制のとれたありさまはさらに鮮烈なものとなっていく。

注目すべきなのは、馬たちの食料を得るための行動が自律的で統制のとれたものであるだけでなく、馬たちはそれを人家から調達していることである。そして、彼らが野生の植物ではなく人間によって家畜のために加工された餌としての干草にあくまでもこだわることからわかるのは、この馬たちは人間にとって手付かずの自然に属して生きてきたのではなく、人間によって利用しやすいように整えられ利用されていた自然に属して育ってきたのだということだ。つまり彼らは、人間の世話を受け、人間が用意した餌を食べて育てられてきたことがここから読み取れる。そしてそのことは、この馬たちの場面のすぐ後に続く、やや貧しい農家の夫婦についての記述から裏付けることができる。その家の主人は、家畜の馬を失い、ふさぎ込み、自分の身体が浮くという妄想にとらわれている。そして妻は夫について「馬が組織に取られてから、あの人は寝込んで何もなくなっちゃったのよ(287)」と語っている。この箇所ですら馬の言っている馬が行ってしまった先の「組織」として当てはまるものは、いま検討中の、馬の集団行動の箇所しかない。したがって、集団行動する馬のうち一頭は、その農家から逃げ出したものだ⁴と推測できるのだ。

したがって馬たちについて、統制のとれた行動をとることで共産主義を実現していると指摘するだけでは不十分である。馬たちは、人間からの支配を過去に経験し、そこから解放されている故に、彼らの行動は革命的なのだ。そのことを踏まえれば、「不機嫌な馬たちは地主の屋敷に入りその知っている場所からまとめて取って口にくわえて道に運び出した」という一節に込められた階級闘争的な意味合いがより鮮明になるだろう。この一部の馬たちにとつて、「地主の屋敷」のなかの一面が「知っている場所」であるのは、彼らが以前そこにいたからに他ならず、彼らが以前そこにいたことは彼らがそこで家畜であつたからに他ならない。そして馬たちの「不機嫌」さがこの屋敷で食料を調達することへとつながるのは、そうすることによって馬たちが自分がかつて支配下においていた人間たちに対して、報復ができるからに他ならない。

次の一節では馬たちは再び集合する。

どの動物も力相応の分だけの食物をとり、先程その馬たち全員が出てきた門の方向へと、大切に運んでいた。

先に来た馬たちは共同の門のそばで立ち止まり残りの全ての馬の大群を待っていた。そして全員が一緒に集まると、前方の馬が頭で門を押して開け放して馬の隊列全体は餌を持って敷地内へと去った。敷地のなかで馬は口を開け、食物はそこから落ちて真ん中一つの堆積へとつみあがった。そしてそのとき集団化された家畜は周りに立ちゆつくりと食べ始めた。組織的に、人間の世話になることなく鎮まっていた。(286)

餌を集めるために別れたあと各自が戻ってくる時間がずれてしまうものの、馬たちは集団の中での各自の任務を忘れることがない。馬たちはお互いの行動に常に気を配って行動し、待ち合わせた上で隊列を必要に応じて組むことができる。つまり馬たちは「人間の世話になることなく」行動するための助け合いという、集団行動の利点を理解したうえで行動しているのである。

そしてこの場面では、能力に応じて働き必要に応じて取る、という共産主義の理想がほぼ実現しているとみていいだろう。食料を集めるといふ労働について「どの動物も力相応の分だけの食物をとり」と言及されているが、その後の食事については「規定量」についての言及は明示的にはなされていないからである。このように解釈すればこそ、次の一節にあるヴォーシェフの感情を理解しやすくなる。

ヴォーシェフは驚愕して門の隙間から動物たちを眺めていた。彼を驚かせたのは、もぐもぐやっている家畜たちの精神的な平穏である。あたかも全ての馬が、コルホーズ的な生活の意味に正確に確信を持っているかのようだった。そして彼だけが馬よりも悪く生きて苦しんでいる。(286)

この引用箇所ですでに分かるのは、ヴォーシェフが、もとの場所に帰り、食事する馬たちを閉ざされた門から覗き込むという積極的な行動に打って出るほどに、馬たちの行動に衝撃を受けていることである。そして、ヴォーシェフが、馬に進路を遮られることで行動を束縛されたあと、馬が目の前を通り過ぎて

からも彼らの行動を追っていたこともわかる。というのも、門の内側で食事をする馬たちの光景は、馬たちがそれを自分たちで集めてきたことを知らないかぎり、いかなる驚愕も与えることは期待できないからだ。従つて、いま引用された箇所から遡ることで、門が開いてからここまで馬に関する記述はすべてヴォーシェフの視点からのものだったことが明らかになる。だから、ここでの彼の驚きは、馬たちが門を開けて外出してから帰宅して食事をするまでの馬の、一連の行動を踏まえたものなのだ。そして、そうやって馬たちを見守つた結果としてヴォーシェフが、自分よりも馬のほうがコルホーズの意義をよく理解し実践していると考えているということは、彼が馬たちの生活に共産主義を見出しているということである。だから、ヴォーシェフの視点から主体的な馬たちによる共産主義がここで描かれている、と結論づけることが可能である。そしてまた、馬の形象を使つた同時代史への風刺も、馬の食事を目撃しつつヴォーシェフが持つ感想を通して痛烈に行われているのだ。

このように、馬たちの整つた集団行動には、この作品が描き出している一九二〇年代末のソ連で起こつていた、新経済政策（市場経済の導入）から第一期五カ年計画（計画経済の復活）への移行という社会的な変動への風刺がまずある。しかし同様に重要なことは、この場面での、作品に登場する動物と人間との関係である。動物界は、たとえば馬たちのように、人間が行おうとする革命を現実にも実践するようなものとして登場するのである。それは、ここまで検討してきた馬たちのように、登場人物の目の前に現れ身体的な運動に制約すら与えるものとして描かれるのである。そして急いで付け加えておかねばなら

ないのは、このような動物と人間との関係の変化を表す出来事に接するのは複数の登場人物だが、その出来事に強く触発されるのは放浪者の性格を強く持つヴォーシェフだけだということだ。そのことの裏付けとなるのは、門が開く様子を目撃し馬に歩行を遮られたのはヴォーシェフとチークリンの二人なのに、食事する馬をのぞき込んでいたのはヴォーシェフ一人ではないということである。

『土台穴』において、馬たちが共産主義を実現しているという論点を踏まえると、最初に議論された、馬たちと人間との相互的な関係という論点をより精密に分析することができる。その際重要なのは、人間界に介入してくる動物が、干草を好み、隊列を組むことに慣れているなど、すでに人間による支配の痕跡を有しているという点である。

『土台穴』では、動物と人間とは相互に影響を与え合うような相互的な関係のなかにある。しかしそのような相互的な関係に入ってくる動物は、すでに検証されたように野生の動物ではなく、人間の支配を経験しそれを脱した動物なのだ。そしてまた、この場合に、道を遮られることで馬と相互的な関係にあることを認識することができたのは工場を解雇されて放浪者となったヴォーシェフだが、馬をもと所有していた農夫は馬に棄てられたという事態を冷静に受け止めることができていないことを忘れてはならない。

だから、ヴォーシェフと馬たちの関係について、単に人間と動物の関係をいうだけでは不正確である。ここでの、人間と動物との相互的な関係は、家畜だった経験のある馬たちと、賃労働から排除されたプロレタリアのヴォーシェフとの相互的な

関係なのである。それは、前者は農家との、そして後者は雇
 者との非対称的な関係を経て、両者が出会っているということ
 を意味する。従って、馬たちとヴォーシェフの関係は、第一に
 動物と人間の関係という側面を持ち、第二に社会的に抑圧され
 たもの同士の関係という側面を持っているといえる。そして両
 者の関係において、自然界の要素としての馬たちに対して鋭敏
 に反応するのがヴォーシェフだったという点については第一
 の側面が重要である。しかし、馬たちに対して彼が感情移入し
 彼らの感情を推し量ることができているという点については、
 第二の側面が決定的な役割を果たしているといわねばならな
 い⁵。

3. 『土台穴』における動物と人間のあいだの空間の持つ意義

以上の分析を、動物と人間のあいだの空間という論点からま
 とめなおしてみよう。ギュンテールの議論では、動物と人間の
 関係の変化の二要素は相補的に現れていた。つまり、一つの場
 合につきいずれか一方が現れるものとしてあった。ところが、
 いま検討した馬の挿話では、二つの要素が同時に現れている
 ことになる。この作品における馬と放浪者の挿話では、双方が
 ともに、動物と人間のあいだの曖昧な存在として出会うのであ
 る。そして、『土台穴』の馬と放浪者の挿話における、動物と
 人間のあいだの空間は、前者が人間の社会性へと限りなく近づ
 き後者が社会からやや遊離していることよって流動化して
 いるといえる⁶。そのなかで、共産主義の理念は双方を結びつ

けるものとして確固たるものであり続けている。

『土台穴』では、一方では、人間の集団のなかに富農（およ
 び中農）とその他というカテゴリーによって隔たりが生まれる。
 それは前者に対して死をもたらすという意味で生死を分かっ
 たものである。一方では冒頭で言及した熊の形象や、ここまで検
 討してきた馬の形象でもって人間と動物のあいだの隔たりが
 埋められている。このことは、とりわけこの作品が描き出して
 いる富農撲滅との関連において鋭い批評性を帯びている。動物
 と人間の境界が、馬とヴォーシェフの挿話によって揺らぐこと
 によって、人間のあいだでの境界の設定とそれに伴う死の不条
 理さがこの作品で際立っているからだ。このように、プラト
 ノフ『土台穴』における動物と人間のあいだの空間とは、共産
 主義の理念を擁護しつつ、その理念にそって現実を批判的に吟
 味することを可能にするような場なのである。

注

1 作品からの引用は Платонов А. П. Счастливая Москва : Повесть, Рассказы ; Липрика. М., 1999. に依った。引用の際、原文のページ数を括弧内に示した。

2 吉原深和子「プラトノフの作品における身体の変化の問題」、『ロシア文化研究』第1号（一九九四年）、八一—九六頁。

3 Гонтар, Ханс. «Смещение живых существ»: человек и животное у А. Платонова // Новое литературное обозрение. 2011. №111. С. 91-105.

4 ローゼンホルムは、ロシアにおいて馬は男性性と強い結びつきを持つものと位置づけ、以下の論文でソ連期の文学作品をその論点から検証している (Arja Rosenholm, "Of Men and Horses : Animal Imagery and the Construction of Russian Masculinities" in Jane Costlow and Amy Nelson, eds, *Other Animals : Beyond the Human in Russian Culture and History* (Pittsburg: University of Pittsburg Press, 2010), pp. 178-194.)。『土台穴』の、馬を失って韌気がなくなり妻に失望される男の挿話は、ローゼンホルムの議論をよく裏付けるものである。

5 このような、プラトノフの作品において二つ以上の文脈が同時に意味を生み出すことを、ゾロトノフは「重ね合わせ *наложение*」と呼び、『チエヴエンゴール』と『土台穴』につづいてそのことを跡付けている (Золотоносов, Михаил. «Ложное Солнце»: «Чевенгур» и «Котлован» в контексте советской культуры 1920-х годов // Н.В. Корниенко и Е.Д. Шубиной (сост.) Андрей Платонов : Мир творчества. М., 1994. С. 246-283.)。

6 環境に埋没するものとしての動物と、環境の中にあつてそれを意味づけ世界として把握しようとするものとしての人間という対比について、シヨルジョ・アガンベン (岡田温司・多賀健太郎訳) 『開かれ——人間と動物』 (平凡社ライブラリー、二〇一一年) では詳述されている。本書での人間の動物性についての議論は『土台穴』で描きだされた人間たちのもつ受動性に対して示唆するところが大きい。

物語と劇の間で——『源氏物語』を舞台化して

柴田勝二

『源氏物語』の舞台化や映画化・ドラマ化がこれまでも多くなされてきていることはいうまでもありません。今回の「語りと劇による『源氏物語』」制作に当たっては私のいくつかの参照したにすぎませんが、一つのねらいは、物語の主な展開、内容をナレーションに託し、原作の感触を原文の語りによつて示す一方で、劇の部分ではいわばその間隙を埋める形で、そうした流れのなかにありえたであろう生活者としての光源氏の像を描き出すということでした。

こうしたスタイルを取るようになった背景にはいくつかの文脈があります。もともとこの企画は、昨年度まで三年間運営されていた「教養日本力GP」において、「多言語の語りと劇による『源氏物語』」として発案されたもので、当初は字幕を使いつつ十数カ国語でナレーションを分担し、そこに原文の語りと現代語の劇を絡めていくというものでした。ところが募集してみると、現代語の劇に対しては多くの応募者があったものの、多言語によるナレーションには四カ国語ほどしか応募がなく、方針を変更して、ナレーションを現代日本語で起こない、その代わりに当初はわずかであった原文による語りの比重を増やした形に脚本を改めました。そのためナレーションが物語の主な展開を提示していくという、当初の形が残存することに

なりました。

もう一つの理由は、『源氏物語』の内容そのものを劇として表すという試みはすでに多くなされているために、その屋上屋を架すことを避けたということでもあります。ギリシヤ悲劇がそうであるように、劇という形式自体が物語や神話を通過してからもたらされるものですが、我が国の夢幻能も『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』といった物語を必ず本説すなわち典拠にもつています。そして世阿弥の『井筒』が『伊勢物語』第二十一段を踏まえながら、内容を大胆に付加し、昔男の衣裳を着けた井筒の女が、井戸を覗き込んで、水面に映った姿を昔男だと思ふ場面を描いているように、物語から逸脱する部分が大きいほど劇独自の面白みが生まれるものです。ちなみに好みの問題ではありますが、夢幻能については、『平家物語』などを本説とする修羅物の能は、物語からの離脱の度合いが少ないうために、能独自の興趣は『井筒』などと比べるとやや乏しいようにも思われます。

こうした方向で脚本を制作したために、劇の部分の多くは原作には存在しない架空の場面であり、作中の人間関係の力学を反映する形で科白のやりとりをおこなわせ、そのなかに個々の登場人物の内面が立ち現れてくるように仕組みました。たとえ

ば主な登場人物が最初に現れる第一場の場面では、帝の子として生まれながら、第二王子であり、また高麗の相人の不吉な予言もあつて、臣籍に降下させられ、帝となりえぬ宿命を与えられた青年として（現実には「少年」の年齢ですが）光源氏を位置づけ、その内面の屈折を語らせています。光源氏の色好みは、王朝貴族の通例であるとともに、彼の美しさが様々な女性たちを引き寄せるようにも見えますが、この劇ではその源氏の女性遍歴を、帝になりえない青年貴族が、その鬱屈の捌け口を求めておこなう行動として位置づけています。いいかえれば、自己の社会的位置への不満を女性の征服によって補填する過程として源氏の女性遍歴を捉えようとしています。

これまでの映画やドラマでは、光源氏は美男の上級貴族だから女にもてるのは当然といった描かれ方がされることが少なくかつたようです。たとえば私が参照した映画の一つである武智鉄二の『源氏物語』（一九六六）では、物語は源氏が准太政天皇という高位に昇るところから始まっており、彼がこれまで経験してきた様々な女性遍歴は、「民の心」を知るために必要なものであつたという捉え方がされています。すなわち、いずれ天皇に近い高位に就くとしても、夕顔のような市井の女性を含む女性たちとの交わりによつて「民の心」を知り、それによつて民衆の側に立った為政者となることが肝要であるという主張が込められています。ここには左翼的芸術家であつた武智の立場が現れており、源氏が明石流謫の際に関係をもつ明石の君も、洗練されない田舎の姫ではあるけれども「強い血」の持ち主であり、こうした異質な血が注入されること、宮廷の閉鎖的な世界を活性化するという捉え方がされています。しかし逆

に見れば、この作品では源氏は結局支配者たることに定められた人間であり、その心をより和らげ、民衆の側に引き寄せる契機として女性との交わりがあつたということになります。すると源氏の女性関係はいわば、その生涯の味付けないし彩りのなものであることになり、彼の存在を支える条件としての性格は希薄になることになつたようです。

一方比較的近年に作られた、堀川とんこう監督、天海祐希主演の映画『ひかる源氏物語 千年の恋』（二〇〇一）はあまり評判が良くありませんでしたが、この作品の特色である、吉永小百合演じる紫式部を場面のなかに出すという趣向の是非はともかくとして、ここでは源氏はひたすら女性を追い求めるドムファンであり、その無軌道さによつて須磨に流されることになり、正妻格の紫の上にも愛想をつかさかれ出家を申し出られるものの、彼女を「理想の妻」であるという理由でそれを許さないうという人間として描かれています。この作品における源氏はとめどもない漁色家であり、それを女性である天海祐希が演じるといふのも見ていてつらいものがありました。

こうした源氏の描き方にやや物足りないものを感じてきたために、源氏を明と暗の二面を兼ね備え、その交錯のなかで女性との交わりに自己の在り処を見出していく人間として、劇中の世界に生きてもらおうとしました。こうした明暗の二面性は、とくに恣意的な解釈というわけではなく、作者紫式部が本来物語のなかに描き込んだものでもあります。またそれは古今東西の劇の主人公たちに遍在する特質でもあり、英明な王であるとともに、汚れた犯罪者であるオイディプスや、社会秩序のなかでは支配者でありながら、自然界の位階においては一人の

無力な老人に還元されてしまうリアがその典型であることはいうまでもありません。日本の古典劇においては、こうした明暗の両極性はあまり見出されませんが、先に言及した夢幻能のシテは死者でありながら、現世への執着を抱えることによつて成仏しきらず、この世に仮の姿で登場する人びとであり、彼らの内には生と死が共在し、せめぎ合っています。また近松門左衛門の描いた心中物の世話浄瑠璃では、大阪の町人である主人公のなかでは義理のしがらみのなかで生きること、他者を立てようとする心性と、自己の誇りや面子を失うまいとする意地がせめぎ合っており、それらを止揚する地点で多く遊女との間におこなわれる心中という行為が現れるのでした。

劇が劇的になるのは、こうした主人公の内面のせめぎ合いが外在化された時であり、野上豊一郎が前提したような対人間の思想的な対立は、それを強める要素とはなるにしても、決して劇の本質的な条件ではありません。反面プラトンが多く残した『国家』のような対話篇では、価値観を異にする人々が美や善や真理をめぐつて議論を繰り広げますが、こうした議論の担い手を登場人物とする劇を仕立てたとしても、それがそのまま「劇的」になるかどうか疑わしいと思われまます。現にそうした試みがなされたという例は寡聞にして存じません。逆に劇は現実一人の演者によつても十分成立するのであり、ジャン・コクトーの『声』や井上ひさしの『化粧』など、一人芝居の例が少なくないのは、そのことを端的に物語っています。もし対人間の葛藤が劇の本質であるなら、一人芝居というものは本来成立しないはずであり、少なくとも劇的な世界にはなり難いはずですが、これらの作品はいずれも優れた戯曲であり、高度に劇

的な世界を構築しています。

そして劇が一見対話による対人間の葛藤を基本としているように見えて、単一の演者だけでも成り立ちうるのは、結局劇の生命が、観客を前にした演技者の身体的なパフォーマンスにあるからにほかなりません。演技者は日常生活の行動とは異質な、力とダイナミズムを帯びた身体を観客の前に提示し、それによつて観客を引きつけようとはしますが、そのためとりわけ中心的な存在である主人公には、それを導き出す前提としての感情的な負荷が込められている必要があります。劇の主人公が内側に対照的なものを抱え、その狭間できしみを覚えて生きていくのはそのためであり、逆にいえばそうした内的な葛藤を抱え、そこからもたらされる強い感情を負荷された人間が一人いれば、劇は成り立つこととなります。夢幻能や様々な一人芝居の存在は、それを端的に物語っているといえるでしょう。

世阿弥の完成させた複式夢幻能を、對他者的な対立がないために劇ではないと批判したのは、英文学者で漱石の弟子であった野上豊一郎でしたが、野上はシテ一人の表現に収斂される夢幻能に愛着を覚えながらも、西洋悲劇を基準とする彼の演劇観のなかではそれは肯定的に位置づけられず、反面人物観の対立のある小次郎信光らによる後世の能を、形式的には劇的であるとしながらもそこに能独特の味わいを見出せないという矛盾をきたすことになりました。この矛盾は野上の劇的なるものに対する観念が一面的であることから生じており、むしろ劇が劇的であるのは、主人公の内面に異種の対照的なベクトルがはさまれており、それがせめぎ合っているところにあるといえます。西洋悲劇の代表とされる『オイディプス王』にしても、確

かにオイディプスはテーバイの都を汚している者の探索をとどめようとする予言者テイレスアスと対立しますが、それは決してこの劇における本質的な対立ではなく、もつとも本質的な葛藤はやはり、自分の内には生まれ、次第に姿を現してくるもう一人の未知の自分との間にあるとすべきでしょう。

ちなみに西洋演劇との比較でいえば、興味深いことに『源氏物語』はその代表的なくつかと重なりをもっています。たとえば『ハムレット』は主人公が王子である点で『源氏物語』の前半部分と近似しているだけでなく、彼も王子でありながら、父ハムレット王の死後、王位に就くわけではなく、王となつたのは父の暗殺者とも噂される叔父のクローディアスでした。しかもクローディアスは父の妃ガートルードを妻にしていることもあつて、ハムレットを不快にしています。光源氏と違つてハムレットは女性遍歴を重ねることはなく、むしろクローディアスの妃となつた母ガートルードへの嫌悪もあつて、女性に距離を取ろうとしており、恋人オフィーリアにも尼寺へ行けなどと言つたりします。彼の心を捉えているのはもつぱら、父の命を奪つた可能性の高いクローディアスへの憎悪であり、彼を追いつめることがハムレットの目指すものとなります。巧妙なのはハムレットの内的な葛藤がそこから始まつているように仕組まれていることで、ハムレットがクローディアスへの復讐を決意するのは、自分自身の意志からというよりも、父ハムレット王の亡霊に示唆されることによつてでした。そのためクローディアスを追及することはハムレットの自己実現になるといふよりも、むしろ父王の遺恨を晴らすことになり、ハムレットは代理の行動の遂行者にしかならなくなつてしまいます。ハム

レットはこの矛盾に気づいており、そこから彼のとめどもない逡巡が深まつていきます。自己が取るべき行動に対して積極的になろうとすればするほど、その主体性を奪われていくように感じるジレンマが、ハムレットを行動への没入から遠ざけていくといえるでしょう。

もう一つの例を挙げれば、ラシーヌの『フェードル』は王妃と王子の関係を中心にもつという点でやはり『源氏物語』の前半部分の設定と近似しています。もつとも『フェードル』における愛欲のベクトルは『源氏物語』と逆であり、王テゼの妃であるフェードルが、王子であり義理の息子であるイポリットへの恋情に苦しむのでした。一方イポリット自身はアリシエという女性を愛しており、イポリット自身には内的な葛藤は希薄です。フェードルを軸に考えれば、彼女が捉えられるイポリットへの恋情はほとんど条理を欠いたものであり、それゆえ逃れがたい宿命として彼女に付与されています。このフェードルの情念と比べれば、方向は逆でありながら、源氏の藤壺への恋情にはより合理的な意味づけが施されています。つまり藤壺は源氏の亡き母である桐壺の更衣に似ていたのであり、源氏は藤壺を通して母を追想しつつ、次第に藤壺自身への思いをつのらせていきます。しかもその前提としてある、元服して迎えた正妻葵の上への愛情を深めることができないう状況の裏返しとしても藤壺への思慕を深めていくのでした。

その点では『フェードル』よりも『源氏物語』の方が合理的な世界であり、『フェードル』の背後にある、情念そのものを一つの宿命とし、それに対する人間の無力を想定するジャンセニスム的な観念は『源氏物語』にはありません。光源氏にとつ

て女性への執着は、彼の抱えた宿業であるといえる面もありますが、それは彼の置かれた宮廷内の王権をめぐる人間関係や自身の夫婦関係によつて合理的な位置づけがなされており、決して条理を越えた情念そのものの運動性に源氏が突き動かされているわけではありません。源氏のなかではつねに自己の宮廷内での政治的な立ち位置との拮抗のなかで女性との関係が見定められており、逆にいえば源氏の女性関係が反映される形で彼の政治的な位置取りが決められていくことにもなります。藤壺との交わりは、帝である父の妃への侵犯ですが、それは帝になれない宿命を与えられた王子による間接的な復讐でもあり、オイディプス的な王殺しの影を見ることもできます。また政敵である右大臣の姫臈月夜との関係は、宮廷での勢力争いにおける大胆な挑戦となり、右大臣を激昂させて須磨流謫の原因となつてしまいます。北山で見出した若紫、つまり後の紫の上を最愛の人とすることは、彼女がそうした勢力争いに距離を置いた存在であるだけに、政略結婚で結ばれた相手である葵の上との関係を裏返すように、源氏が純粹な愛情を注ぐ対象となりません。しかしそのために紫の上は正式な婚儀をあげていない愛人的な存在にとどまり、また子供をもうけることができないために、宮廷内の勢力圏のなかに位置を占めることができません。その点で源氏と紫の上の関係は、かつての桐壺帝と桐壺更衣とのそれと似た側面があり、男女の愛情がそれとして純化されればされるほど、その関係が宮廷の政治的な構図から疎外されていくという、『源氏物語』の原理を示しています。

もつともこうした男女関係と王権をめぐる政治的な人間関係から『源氏物語』を捉える見方は、近年の研究の主流でもあ

ります。三田村雅子氏は「源氏物語の主人公光源氏は宮廷社会から疎外された更衣の生んだ皇子であり、その劣性を天与の資質によつて撥ね返すという物語であった」と見なし、高木和子氏も「大変優れた才能と美貌の皇子である光源氏が、母の身分が低かつたために皇太子にはなれず臣下に下つた果てに、いかにして天皇の座に限りなく近づいていくか、という物語」として捉えています。高木氏は女性との交わりを重ねつつ勢力を獲得していき、貴族社会の階梯を昇つていく源氏を漫画の『島耕作』になぞらえてもいますが、この劇に盛り込んだ私自身の源氏に対する把握はこうした見方とはやや異なっています。もちろん『源氏物語』の研究者でもない私が、専門家に楯つこうというわけではありませんが、常識的にいって、美貌であり、多様な女性関係をもつ貴族が、それによつて出世を遂げていくというのは考えがたいことと思われまます。先に見たように、源氏の女性関係は臈月夜との関係が須磨流謫の要因をなしているように、彼を政治的に逆境に追い込むことになるのであり、また紫の上を正式の婚儀を挙げずに妻とすることも、源氏を政治的に利するとは考えにくいでしょう。

むしろ臈月夜との関係のあたりでは、やや傲慢になつていたきらいのある源氏は、須磨で頭を冷やし、明石で新しい生活の局面を迎えることで、成長を遂げるのだといえるでしょう。この須磨・明石への流謫は、折口信夫がいうところの貴種流離に当たるものですが、折口によれば貴種とは幼い神であり、その幼い神が流離の地での試練を経て、神として成長を遂げて本来の地へ帰還することがその要点でありました。つまり源氏の類い稀な美しさや、それを生かした女性関係の多彩さは、そ

れ自体は彼の出生にまつわる劣位を解消する条件となるよりも、それが派生させる出来事や事態との遭遇が源氏を鍛え、成長させていき、その結果貴族社会の階梯を昇りつめていくのだといえるのではないだろうか。

この劇ではこうした因果性に力点を置いて、源氏を中心とする展開をつくつていきました。その際浮かび上がってくるようになったのが、葵の上の兄、つまり源氏の義兄にあたる頭中将の存在で、この劇では本来の性格とはやや違った輪郭を彼に与えています。原作の頭中将は源氏とは色事の世界におけるライバルであり、源氏が通つた夕顔とも関係を持ち、一時源氏の養女となる玉鬘をもうけることになりませんが、この劇では源氏の輪郭とかぶらないように、むしろ源氏の暴走をいさめる堅物的なイメージで登場してもらっています。ここでは頭中将はもっぱら常識的な見地から、源氏の女性関係の過剰さを指摘し、その過剰さによつて彼が政治的に困難な位置に自己を置くことになつている構図を明るみに出させる役どころです。一方この社会の秩序の頂点に位置する桐壺帝は、劇の科白にあるように、妃をかすめ取られる「寝取られ男」の役どころとなりますが、反面藤壺と源氏の間でできた子をそれと知りながら自分の子として引き受けることによつて、源氏への溺愛と、宮中での人間関係のきしみを受容するしたたかさを表現してもらっています。つまりこの劇では、源氏を皇太子（東宮）にしなかつたことの代補として、藤壺との関係とその結果を黙認したという力学があることになりませんが、こうした形で源氏における色好みと政治の響き合いを表現しようとしたのです。

冒頭に述べたように、この劇を構成しているのは、主にこう

した政治と色恋の絡み合いのなかで、源氏の内面の緊張が高まつた場面であり、『源氏物語』の内容自体を空間化している場面は多くありません。ただ定番ともいえるべき、源氏が藤壺を犯す場面、及び葵の上に六条御息所の生霊がよりつく場面は、『源氏物語』らしさを確保するために盛り込んでいます。そして展開としては、帝になれぬ王子という負い目を、女性関係における征服欲によつて補填的に解消していった源氏が、その報いを受けるかのように須磨流謫を余儀なくされ、そこでの試練を経て人間的に成長して、都に帰還した後出世の階梯を昇つていくものの、老いによつてかつての女性への神通力も失つていき、さらに紫の上も失うことで、淋しい老境へと追いやられていくという形を取っています。休憩後に見ていただいた第四場は、いわば源氏が「凡人」化していく段階であり、若い頃であれば容易に自分のものにしたであろうような玉鬘のような小娘にも逃げられてしまい、どこまでも自分に従順であると思つていた紫の上にも出家を願ひ出られてしまいます。もつとも原作でも大まかにはそのような展開になつていますが、劇では幼少期から彼がまといつづけた超越性のオーラが剥ぎ取られ、一人の孤独な男の姿が現れるように心がけました。

それに合わせて源氏の良き友人でありライバルであった内大臣かつての頭中将も、自分の落とし胤ということで引き取つた近江の君のような無教養な娘にまでからかわれてしまい、やはり一人の中年男の姿に還元されてしまいます。原作では近江の君が内大臣の暇つぶしの相手にされて、その涙ぐましい努力が空振りしてしまうのですが、劇ではむしろ内大臣を凡人に見えさせる、ちよつと過激な無教養さを振りまく町娘という役

どころにしています。ちなみにこの場面は大和和紀氏の『あさきゆめみし』を下敷きにさせていたことを申し添えておきます。近江の君はとても面白い役柄なのに、これまでの『源氏物語』のドラマ化では姿を現していないのを不思議に思っていました。彼女を出すことで劇にアクセントをつくってみようと考えました。近江の君は『源氏物語』ではかなり異質な、外部的な存在ですが、この時代であつても一般的にみれば彼女のような人間の方が多数派であつたはずで、『源氏物語』の世界がやはりきわめて特殊な、限定された世界であることを示唆してくれています。

反面、原作からカットした人物たちが数多くあることはいうまでもありません。夕顔や空蝉はナレーションの言及にとどまり、末摘花は花散里は姿を現しません。また六条御息所も、紫の上の憑依の場面でシルエツト的に出していますが、当人は劇中人物としては現れません。こうした役柄をカットしたことはやはり、『源氏物語』の世界を狭くすることになりますが、これはこれまで述べてきたような方向を取ることによつてもたらされた選別です。ただいずれにしてもこの長大な物語を二時間余りの劇として空間化するには、何らかの選別をほどこし、切り捨てる場面や人物を決めるというよりも、取り上げるべき場面や人物を選び出す必要があります。とくにこの劇では、原作に存在しない虚構の場面を中心として劇を構築していますので、少なくとも劇の表層からは捨象されたものの比重が大きくなつたということは否定しえないところです。ただ『源氏物語』の内容そのものを伝える劇や映画、ドラマはこれまで数多く作られており、我々がそれらに追従しても屋上屋的なものになつてしまつたであらうことは、冒頭に述べた通りです。

ところで今回の劇を公演するに当たっては、学生、院生、研究生に一般参加の方を加え、多くの方々の協力をいただきました。出演者の約三割は外国人留学生で、国籍としては中国、韓国、台湾、インドネシアに渡っています。前回の初演の際にはロシアとルーマニアの方にも加わっていただきましたが、今回は残念ながら欧米圏の方の参加はありませんでした。参加者のなかには、『源氏物語』が好きなために応募したという人も何人かおられ、自分の役どころをよく理解していただいております。またそうでない出演者も、練習の過程で『源氏物語』という、その名前は遍く知られているものの、必ずしもその内容が知られているわけではない作品に強く興味をかき立てられていつたということも少なくなつたようです。

練習に取りかかると、当然ながら科白をこなす能力は日本人と留学生の間で差がありました。総体としての表現力は留学生もまったく負けておらず、多少のアクセントやイントネーションの不自然さを乗り越えて、見る者に強いインパクトを与えてくれる人が少なくありませんでした。ただ逆にいうと、普段非常に日本語が上手いと思つている本学の留学生も、人に聞かせるように正確に発音しようとする、なかなか難しいものであるということもあります。それぞれの言語圏で、独特のアクセント、イントネーションの癖があり、練習の過程でそれを修正していききましたが、彼らにとつても日本語の発話能力を高める良い機会になつたのではないかと思われまふ。ちなみに本学では主専攻語として存在する二十六の言語による「語劇」が毎年大学祭時に上演されていますが、日本人学生にとつ

でも劇の舞台に立つことが、習得している言語のスキルを磨く機会となつていきます。自己の身体を通して、何らかの感情を負荷された言葉を他者に向けて発すること、はじめてその言葉の生命に触れることができます。今回の劇の言葉が、そうした生命に満ちたものであったという確信はありませんが、劇が何よりも言葉を活性化する場であることを、出演者とともに実感しえたことが、この公演での私の収穫であったといえるでしょう。

〔注〕

本稿は二〇一〇年七月十八日におこなわれた劇とシンポジウム「語りと劇による『源氏物語』」（作・演出柴田勝二）の趣旨説明として、シンポジウムで発表されたものである。

正岡子規の恋歌 ノート

村尾 誠一

はじめに

若くして出発した明治期の文学者には珍しく、正岡子規の文学世界には恋に関するものが豊かではない。子規の短歌・和歌の世界においても同様なことが言える。それは、実生活においても恋の形跡が見られないことの反映であり、短い人生を病と闘いながら生き抜いた伝記的事実からは当然とも言える。そうした現実の生を誠実に反映した文学の一つとして短歌があり、それが日本文学にあつての詩歌の近代であつた。

しかしながら、子規の初期の和歌を読むならば、多いとは言えないまでも、恋歌は歌われている。さらには、どのように自覚されていたかはともかくとしても、恋の体験とも言える伝記を反映する作品群もある。このノートでは若き日のそうした歌を考察することを試みたい。

一、和歌から短歌へ

先程から和歌・短歌を適宜言い分けてきたが、子規の三十一文字の歌は、伝統的な和歌から始まり、それを近代の文学とし

ての短歌に変質させて終えている。まさに和歌から短歌へと歌を変質させた張本人の一人が子規であるのは言うまでもない。分かりやすい言説上のメルクマールで言えば、明治三十一年（二八九八）の『歌よみに与ふる書』、とりわけ「再び歌よみに与ふる文」の冒頭¹⁾の

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候

に、力づくで和歌から短歌へと三十一文字を変質させて行こうとする気概を感じることが可能である。

子規が対決しようとした古典的和歌世界は、『古今和歌集』以後の世界であり、『万葉集』はむしろ規範として捉えかえられようとした。『万葉集』の捉え方が、近代の立ち上がる時期の時代的な偏光によるものであるとの指摘もされる²⁾が、ここでは問わない。『古今和歌集』そのものも子規の視点からは批判されるのであるが、むしろ彼の批判の矛先が向うのは、『古今和歌集』をその規範の中心として古典の代表として尊重し、その世界から逸脱することを避け、その世界の中にとどまって歌を作り続けることを行ってきた伝統主義・古典主義的な和歌世界である。

そうした古典主義的な和歌世界は、大きく見るならば中世において確立される。具体的には、中世の始発期に、主として藤原俊成・定家の親子の手により確立された世界であり、それ以後の和歌のあり方を規定した世界であった。その世界は近世をも生き延び、明治に入ってから御所を中心としながら広い範囲で継続していた世界であった。子規の始発期の歌も、基本的にはそうした中世的和歌世界のものであった。子規の近代短歌の立ち上げは、自らの中の和歌から短歌への変貌過程でもあった。子規が自らの初期作品に対して厳しい目をもっていたことは、自筆本『竹乃里歌』のおびただしい墨滅の跡からも実感できよう。

ところで、中世的和歌の特徴は、題詠にある。題による創作は、近代や現代の短歌でも歌会を中心に行われているが、内実においては違いがある。中世和歌において題詠は、出題された題の持つ「本意」に規定される。あらかじめ題毎に詠むべき内容は決まっておき、それは主として十世紀の和歌と物語によって歌われ語られた世界であった。原則としてその世界からはずれることは許されない。歌合のように勝負のかかる場にあつては、世界のずれは「傍題」とされ、厳しい評にさらされる。例えば、恋の題で「待恋」は女性が、通いが間遠になった、あるいはそうなりつつある恋人を待つことであり、男性が待つことは許されない。男性の歌人であってもその世界は詠むのである、実体験や実感よりも、「本意」が尊重されるのである。

中世的和歌の場合、「本意」の制約は、題詠以外にも及び、和歌に詠まれる素材自体が自ずと古典的な詠み方の継承を求めることになる³。子規は最晩年まで題詠の歌は作り続けるし、

始発期の作品が総て題詠であるはずもない。しかし大きく見れば、子規の歌は「本意」に制約される和歌から、それに制約されない短歌への変容だと捉えてもよからう。「本意」の替わりに作品を作り上げる抛となるのが実体験であり、体験と対峙する自我である。すでに言い古された自我史観ではあるが、基本的な図式を引く場合にはいまだ有効であろう。晩年の子規の場合、その実体験は病にかなり特化されるのではあるが、それが作品世界に鮮明な輪郭を与えていることは言うまでもない。

恋歌の場合、実体験の欠如が、晩年の作品では恋歌を生ませないというのは必然であり、「本意」が確としてある恋歌が始発期に見られるのは必然だと言うことにはなるう。このことを前提に、子規における恋歌を考察してみたい。

二、明治十八年の題詠による恋歌

子規の歌集『竹乃里歌』で、恋歌が最初に見られるのは明治十八年（一八八五）である。十九歳の子規は、大学予備門の生徒であり、東京での生活を続けていた。詳細な日時は未詳だが、配列順からすれば秋以降と思われる題詠の作品群の中に、三首の恋歌が並んでいる⁴。

「恋」題の一首は、

見しふみも何ならぬかは恋路には玉章をかくたよりのみにて

であり、恋文以外に手だてのない恋の様が歌われている。変哲

のない内容の作だが、古典和歌として見れば、「ふみ」「玉章」「たより」の手紙を表す言葉が重出し、古い歌学（時に蘇る概念だが）では「同心病」とされても不思議はない。一方、古典和歌では「恋路」に「泥路」を掛けるのは常套であり、「ふみ」には「踏み」の意を掛けて、手紙のみで進展しない恋の焦燥感を、泥道を踏み行く様に含意させている。そこに文学性を認めるとすれば、子規その人と言うよりも古典和歌の蓄積したものの力に拠っている。

「夢恋」は、

うたたねの夢さへものを思はせて憂をかさぬる恋もするかな

で、夜の夢の中までも物思いするのは無論のこと、ごく短いたたねの夢までも物思いをするという、恋のつらさを歌った一首である。「うたたね」は、『古今和歌集』に「うたたねに恋しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき」（恋二・小野小町）とあるのを意識した表現であり⁵、中世的和歌として見れば「本歌」といつてよい。結句の「恋もするかな」という表現は、やはり『古今和歌集』の「ほととぎす鳴くやさつきの菖蒲草あやめも知らぬ恋もするかな」（恋一・詠人不知）に代表されるように恋歌の重要な表現の型である。

以上の二首は、自筆本では題も含めて墨滅されている。一首だけ消されずに残されているのが「祈恋」である。

祈りてもしるしはなしとしりながらもしやと思ふ心やさしな

「祈恋」は古典和歌でも見られる設題で、神仏へ恋の祈願をすることを捉え、多くの場合、それにも関わらず恋が首尾良くいかないことを嘆く。この歌の場合、「もしやと思ふ」という四句目が口語的で注目され、首尾よくはいくまいと思いつながら祈願してしまう女性像を描き出している。必ずしも目新しいとは言えないが、古典の観念の中から印象に残る実在しそうな女性像が描かれていると言えよう。これは子規自身が憧れる女性像とも重なり、恋愛への憧れにも重なるであろう。

この年には、他にも何首か題詠による恋歌が詠まれている。古典との関係で言えば、「忍恋」の

明くれにこひぬ日もし玉の緒のたえねばたえぬ思ひなるらん

のように、明示的に『百人一首』に見られる式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへばしのぶる事の弱りもぞする」の影響が見える作品がある。『百人一首』の作品からの影響は恋歌以外にも見られる。この歌の場合、本来ならば「忍恋」の題は「忍ぶ」気持ちの強さが詠まれるはずだが、むしろ恋情の強さが主題になる所に、若き日の思いの反映はあるであろう。

この年の恋歌で興味深いのは「旅恋」の、

故郷も今は中々すみうしといもやこなたの空をこふらん

である。明治になり「上京」ということが地方の青年に問題となり、子規自身もその体験の最中にあるわけだが、その場合、因習的な地方に恋人を残して上京するという主題が文学上に

も課題となる。ここに子規自身の伝記的な体験を当てはめる必要はないし、できないが、題の「旅」を拡張することであろう。近代的な体験の反映を見ることができよう。

このように、この年の恋の題詠歌を検討してみると、基本的に古典和歌の世界に拠っていることがわかる。若き日の子規の恋への憧れや、当時の若者の抱える恋にまつわる課題が反映していないわけではないが、古典和歌自体がそうした包容力を持ち続けていたのであり、各時代の思いが歌われ続けてきたからこそ連続して来たのである。明治であるから特別にその時代の課題が反映したということではない。さらに、そこに託された個人の思いや歴史の課題が、必ずしも成熟したり切実性を持っているということでもないだろう。

三、明治二十一年「恋」

題詠歌をもう少し見てみよう。考えてみれば明治十九年は子規にとって俳句を作り始めた年であり、文学的成熟ということでも、まだ初期の段階である。明治二十一年になると二十二歳であり、九月には第一高等中学校本科へ進学している。『竹乃里歌』では、この年冒頭にワーズワースの訳詩を置いており、文学的にも様々な体験を積んでいる。和歌では先ず「恋」と題された八首の歌群が目される。

八首の歌群は題詠であるが、「恋」という大きな設題であり、細かい題の設定はない。何らかの歌会で一時に詠まれたものであるか、それとも折々に詠まれた作品を集約したものであるか

も定かではない。また、この年の作品の自筆本への収録は豊かではなく、訳詩の次に「新年」「霞」の題の一首ずつが配され、その次にこの歌群ですべてである。したがって、年内のいつの時点の作であるかも定かではない。しかも、うち七首は墨滅されている。

一首だけ墨滅されていないのは次の歌である。

我こひはあはでの浦のいそによるみるめばかりやあふこともなし

一読して古典的に過ぎることに驚く作品だといえよう。鍵となるのが「あはでの浦」という歌枕だが、元々所在地未詳（常陸とも）の歌枕である。歌枕の多くがそうであるように、土地のイメージよりも地名の面白さに眼目がある。この場合「逢はで」の掛詞がポイントであり、波が「寄る」、海藻の「みるめ」の縁語を想起させ、「みるめ」に「見る目」の掛詞で、他人の目のために会えないのだという状況がただちに含意されてしまう。例えば、古典和歌では『金葉和歌集』恋下・源雅光の「名に立てるあはでの浦の海人だにもみるめはかづく物とこそ聞け」のように古典和歌には多くの類例がある。ここで引いた現代では無名となった歌人に比しても想像力で描き出す世界は必ずしも豊かではなく、結句「あふこともなし」の繰り返しや重畳ではあるが、古典的な手法はよく習得されていると言える。

墨滅された作品にも、

時鳥音になくこゑのもれそめて忍の岡のしのばれもせず

のような、やはり歌枕（「忍の岡」）を鍵とする古典的な色合いの濃厚な作品や、

わが恋は岩にせかゝるたき川のあふかともみれば又別れつつ

のように、明らかな形で『百人一首』の「瀬をはやみ岩にせかかる瀧川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」を下敷きにして、やはり古典的な作品もある。

こうした中にも、

我が恋は真の道にかなはずやむすぶの神もまもらざるらむ

のような作品も見られる。古典的に言えば「真の道」は仏道である。しかし、ここでは広い意味での、明治的な立身出世をも含む倫理であろう。子規のテクストの中で想像を拡げれば、明治二十四年に「法師看花」以下「神主見花」さらに「儒者」「耶穌教信者」「歌人」「哲学者」と続かせる姿勢に「真の道」に近い輪郭を持つであろう。このあたりにかろうじて子規の近代は顔を出さないわけではない。

恋故に世の中を知るといふ思想も、

恋せずは浮世の中はかくまでにつれなきものとしらざらましを

のような作品で示されている。これも近代における「恋」の

人生上の重い位置づけとも関わりそうだが、『百人一首』にも藤原敦忠の「あひみての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり」は容易に浮かぶし、藤原俊成には『長秋詠草』に「恋せずは人の心もなからまし物のあはれもこれよりぞしる」があるのも有名である。

この歌群も、基本的には古典的な伝統の中で歌われた世界の再生産の作品である。近代が顔をのぞかせないわけではないが、古典的手法が子規に恋の歌を詠ませているのである。

四、向島仮寓

明治二十一年の夏には、子規の伝記の中では珍しく女性との恋愛事件が生じる。恋愛と言うにはたわいもないかもしれないが、子規にとっては貴重な体験だと考えてよい。

この夏、七・八・九月の三ヶ月を、子規は隅田川畔の向島で過ごしている。現在も桜餅屋として有名な「長命寺桜餅」、山本の月香楼に仮寓している。この体験は、和歌として残されているが、自筆本『竹乃里歌』には収録されていない。子規自身はその体験を回覧雑誌である『七草集』で様々な文学形式で記録している。具体的には和歌の他、漢文・漢詩・俳句・謡曲・和文である。その中の「女郎花巻」が和歌の巻であり、五七首から成っている。

恋愛事件は、宿としていた月香楼の娘、お陸との噂である。現実にとどのような関係が生じたのかは知る術もないが、友人である大谷是空の回想（『日本』明治三五年九月）に次のように述

べられている⁶。

同じ年の夏君は向島の長命寺境内の桜餅屋の二階に下宿せられた。ところが誰がいひ出したかその家の娘と関係でもあるやうに浮名が立つた。君は正直だけに此事を非常に気にして「七草集」と題する五六十枚もある小説的のものを書いて雪冤を試みられた。

これが具体的な証言となるわけだが、「女郎花巻」でも、

月香楼を去らんとする三日四日前によからぬ噂の聞えしより、
頭の病も何となく重りし心地せらる。されどこゝにとどまらば、
いよいよ癒えがたかるべしと思ひ、一日もはやく都に帰らんと
心を定めける 二首

思ひきやかくまでなれし景色さへ今は恨のたねならむとは

けふをこそかぎりと思へば浅草の鐘のひゞきも哀れなりけり

があり、是空の回想に照合させてもよいであろう。

また、『七草集』には最終的にははずされ回覧されなかつた友人との問答体である「かる萱巻」があり、滞在後半に子規がみまわれる「いたつき」について、恋故のものではないかと友人間で噂されている旨が中心主題となっている。その中には、「そは我身の片恋ひにてもとよりいひいづべきことにもあらず」という注目すべき文言も見られる。

不快な噂の「雪冤」ではあるが、ある意味ではしたたかに「恋」を作品世界形成の資としている。

戯れに画をかきて女の許へつかはすとて

きみならで誰にか見せんおのれだにつたなしと思ふ水荳の跡

は、『古今和歌集』春上・紀貫之の「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる」という古歌を念頭にした一首で、その延長上の世界である。しかし、詞書は女性の実在を明示していて、作中の「きみ」がその「女」を指すことは言うまでもない。自ら拙いと思える画を共有できる関係はそもそも極めて親しい間柄を前提としているよう。無論、この詞書と作品を証にする形で子規の恋愛の事実性は証し得ない。子規の作品世界は、古典和歌を媒介としながら、様々な虚構世界を作り上げてしまう中世和歌的な世界に居る。恋の噂の「雪冤」とは言いながら、作品世界の中での向島体験を、恋の体験をも含む世界に構築しようとした意志は歴然である。

そうした作品世界形成の最も顕著な現れが「寄隅田川名所恋十一首」と題する連作である。題詠であり、歌枕に触発されて、そうした文学制度に則る故にかなり奔放に様々な恋世界を描き出している。

秩父てふ峰より出づる隅田川かぎりしられぬ恋もするかな

にはじまる十一首は、顕らかな実体を持ったような恋の世界を

描出する。この歌は『百人一首』陽成院の「筑波嶺の峰より落つるみな川の恋ぞつもりて淵となりぬる」の歌枕に関わる発想を引き継ぎ、その情熱的な恋情の発露も引き継ぐ。その意味では全く題詠的虚構世界である。

しかし次の、

鐘の音に夢さめはて、浅草や朝の別れのつらくもあるかな

は、より具体的に浅草の対岸である向島の実地に依拠する。鐘は浅草寺の朝の鐘であり、「浅草」には二人で過ごした夢のよくな一夜の「浅さ」さを言い掛けて、朝の別れのつらさへと連なっていく。歌枕的な地名の力に導かれた作られた世界でありながら、地名の臨地性が優に実事存在を想起させてもよい作りとなっている。とはいえ、恋の世界は通い婚を前提とした古典的世界を基盤として歌われている。

続く

吾妻橋こがねの柱くづるとも誓かはらじいもと吾との

は、吾妻橋という命名の由緒はともかくとしても、鋼鉄製の橋であり近代の産物である。「こがねの柱」とその最新技術は詠み込まれている。その景物を鍵として構築される世界は、自ずと今の臨地性を引き出すであろう。相思相愛の深い関係がそこに存在するように想像させる。しかし、一連の作品の中では、やはり古典的な恋愛制度の中に理解される虚構世界となるであろう。

恋の世界は別れに展開する。

うけぬとは知れども祈る三めぐりやめぐりあひたし別れにし君

三囲神社は向島の社だが、「祈恋」の題詠の系譜の作品である。臨地性を持ち、すでに別離してしまったかの内容である。が、次の

あふ時はうれしの森の下露にまた袖ぬらすわかれなりけり

は、別れはやや間遠になりつつも、夜明けの別れにすぎないのかとも思い返させる。「うれしの森」は遊郭のあった花川戸あたりで、今でも浅草小学校付近に嬉の森稲荷がある。むしろそうした地名は、これも伝統的な遊女との恋という内実をも想起させよう。

やや別れに前後がある展開だが、次の

州さきともいへば昔は海ならしかはるは君の心のみかは

は、明確に相手の女性の心変わりを歌う。古典和歌の文脈であれば、「かはる」のは男であることが多いが、女であることも排除はされない。「州さき」は深川の有名な地名ではなく、隅田川畔の砂地のことだろうと思われる。

そうした状況を受けた

我恋は秋葉の杜の下露と消ゆとも人のしるよしもなし

と、古典和歌的には「飽き」の掛詞で、相手に飽きられながらも、恋情を抱き続けたままに、その思いに悩みながら死んだとしても、もう相手に知られる術はないという、通い婚の最後の局面の表現となる。古典的には多くは女性の立場の表現であるが、ここは、男性の側に立つた嘆きだと読んでよいであろう。骨格としては「秋葉」神社の「飽き」に掛けられる「秋葉」に置く「下露」が「消ゆ」という縁語的な発想で組み上げられていて、古典的には言葉によりいわば自動化された発想である。無論秋葉神社は向島に実在する社である。次の

うき名をばたてじといのる白鬚のしらずとのみもいひておかまし

も、「白鬚」という地名に「知ら(ず)」を掛ける。これは、知られる限りでの実事と比較的近い内容が歌われているとも言えよう。一連の連作からはやや異質である。最後まで、

五月雨のなみだもそふやあやせ川あやなく物を思ふころかな

と、隅田川に注ぐ綾瀬川に「あやなく」を導かせ、道理のない思いに悩む姿を詠出する。これも実事に近いが、五月雨という季節は、そこに短絡させることがない思いの様を象徴する(「乱る」を内包する)措辞である。

歌枕に寄せて恋歌を詠むのは、古典和歌の題詠としては常套的な手段であり、それに従った手法でこの連作は詠まれている。恋の在り方も基本的には古典的な通い婚に依拠して、

作品世界の基盤は虚構である。しかし、歌枕として用いた地名は、実際の向島滞在に即したものであり、それに絡めて恋を歌う以上、必然的に噂となった恋愛体験を想像させてしまうであろう。最後の二首は噂に近い内容で詠まれてもいる。若いとはいえ卓越した表現者であった子規にとつて、そうしたメカニズムは承知のはずである。それだけに、向島の「恋」が実事としてどのようなものであるかは想像の域を出ないまでも、貴重な文学的な資産であったことを想像させよう。

河東碧梧桐は『子規を語る』の中で、向島体験について⁷、

異性に対するローマンスというものを余り持たない、持たないというより殆ど絶無であった子規の一生に、このエピソードは砂漠中のオアシスのような恵みを思わせる。

と述べている。見てきたように「をみなへし巻」の形成にはこの体験は大きな意味を持っていた。しかし、その世界は古典和歌の文脈に大きく依拠した世界が基盤であり、近代短歌への離陸との関係は必ずしも明白ではないし、自らの切実な経験としてこの恋愛体験が熟成しているとは言えないであろう。

碧梧桐は

子規の唯一のローマンスも、内的に子規でなければならぬ心理の特殊性を帯びていない。その開展起伏に深みも強みも見出だされなかったとするなら、子規は遂に恋という物を本統に体験しなかったかも知れない。その秘密は私達もまだそれを解く鍵を持たないのである。

と、子規の文学上の問題として、この体験が豊かなものを持たなかつたことを残念がつている。向島の恋歌世界も、それ以前に題詠で詠まれた恋歌から大きな進展がもたらされているとは言えまい。

子規の以後の文学的な達成の中で、この向島体験がどのように生かされているかの測定は容易ではない。短歌の世界のただけに限っても同様である。しかし、碧梧桐の哀惜を打ち消すように恋の体験が活かされた力強い作品世界を読み取り提示することは難しいように思える。

おわりに

最晩年に近い明治三十三年、『竹乃里歌』には「艶麗体」という題で詠まれた十五首の連作が載る。

春の夜の衣桁に掛けし錦欄のぬひの孔雀を照らすともし火

くれなるのとぼり垂れたる窓の内に薔薇の香満ちてひとり寝る

少女

のような作品がその世界を代表するであろう。観念的に過ぎるとは言え、女性の官能性が意識されている。古典和歌の世界でも「艶麗」とされるような概念はそうした世界、一般的には恋により実現される世界に拠って現出されるものとして意識さ

れている。この歌群も、三首の恋を主題とする作品により閉じられる。

山の池の水際におふる篠の群の死ぬとも君に逢はんとぞ思ふ

なゆ竹のとをよる妹が手を巻きてさねしこよひをとほにしぬば
む

あは国のあはなく久にむつの国むつたまあへる君を恋ひにけり

一読して万葉語が目につき、若い時代とは異なる万葉重視時代の作品であることは直ちに知られる。特に二首目は万葉語を散りばめた印象だが、『万葉集』巻二の吉備津采女への挽歌から言葉が摂取されていて、内容もほとんどその長歌の反歌と言っても過言でない内容である。「秋山のしたへる妹 なよ竹のとをよる児らは」の歌い出し、「しきたへの 手枕まきて」などの共寝のイメージなど長歌の重要な要素が言葉とともに取り入れられている。

一首目は「篠の群」が万葉的な言葉、三首目は「むつたまあへる」が万葉語であるが⁸、一首目については「篠」の同音反復（結局ここまでが序詞となる）、三首目については、国名という歌枕の同音反復と、手法の上でも極めて古典的である。二首目も含めて『万葉集』と万葉語の摂取も、古典和歌の範囲でのそれと大きな違いはない。近代的に咀嚼された「万葉」とは言えまい。

無論、端的な形で区分けはできないが、明治三十一年『歌詠

みに与ふる書』を機に子規の歌の世界は古典和歌から近代短歌へと移つて行く。言い旧されながらも妥当性を失わない「自我」が文学の近代を導く指標となることは子規の場合も変わらない。「自我」の発露と近代の恋愛は深い関連を持つはずだが、子規の恋歌の場合、そのようには展開しない。初期の和歌にそうした萌芽も見られなかつたわけではないが、あくまでも、子規の恋歌の世界は古典和歌の世界を基盤とするものであつた。原体験の欠如が、恋歌世界の変革を拒んだというのはかなり単純すぎる理由付けではあるが、終ぞ子規の恋歌は題詠的な世界から脱することはなかつたと考えておいてよいと思われる。「近代」は、すべてに等しく到来するわけではないのである。

注

- 1 正岡子規による本文は、特に断らない限り講談社版『子規全集』による。
- 2 例えば品田悦一『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』（新曜社 二〇〇一年）における議論など。
- 3 このことは季語を考える上でも問題になると思われる。大きな問題であり軽々に議論するわけにはいかないであろう。
- 4 『竹乃里歌』の本文は岩波書店版『竹乃里歌 正岡子規全歌集』（一九五六年）により、適宜自筆本の複製（講談社 一九七六年）を参照する。
- 5 古典和歌の本文は、八代集については岩波新日本古典文学大系の該書により、他は『新編 国歌大観』による。『百人一首』については通行の本文（いわゆるカルタ本文）による。
- 6 『子規全集』別巻二による。
- 7 岩波文庫版（二〇〇二年）による。

8 「篠の群」は岩波版では「シノのノ」とルビを読むが自筆本では「シノのメ」と読めると思われる。「むつたまあへる」は現行訓では「にぎたま あへる」。

付記

本稿は、二〇一一年十二月十一日に行われた総合文化研究所主催のシンポジウム「子規と漱石の近代」におけるパネラー発表をもとにしたものである。

アトピック・サイト

ロラン・バルト著、桑田光平訳
『ロラン・バルト 中国旅行ノート』

筑摩書房 二〇一一年三月

たとえばパリの公共交通機関利用者が日常的に耳にすることとなる語のひとつに *incident technique* という語がある。技術的なトラブルとでもいうべきこの語は、その出現によって前後を分つような途方もない出来事というよりも、むしろ日常的に起こりうるとともに、短時間で修復可能な出来事の響きをそなえている。とはいえ、習慣的に利用する列車のささやかな遅延が、単にこの利用者に心理的な起伏をもたらすばかりでなく、ときに予期せぬ事態との遭遇をもたらすこともあるかもしれないし、実際、ピーター・ハウイットの「スライディング・ドア」(一九九八年)と題された映画は地下鉄に乗りえた場合と乗りえなかつた場合との差異が、その後の人生の展開にどのような波及しうるかという主題のもとに構成されている。

あるいは、この偶発的な出来事によつて、この利用者は日常的に利用する交通機関が通常は支障なく運行しているという事実を初めて発見するかもしれない。そして、『超』日常』と題された著作(一九八九年)の冒頭に置かれた「何にアプローチするか」(初出は一九七三年)で、ジョルジュ・ペレックが新聞は「何もかもを語る、日常をのぞいては」と指摘するように、日常は我々の言説からつねに脱落する。だからこそ、日常

を、あまりに当然のごとく反復され、習慣化されているがゆえに意識されることもない超』日常を問い直し、記述すること。ペレック自身による数多くのこの試みがいくつもの美しいテクストを産出したこと周知のことだし、『家出の道筋』(酒詰治男訳、水声社、二〇一一年)で、その一部を日本語で読むこともできる。

ところで、この偶発事(*incident*)という語の語源的な意味に遡行し、そこに記述行為のひとつの可能性を見出した作家がロラン・バルトに他ならない。バルトは、この語をごく端的に「それは、日々が織りなす織物につけられた、微かですぐに消え去つてしまふあの折り目であり、ほとんど書き留めることのできないもの、記述のゼロ度とでもいえるもの、何かを書くために必要とされるだけのものである」と定義している。生という織物に降りかかる一枚の葉のようなささやかな偶発的な出来事を記述すること、しかも、それがやがて書かれることになるかもしれないぬものへの引金となる潜在性をそなえながらも、その何かの事前には構想される手前で、より正確に言えばその構想不可能性という条件のもとに記述すること、ここにバルトの記述活動を駆動させる倫理があるといえるかもしれない。そして、この偶発事への記述的対応がいわゆる断章という形式に他ならない。

バルトのこの偶発事への視線に注目した美しい書物、『ロラン・バルト、偶発事へのまなざし』(水声社、二〇一一年)の著者、桑田光平氏によつて翻訳された『中国旅行ノート』(ちくま学芸文庫、二〇一一年)は、一九七四年四月十一日から五月四日までのおよそ三週間にわたる中国旅行のさなかに日々書き

留められた記述からなっている。それでは、ここでバルトは何を記述したのだろうか。あるいは、どのような偶発事にバルトは遭遇したのだろうか、あるいは遭遇することに失敗したのだろうか。というのも、「驚き、偶発事、俳句の可能性を妨害し、禁止し、検閲し、無効にする旅行社の役員」の存在によってこの旅行が終始一貫して粹取られていたからだ。だが、この問いの手前で、この中国旅行を取り巻く文脈に若干触れておくことにしよう。

一九七一年に刊行されたマリア・アントニエッタ・マツチオッキの著書、『中国について』に対するフランス共産党からの非難への反撃として、二回にわたる中国特集号を刊行した『テル・ケル』誌のグループに中国旅行への公式の招聘要請が届いたことに今回の中国旅行は端を発している。フィリップ・ソレルスを中心とするこの季刊雑誌が毛沢東主義の中国への関心を増大させていき、また、ある種の幻滅に至る過程に関しては、二十二年間にわたり刊行されたこの雑誌の詳細な歴史を再構成した、阿部静子氏の『「テル・ケル」は何をしたか』（慶応義塾大学出版会、二〇一一年）に譲ることにして、ソレルス、ジュリア・クリステヴァ、マルスラン・プレネといった『テル・ケル』誌の主要参加者、および、その版元に勤務する哲学者のフランソワ・ヴァールとともに、バルトはこの中国旅行に参加したことを指摘しておくことにとどめておこう。そして、文化大革命下の中国において、受け入れ窓口の旅行社が体现する言語体制と同等の言語体制をバルトが見出し、この体制に疲弊する徴候が、この膨大な記述のいたるところに痕跡として刻印されている。

ともあれ、毎日、克明に中国での見聞を記述しつつ——実際、ノートは三冊に及ぶことになる——、他方で、これらの記述の端緒からこのノートは自らの「エクリチュールの挫折」の証明以外にしかかなりえないであろうことをバルトは予測しているし、また滞在一週間後の時点で「エクリチュールの開花」が到来しないことを確認している。その理由は、ごく端的に「偶発事、折り目、突飛なもの」が稀薄であるからに他ならない。この偶発事の欠如——それは反復されるステレオタイプのブロックの増殖に包囲されているからなのだが——はバルトの書く身体に、たえざる偏頭痛、疲労、不眠といった変調をもたらすことになる。それでは、挫折を宿命付けられたかのように開始されたこれらの記述に、たてば、『偶発事』（一九八二年）に収録されたモロッコ旅行の際に記述された断章に対応するような記述を見出すことはできないのだろうか。むしろ、本訳書に収録された小林康夫氏の「そのとき、（彼自身による）バルトは？」が指摘するように、バルト自身こそが、このステレオタイプが支配する空間において「偶発事、折り目、俳句」として存在しているといえるだろうし、バルト自身の身体に日々生じた変調こそが、中国旅行が可能にした偶発事であったとさえいえるだろう。事実、このノートが、取材対象の行使する言語的ブロックを忠実に記述しながらも、同分量とはいわぬまでも少なからぬ部分が天気、食事、健康状態、など自らの身体を直接的に取り巻き、それらに作用力行使する対象の記述に割かれている。

そして、この中国という対象に対して、内部からの視線の獲得によってでもなく、また西欧からの視点によってでもなく、

「やぶにらみの視線」を行使しようとするバルトにとって、欲望の充足を求めるかのように執拗に現地でのスーツ購入を試みるのも、また、きわめて快適な採寸を受けたことも、旅行期間中にこのスーツを自ら受け取ることができなかつたにせよ、「この旅行の最終目標」であるときえ書かれたこのスーツこそが、この「やぶにらみの視線」を体現するものであつたからだ。「今回の旅行が政治的なものだ」という意識など取るに足らないものにするため」のスーツ、それは自らの身体という場に作用する、中国のものでも、西欧のものでもないア・トピックな襞
|| 折り目に他ならない。

(松浦寿夫)

『未知へのフィールドワーク』――

ジリアン・ビア著 鈴木聡訳

ダーウィン以後の文化と科学』

東京外国語大学出版会 二〇〇九年十一月

本書は、ケンブリッジ大学教授ジリアン・ビア (Gillian Beer) に
 よる『Open Fields: Science in Cultural Encounters (Oxford: Oxford
 U.P., 1996)』、本学教授鈴木聡氏による翻訳である。ビアの著書
 は世界的にもイギリス文学の研究者たちに親しまれているが、日
 本では一九九八年に『ダーウィンの衝撃――文学における進化論』
 (原題 Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and
 Nineteenth Century Fiction) が翻訳されているし、科学的言説とし
 てのダーウィニズムはたえず注目されてもいる。日本でもジリアン・
 ビアの名前はすでにそれなりの知名度を獲得しているのかも知れ
 ない。九四年には日本でも丹治愛氏による『神を殺した男――ダ
 ーウィンと世紀末』が出版されており、本翻訳が当初予定された
 通り一九九〇年代後半に出版されていたとすれば、よりタイムリ
 ーな話題になっていたのかも知れないと思うと、いくぶん残念な
 感じがしなくもない。

というのも、九〇年代後半は一般および出版両面における経済
 面その他での受難の時代といってもよく、とくに学術的な図書
 の出版の可能性が危ぶれ、八〇年代から九〇年代初頭まで続いた出
 版と研究の動向がおそらくは様々な要因からある種の断絶を余儀
 なくされた時代だったからである。文芸創作についてもおそらく

同様のことがいえ、確か柄谷行人氏だったかがある文学賞の選評
 で、二〇年間にもなかつたかのように作品が書かれ始めていると
 いうような感想を漏らしておられたことを記憶している。かつて
 ポール・ド・マンの盟友であり、『日本近代文学の起源』の著者、
 日本の数少ない脱構築批評の実践者のひとりであった柄谷氏がそ
 のように述べたとすれば、旧来のリアリズム的・ロマンティシズ
 ム的な文学の制度が回帰し、他の傾向を圧したというように解釈す
 ることができるはずである。

本書を読む際に、日本語での出版を遅らせた原因ともなつたで
 あるう、そうした回帰への願望を念頭に置いてみるといいかも知
 れない。というのも、科学という言葉、そしてダーウィニズムと
 いう言葉が含意するのは主として進歩主義的なイデオロギーとの
 共犯関係であり、科学と呼ばれるものが、通常の科学信仰や、
 現在では古風ともいえる進歩主義の絶対化を暗黙の了解としてい
 る共同体や国家のイデオロギーと共鳴し、起源や体制への回帰願
 望を喚起しがちだからである。

ダーウィニズムに関していえば、丹治氏が上記の著書でダーウ
 インを「神を殺した男」として紹介していることに端的にも示され
 ているように、ダーウィニズムは伝統的なキリスト教的イデオロ
 ギーの真实性を否定し、あらたな歴史的真相を示す実在論的な
 知の二形態とされかねなかつた。一般には現在でもその状況は変わ
 らないのかも知れない。ポストモダンニズムやポストコロニアリズム、
 文化理論など一般が、対抗文化あるいは対抗的言説の集合体と
 して、進歩主義や科学的厳密性、より高い真实性を含意し、し
 ばしばより古典的な学問的厳密さを標榜しうるのと同様である。
 ビアが本書第二章で論じているトマス・ハーディの古典『帰郷』(原

題 *The Return of the Native*）における優越した共同体としてのイングランド同様、科学的理論や新しい理論は真実性において他に勝り、何らかの回帰を肯定する磁場としてもしばしば機能しうるそのことに対する注意喚起とも受け取れる警告が本書には満ち満ちている。

たとえば本書第一章と第二章では、ダーウインの非西欧人にたいする矛盾した態度や身体的反応などが書簡などの引用とともに詳細に検証・議論され、エドワード・サイド以降のイギリス文学研究の方向性を決定づけたいわゆるポストコロニアリズムの観点からダーウインその人とダーウインの著作が再検討される。それ際にしてビアが、本書では「土着民」と翻訳されている“native”という名詞を、西欧対非西欧という常識的な観点からではなく、そのどちらでもない定義不可能な言葉として異化し、あらたな観点から提出していることに注目するべきだろう。

また、ダーウインニズムと一言でいっても、それが何を指し示しているのが明瞭ではないことをあらためて指摘してくれていることも本書の美点だろう。ビアの代表的な著作とされる *Darwin's Plots* も、同様にダーウインの著作のテキストとしての特質に着目し、真実性という根源を見いだしそこに回帰することができない言説の集合体として、『種の起源』などを十九世紀のハーディやデイクンズ、ジョージ・エリオットなどによるリアリズム小説などのフィクションと並列してその特質を記述しようとする試みだった。ダーウインニズムが十九世紀イギリスの芸術における諸言説に大きな影響を与えたことを認知しながらも、ビアは本書でもダーウインの著作が同時代的な他のテキストの起源となつているととらえる視点を自然化することを拒否し、たとえば「波動理論とモダ

ニズム文学の勃興」と題された第十三章においては、リアリズムや心理主義的リアリズムを同一性や真実性のよりどころとするどころか、上記「土着民」と同様に、同一性を持たない「逆説」として記述する。

文学作品におけるリアリズムは逆説にもとづいている。「リアルニズム」という用語は、みずからが近似値であり、補助であることを表明するものである。それは、「他者」を模倣するとともに、それに張り合おうとする試みなのだ(439)。

ビアが根源的であり常識的でもある課題に取り組み、かつ正確な観察を述べている個所は他にも多くみられ、保守・革新といった通常の二項対立的な読解の立場を意識しつつ乗り越えてゆく意思と技量を感じさせる。「人間」と他者、リアリズムにおける主体と他者、形態の同一性と他の形態との関係などが、観察者の「類比(アナロジー)」に発するとダーウイン自身が述べていたことをビアが指摘している箇所(192・193)などは、通常の進歩主義的な科学主義的イデオロギーとダーウインとが共犯関係にあったわけではないことを証だてると同時に、本書もポストモダンやポストコロニアリズムなどと総称される諸言説を特権化する立場に立脚していないことの証左となつている。そうであれば、原著タイトルの *Open Fields* とは、そのように範疇化され決定された同一性と、それにとつての未知の他者とが出会う場ではなく、そうした範疇化を免れた諸言説があらためて出会う可能性を秘めた場を指し示しているに違いない。一九六〇年代後半以降の重要な論点(たとえばミシェル・フーコーが取り上げた両性具有者のアイデンティティについ

ての議論)を踏まえたいうえで、科学と非科学、既知と未知との区分が解体されることによつて、新しい越境的・侵犯的研究の豊かな可能性を呼び込みうることを本書はあらためて教えてくれる。

新しい学の形態が旧来の科学主義や実在論を乗り越えようとした結果生まれた学問の諸範疇が、ダーウィンその人を一例とする知的な主体性の絶対性を肯定しないことなどは指摘するまでもないにしても、それらの学の新しさが古典的テキストや理論を再検討することによつて再確認されるものであることを忘れそうない時などに、是非本書が紐解かれるべきだろう。

大部かつ難解な原著を、テリー・イーグルトンを始めとした多数の御翻訳を出版されている鈴木聡氏による達意の訳文によつて読めることは、読者にとつて大きな幸運であると付け加えておくべきかも知れない。

(加藤雄二)

『ベンヤミン・アンソロジー』

山口裕之編訳

河出書房新社 二〇一一年

ヴァルター・ベンヤミンは、恐らく日本で最もよく知られ、読まれているドイツの著述家の一人ではないだろうか。「批評家」あるいは「思想家」といったイメージのしやすい言葉ではなく、「著述家」といういささか歯切れの悪い肩書を彼に与えたのは他でもない、ベンヤミンほどその全体像をつかみ難い作家も少ないからだ。ゲーテの『親和力』やドイツバロック演劇、ボードレールを論じた文芸批評家であり、現代の翻訳論やメディア論の中で必ずと言ってよいほど引用される思想家でもある。また、優れたエッセイストとして、『ベルリンの幼年時代』のような独特の自伝的テキストも残している。しかも、それらの論文やエッセイのどれもが、単一のジャンルには還元できない複雑な性格を持っている。例えば、ベンヤミンの『親和力』論はゲーテの一作目を論じた二次文献なのか、それともベンヤミン自身の思想を展開した一次テキストなのだろうか。私自身、学生時代に『ドイツ悲劇の根源』を読んで以来、その謎めいた文体も相まって、ベンヤミンのテキストに「とっつきにくい」という印象を持っており、実は今でもこの印象はあまり変わっていない。

本書は、論文及びエッセイ形式で書かれた、ベンヤミンの

比較的短く、かつ重要なテキストを集め、かくも複雑なこの作家のエッセンスを抽出しようと試みている。選ばれたテキストはそれぞれ個別の対象を扱ったものであり、その配列も執筆年代順になっていて、一見したところ本書には「特別な構成はない」ように見える。しかし、訳者自身も指摘しているように、本書に収録されたテキストからはいくつかの共通するテーマが浮かび上がってくる。いわく、「言語」と「メディア」、そしてユダヤ教神学の時間・歴史概念を背景とする「救済の概念」である。訳者は、「これらの主題がベンヤミンの思考のなかで特別な軸を形成するものである以上、このアンソロジーにそれらの軸が表れるのは自明のことかもしれない」と述べ、本書の「内的構成」が各テキストの集合から自然に成立したものであるかのような感じを読者に抱かせる。しかし、実際には、この「内的構成」は訳者の周到なテキスト編集によって生み出されたものである。

すなわち、「救済」のイメージを裏付けとする特異な言語観を展開した初期のエッセイ「言語一般について」を冒頭に置き、このテキストで早くもその端緒が示されたベンヤミン独自の神学的思考の終着点ともいえる最晩年のテキスト「歴史の概念について」を巻末に配することで、ベンヤミンの思想の基軸（それは同時にアンソロジーのテキスト配列を支える縦軸でもあるが）が提示される。そして、両テキストに挟む形で、それぞれ独立したテーマを扱いつつも、その奥底にあの神学的「救済」のモチーフがいわば通奏低音のように鳴り響く八篇のテキストが収録されている。このように考え抜かれたテキスト構成により、さまざまな論点がある問題系に沿ってだんだんとず

らしながら展開させてゆくというベンヤミン特有の思考の形が、彼の全著作活動の根底にも横たわっていることが明らかにされている。本書は、ベンヤミンの思考過程を本全体を通じて体感できるようにしている点で、ベンヤミンの著作に初めて触れる読者でも「手に取りやすい」アンソロジーを編むという訳者の意図が十分に反映された好著であるといえよう。

最後に新訳の意義について一言付け加えておきたい。言うまでもなくベンヤミンの代表作にはすでに複数の日本語訳が存在する。本アンソロジーでは（先行する翻訳との違いを打ち出すと同時に、それらへの批判も込められているのであろうが）、いくつかのキーワードに、これまで日本のベンヤミン読者に親しまれてきた定訳とは異なる訳語を当てている。その最たる例として、複製技術論の中核をなす Aura なる概念に定訳の「アウラ」ではなく「オーラ」という、ある程度は日常的に用いられる（そして現代の日本語ではいささか皮相な使われ方をしている感がなくもない）語を当てていることがあげられる。これについては、ベンヤミンのコアな読者からかなり異議もあるのではないかと思われる。しかし、ベンヤミンの用いている Aura という語は、訳者も解説で指摘しているように、一般的に用いられる語であり、ベンヤミンのテキストにおいても特に（日本語の「アウラ」なる訳語が呼び起こすような）神秘的かつ謎めいた色合いをもたされているわけではない。このように、テキストの内実により沿った新しい訳語を採用することで、本書は、これまでの日本語訳テキストにもすれば見られがちであった、いたずらにベンヤミンを神秘化する傾向を是正できているのではないだろうか。学生時代の読書体験か

ら軽いベンヤミン・アレルギーにかかってしまった私も、新しいベンヤミン像を提示する本アンソロジーに触発され、改めてベンヤミンをまた手に取ってみようかという気にさせられてしまった。

（西岡あかね）

ロベルト・ボラーニョ著、柳原孝敦、松本健二訳
『野生の探偵たち』(上) (下)

白水社 二〇一〇年四月

本書は Roberto Bolaño, *Los detectives salvajes* (Barcelona, 1998) の全訳である。本作品は、一九九八年、スペイン最大の出版社の一つであるアナグラマ社が主催するエラルデ賞を、一九九九年、ラテンアメリカの文芸賞の中でも最も榮譽あるロムロ・ガジェゴス賞を受賞した。また、英訳が出版された二〇〇七年には、ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、ロサンジエルス・タイムズそれぞれの年間推薦書十冊に選ばれた。

作者、ロベルト・ボラーニョ(一九五三―二〇〇三)に対するスペイン語圏での人気は非常に高い。人気が高いということは、新刊が書店のみならず、スーパーマーケットや地下鉄駅前の露天やキオスクにも並ぶということだ。例えば、二千万人がひしめくメキシコ・シテイの雑踏の中に、ボラーニョの本が並んでいる。ノーベル賞を受賞したガルシア・マルケス、バルガス・リヨサなどのラテンアメリカの存命の老舗作家たちが並ぶことは予想がつくのだが、新しい名前を見つけることはなかなか難しい。これほどの人気を獲得する作家が新たに現れたということは、スペイン語圏では久方ぶりの事件ではなかっただろうか。

売り文句には事欠かない本作品が日本語に翻訳され、出版さ

れたこともまた、一つの事件には違いないのだが、その魅力を手短にまとめることは難しい。原著で六百ページ、邦訳で八百ページに及ぶ本作品は、あまりにも長く、説明するためには物語があちこちに飛んでいき、要約するのを拒んでいるかのようだ。おそらく、作者の目論見の一つはそこにある。しかし、ひとまずは、ベストセラーを読んだ気になってもらうのも、本稿の目論見の一つだ。

本作品は三部構成をとっている。この小説にあらずじというものがあるとすれば、この作品の第一部と第三部の展開がその糸を紡いでいるということになる。その箇所は、一九七五年十二月から一九七六年二月の間、主にメキシコ・シテイで、主人公の文学青年、ガルシア・マデーロによって書かれた日記という体裁を取る。文学部志望だったが法学部へと進学させられた、ガルシア・マデーロは、大学の詩作ゼミにこっそり出席する。そこで彼は「はらわたリアリズム」を自称する前衛詩運動に参加し、大学そっちのけで文学青年たちの集う街のカフェに入り浸り、若い女性たちとセックスに明け暮れる。ボヘミアン風の生活になじんだある日、娼婦のルペが、恋人のヒモ男に追われ、友人の金持ちの家へと逃げ込む。詩人仲間のたまり場になっていたその家は、ヒモ男のヤクザ仲間に囲まれ、身動きが取れなくなる。家主でルペの愛人でもある建築家のホアキン・フオントから愛車のインパラを託され、マデーロとルペ、はらわたリアリズムの中心人物であったアルトゥーロ・ベラーノとウリセス・リマの四人は、メキシコ北部のソノラ砂漠へと車を飛ばす。この逃避行には別の目的があった。その目的とは、「はらわたリアリズム」を標榜し、忽然と姿を消した一九二〇年代

の前衛女性詩人、セサレア・ティナヘーロの足跡を辿ることだった。四人は、ソノラ砂漠のある村で、老い込み、普通のメキシコ人女性になつてしまつたかつての詩人を見つける。そこにポン引き男の団が現われ、四人は命を狙われる。銃撃戦の末、ポン引き男と女性詩人が倒れ、四人は逃げおおせる。ベラーノとリマはその罪を背負い、メキシコの砂漠に消える。ここまで把握していれば、大方読了したふりをする事ができる。

詩人が砂漠に消えるとはアルチュール・ランボーを連想させるし、二人の男が消えていくなつて『イージー・ライダー』を匂わせるようだ。もしかするとこれはスペイン語圏アメリカ版の……などと思つてみると、作品の中で二つとも言及されている。ランボーから『イージー・ライダー』に至るまで、時代や場所を問わない表象作品へのカルト的な偏愛からなされるそれらの引用とその脱臼が、この作品の大きな特徴の一つだ。訳者あとがきではその点について十分に指摘されているが、作品に散りばめられた間テクスト的要素が持つ喚起力は、読者が持つている情報量に比例して強いものになるだろう。読者の力量が試される。

間に挟まれた第二部では、砂漠に消えた二人の自称詩人、アルトゥーロ・ベラーノとウリセス・リマに関する五十三名の証言が並べられる。これらは一九七六年から一九九六年に取られたとされ、舞台は一九二〇年代のメキシコ、また、一九七〇年代以降のメキシコ、フランス、スペイン等の新旧両大陸にわたる、それらの挿話は多彩を極める。

舞台はかつて作者のボラーニョが放浪した場所だろうし、登場人物の多くは、彼がかつて見知った人々をモデルとしている

ことだろう。また、作品の端々に、イスパノアメリカで起きた歴史的な事件がうかがいしれる。ボラーニョの周りにもそれらに関係を持った人物たちがいたに違いない。本作品は、間テクスト的な要素と同じくらい、自伝的な挿話が散りばめられた長大な個人的記憶のコラージュとしても読み取れる。

しかし、本作品はただの自伝ではない。書くという行為、あるいは文学という営みへの強烈な意識が、作品の至るところに読み取れるためだ。何よりも、五十三名の人物たちの声を作り上げるといふことは、声に応じた文体を練り上げる行為である。個々の登場人物たちの語り口はいずれもどこか滑稽で、強烈な印象を与える。また、登場人物たちの多くは、文学にたずさわる何者かである。ノーベル賞詩人から創作への野心を燃やす詩人志望の若者たち、昔は文学に没頭していた古本屋の主人や元前衛詩人の代書屋といった人物たちが、二人の詩人のことはさておき、自分たちの人生についてあれこれ語りだす。彼らの創作したものが披露されることはなく、彼らが文学に取り憑かれた人生を過ぎざるを得ないことだけが示される。これをメタ文学と呼ぶにはあまりにも生々しい。青臭いともいえるだろうが、この作品において、文学は、生きることへの情熱を意味している。

登場人物の設定だけではない。訳者あとがきでも触れられているように、本作品の中で、登場人物の語っている事柄は、彼らに見えていたのか、見えていなかったのか判断としないように記述されている箇所が作品の中に散見される。ここでは、物語の物語らしさが危ういものになる。また、ボラーニョの文章には癖がある。「○」による表現を多用するのだ。作品において、

「〇」は、一度言ったことに対する注釈をしたり、言い訳をしたり、文脈とは関係ない思い付きを挿入したりするために使われる。何かを言明すること、断言することを避けるような言語の戦略だ。それは、意味がある地点に着地することを拒もうとする。「見えた」と「見えない」の間を揺れ動く、不安定なビジョンを描き出そうとしたのが、本作品ではないだろうか。

この問題に関連して、筆者が興味を抱いている一つのテーマがある。一九七三年九月十一日に起こった、チリにおけるピノチェトのクーデターとボラーニョの関係である。一昔前は「もう一つの九・一一」を思い起こさせ、近年では「シヨック・ドクトリン」、または新自由主義的経済改革の起源として位置づけられるこの事件は、チリ人の若者であったボラーニョとかかわりを持たずにはいられなかったであろう。作者はかつてこのように紹介されていた。若き日のボラーニョは、家族で移住したメキシコからアジェンデ政権下の社会主義革命に沸き立つチリへと帰っていった。帰国したその直後に米国の支援を受けたピノチェト首班の軍部クーデターが起こり、ボラーニョは、大方の若者と同じように不穏分子扱いをされ強制収容所に収監された。暴力の嵐が予感される中、たまたま看守が高校のクラスメイトだったため、彼は収容所から出ることができ、難を逃れたのだという。本作品の中心人物の一人であるチリ人のアルトゥーロ・ベラーノが経験したと全く同じエピソードだ。しかし近年では、この挿話は作家によって創作されたフィクションだと唱える者もいる。その説によれば、ボラーニョはクーデターの際、チリ国外におり、クーデター後の一連の惨事を体験することがなかったのだという。果たしてボラーニョは

「九・二」に何を見ていたのだろうか。

少なくともこのことは、表象の不可能性というテーマにも繋がっていくだろうし、ボラーニョの文体、創作原理と何らかの関係があることはおそらく間違いない。現実と記憶と虚構の間を行きつ戻りつしながら物語を紡ぐということが、本作品を貫く主題である。

本作品はボラーニョの代表作でもあり、異例の長編作品でもある。また、作品内部には、他の作品へと昇華する断片も散見される。もう一つの長編小説であり、遺作となった2666(2004)は西語圏英語圏いずれにしても非常に評価が高い。筆者が読んだ限りでは *Literatura nazi en América* 『アメリカ大陸におけるナチス文学』(1996)、*Estrella distante* 『はるかなる星』(1996)、*Amuleto* 『おまもり』(1999)、*Nocturno de Chile* 『チリの夜想曲』(2000) はいずれも歴史的にもテーマ的にも興味深い題材を扱っており、ボラーニョの書き手としての異彩が際立っている。今後の紹介が期待される作家だ。

(高際裕哉)

ギヨーム・デュプラ 博多かおる訳
『地球のかたちを哲学する』

西村書店 二〇一〇年

人が最初に「地球」にかたちがあることを、あるいは、もつと正確に言えば、「地球というかたち」を認識するのは、おそらく世界地図においてではないだろうか。そしてその後、地球儀を通して、「地球」が文字通り球体であることを理解する。地図が先か地球儀が先かという順番はこの際どうでもよいだろう。いずれにしても、平面と球体という次元の異なる「地球」のかたちを誰もが幼い頃から持っているのだ。ところが、小学校だか中学校の教科書にはこの「地図」が中立で正確なものではなく、「メルカトル図法」とか「ミラー図法」という名前のついた、ある用途に適したものだということを知る。他にも、「モルワイデ図法」や「グード図法」などがあり、地球は科学の時代にあっても複数の「かたち」をとっている。メルカトル図法は角度の正確さを特徴とし、航海のための正確な方角を得られるようになっていくが、角度の正確さを遵守するため、高緯度になるほど地形は拡大され、原理的に極地は無限大となる。つまり、メルカトル図法では地球は描けないのである。この弱点を克服するために考案されたのがミラー図法のようなのだが、こんどは正角が損なわれる。球体たる地球を正確に再現するには地球儀が必要となるのだが、メルカトル図法が示すように、地球はそれを見る人間の用途にしたがって「歪んだ」形を

与えられてきたのである。逆に言えば、地球の「かたち」からは、その「かたち」を与えた人間の思想や文化といったものが見えてくるのであり、地球の「かたち」はある意味で人間の「かたち」だとも言えるのだ。

ギヨーム・デュプラの『地球のかたちを哲学する』のオリジナルタイトルは地球という語の複数形を考慮して、『さまざまに想像された地球についての本』(Le Livre des Terres imaginées)とでも訳せるだろうか。タイトル通り、この本の中では、時代を問わず、さまざまな民族や学者たちが唱えた地球の「かたち」が——それらはみな、それぞれが実にユニークなものだ——描かれている。平たい円形だったり、横に長い長方形だったり、三角形だったり、八角形だったり……

また、地球の自身は水で詰まっていたり、磁石になっていたり、巨大な火が燃え盛っていたり……

そこには、地球に「かたち」を与えてきた人々の思想や文化の「かたち」があらわれている。そして、その「かたち」は、まず言葉を通して、物語としてあらわれるのである。最初の例を見てみよう。現代(二十世紀)ベナンのフォン族が作りだした地球の「かたち」である。

フォン族の長老たちによると、神様はまず空と海をつくり、それから大地をつくらうとしました。ところが、大地には山や木がたくさんあって、あまりにも重かったのです。そこで神様は、アイダ・ウエドゥという、とつても大きなヘビに「力をかしてくれ」と、たのみました。それ以来、ヘビはとぐるをまいて、背中の上に大地をのせています。(12頁)

著者であるデュプラの素敵な絵が——忘れてはならないが、本書は児童向けの絵本である！——この物語に視覚的な「かたち」を与えている。ヘビは当然、生き物だから、動くはずだし、お腹もすぐだろう、神様や人間が思うようにはじつとじていてくれない。こうして、地球の底にヘビというかたちを与えたフォン族は、そこに新たな物語を書き連ねていくことになる。ヘビがどこにも行かないように赤い猿たちが絶えずヘビに鉄の棒を食事として与えているが、体を動かしてしまえば、地球は揺れて、地震が起ることになる。

なるほどアフリカの民族らしい想像力豊かな微笑ましい「私たち」だね、と思うかもしれないが、科学者だつて負けずおとらずの面白い「かたち」を考えだしている。「ハレー彗星」の発見者エドモンド・ハレーは「地球の中は空洞で、そのなかにもう一つの球が入っている」(54頁)と考え、フランスのアンリ・ゴーチエは同じく地球の中身は空洞と考えたが、地球の外からの力と中からの力が押し合つて凹凸をかたち作りながらもなんとか落ち着いたと考えた。ゴーチエによれば、地球の内側にも外側と凹凸が反対になつた世界があり、そこにも人間は住むことができたのである。しかけ本になつている本書は、時に物語られる地球のかたちを隠し、読む者に地球のかたちを想像させる結構になつている。最後には「現在の地球」として「現在の」科学が導きだした客観的な正しい地球のかたちが提示されているが、そこまでたどり着いた読者は「正しい」ということにいくらか違和感を覚えるのではないだろうか。物語と同様、かたちには「正しい」ものが果たしてあるのだろうか、誰にとつ

てそれは「正しい」のだろうか。かたちは用途によつて、目的によつて変化するのであり、大ヘビに支えられた地球は、ベナの民族からすれば「正しい」かたちなのではないか。そうしたことがふと頭をよぎるだろう。この絵本が教えてくれるのは、実は自己と実在をめぐる、まさに「哲学」的な問いなのではないだろうか。つまり、正しい真の地球のかたちという実在があつて、自己はそれに可能な限り接近するために言葉やかたちという媒体を駆使するのではなく、言葉(＝物語)やかたちはそれ自体、ある特定の目的を果たすために——特定の人々のあいだの理解の共有のために——偶然に生み出されるものではないのだろうか。だとすれば、唯一正しいかたちというのは存在しないことになるだろう。

普段は意識することなどないが、地球がはつきりと目に見えているにもかかわらず、実のところ、見えないものであるという不思議な事実を本書はあらためて認識させてくれる。考えてみれば、地球というのはとても不思議なものだ。タイトルにある「地球」(Terra)という語は「大地」を意味する。そして「大地」は、私たち人間の存在をしっかりと支えてくれ、安心させてくれる人間存在そのものの足場であるが、同時に、その足場はあまりに大きいため、感官のレベルでは捉えることができなない。だからこそ人は生活や慣習に合つた自らの足場を確かなものにしようと、そのかたちを構想してきのだといえる。

本書はボローニャ国際児童図書賞を受賞した児童向けの絵本だが、もちろん大人でも楽しめるものである。むしろ一読して、子供には難しいのではないかと大人の方が感じてしまうほど豊かな内容になつている。しかし、訳者は児童書であること

を十分に意識して、丁寧な訳文を心がけており、内容の難しさが、子供にとつて案外問題にならないほどのレベルにまで達していると思われる。難しいのではないか、というのは、実は大人が勝手に心配することであつて、子供にとつてはしばしば問題にならないことが多いのではないだろうか。自分が暮らしている地球の、直接的には永遠に目にするのではないであろうその「かたち」に子供が興味を持たないわけはなく、本書で提示される様々な地球の「かたち」と物語は、人間と文化は決して普遍的で単一ではなく、さまざまな「かたち」を持つているのだということをお子に教え、場合によつては、子供に自分にとつての地球の「かたち」を思い描くことを許すだろう。その際、プラトンやプロトレマイオスやガリレイや陳子といった固有名は、あのフォン族の大へビ、アイダ・ウエドゥと同じくらい、たいした意味を持たないのである。

(桑田光平)

村尾誠一著

『藤原定家』笠間書院コレクション 日本歌人撰 011

笠間書院 二〇一一年三月

村尾誠一先生の『新古今和歌集』講義を聴講した留学生の一人からこういう話を伺った。「村尾先生による和歌の解説を聞くことは本当に楽しいことです。精神的な欲求が満たされてとても癒されます」と。そう言われてみれば、私にも同様な体験があった。かれこれ十数年も前のことになるのだが、私が受講した先生の中世日本文学に関する一連の授業は、今でも鮮明に深い印象として残っている。『新古今』はもちろんのこと、『徒然草』『方丈記』と、韻文散文に関わらず、その面白く深みのある解説は、その後教師となつて日本文学を教える立場となつた私の講義にも生きているのである。

思うに、例えば文化・文学的に影響と被影響の関係を確認でき、日本古典文学との共通性を多かれ少なかれ持つ、同じ東アジア漢字文化圏に生きる中国人にとつても、日本文学を学ぶ際にもつとも難解と感ずるのは和歌ではなからうか。その中でも特に近づき難いのは、藤原定家が撰者の一人として編纂した、いわゆる八代集の最後を飾る『新古今和歌集』であろう。素朴な『万葉集』と、それから漢詩漢文を宮廷文学とした国風暗黒時代を経て成立した『古今和歌集』に比べ、その三百年後に編纂された『新古今』からは、言語としてその高度な成熟度によつ

て作り上げられた耽美的な文学的空間を薄々と感じ取ることが出来るのだが、あまりにも象徴的で繊細な感性とその華やかな技巧とに惑わされ、歌の意を適切に捉えることがやはり困難である。このことは日本がもつとも独特な文学世界を作り上げることができたということをも意味するのであろうが。

この『新古今和歌集』の、いわゆる新古今調を作り上げたのは、言うまでもなく藤原定家の父、歌学者かつ歌人として当代の歌の世界の大家であつた藤原俊成である。そして、父俊成によつて提起された「幽玄」と「有心」を継承しながら、体言止めなどの巧妙な技法を駆使し、「余情」を響かせる妖艶で哀愁感の漂う歌体を築き上げたのが、藤原定家である。その詠嘆的な調べは、鎌倉武士政権の確立による王朝貴族社会の凋落の挽歌として中世の夕暮れの空に響き渡る。従つて、定家の歌を読み解くことが新古今調を把握するために必須であることは、間違いないのである。

一方、その新古今調は、あたかも爛熟した晩唐の、李商隱、温庭筠による妖艶かつ耽美で朦朧とした詩風を彷彿とさせるところも確かに存在するのだが、ところで、いざ正確に読み解こうとすると、事情が違ってくる。長らく和歌文学の伝統に沈潜し、『新古今』に至るまでの和歌文学の知識を丹念に習得しなければ、いきなりの解説はとても不可能である。日本古典文学を研究する外国人の研究者にはなおさらそうであろう。

だが、村尾誠一先生がお書きになられた『藤原定家』は、この近寄り難い定家という常識をくつがえす。定家の歌五十首を取りあげ、一首に付き、見開き二ページを当て、右から「作品本文」「出典」「現代語訳」「観賞」と続き、さらに「脚注」が

付く。また、著書の終わりにには定家の「略歴」「略年譜」に続き、著者の村尾先生による「解説・藤原定家の文学」「読書案内」、さらに唐木順三による「古京はすでにあれて新都はいまだならず」という定家論のエッセイも収める。凝った工夫の丁寧な定家鑑賞の一冊となっている。

本書の「解説」にも述べられているように、定家の歌は、当時でも「新儀非抛達磨歌」というレッテルを貼られ、伝統から逸脱した難解さのために非難されている。だが、さすがに長年中世文学、特に定家研究に力を込めて研究成果を築き上げられてきた著者ならではの仕事だ。現代語訳もそうだが、解読観賞文のわかり易さからみれば、著者の長期に渡る現場教育のご経験も活かされているように思われる。初心者にとつて非常に有りがたい平易な内容に止まらず、より深く読むための作歌の背景説明と先行研究への指示もたつぷりと用意されている。実に見事というのが、この本を拝読したあとの私の率直な感想である。

例として定家の名歌、『新古今和歌集』に載る、かの「三夕の歌」として知られる「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」についての評釈の一部を挙げよう。出典は『新古今和歌集』で、『源氏物語』の明石巻との関連などを確認したうえで、「この歌の場合、さらに中世的な美意識を代表する歌としても捉えることが多い。すなわち、華麗な物を一切そぎ落とし、た世界の美しさであり、侘茶などにもつながらる世界とされる。茶道の古典である『南方録』にも、この歌は茶の湯の美意識を代表するものとして引かれている」と一般論を紹介しながら、この歌の世界は「全く最初から何も華やかな物のない風景を考

えるのではなく、一度読まれた花や紅葉の華麗な印象は打ち消されながらも残るといふ、残像効果を前提とした美の複雑なあり方を考えるのが普通である」と研究史を踏まえながら読者を深読みへとみちびく。そして、「それをいち早く表現し得た作品がこれであり、若い天才の手柄として考えるのである」と定家を高く評価する。確かに、この歌を作った当時の定家の若干二十五歳という若さを考えれば、凄く天才としか言いようがない。

また、例えば「夕暮はいづれの雲のなごり」とて花橋に風のふくらん」と『新古今』『夏歌』に載る定家のこの一首について、橋の香は昔の人を思い起こさせる『古今集』以来の恋歌の伝統であると説明し、夕べの雲は漢籍である『文選』の「高唐賦」に出てくる、雲に化身し巫山で王と一夜を共にした美女のイメージとも重なる解説。さらに、「雲のなごり」という歌語に焦点を当て、「故人のなごりとしての、火葬の煙の果てを想像する」として、『源氏物語』『夕顔巻』の「見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな」を、殆どその本歌と見なし脚注に参考歌として挙げる。その上に、本歌取りなどの技法を駆使した定家の創作方法論について、「古歌を自分の作品に引用し、その引用された作品の上に立ちながら、自らの作品世界を展開させて行く」（「解説」という定家の「古典主義」を紹介されている）。

定家の「古典主義」について付言すれば、本書は「解説」において、中世において和歌に迫られた改革という問題に関して和歌史的な説明を行っている。万葉集にさかのぼる蓄積と、あまりにも多くの作品が読まれてきたために定型がすでに出来

上がつてしまつていた和歌が新たな秀歌を生む環境的な難しさを指摘した上で、その環境に置かれた当時の歌人の困惑と、幕府の政治的な優位の確立とともに不安定へと余儀なくされた貴族生活の中で、定家は再出発を図るために「寛平以往」の六歌仙時代の「破格な面」「野性味」に新生の力を求めたと解説されている。著書の最後に付録として載せられている唐木順三のエッセイにおいて、定家の歌風の確立はさらに「現実生活との断絶の上に始めて成立する」という論が紹介される。

私としては、本著を拝読し、触発されたことは、やはり定家の決め手と言える本歌取りという技法である。本歌取りの試行は、確かに古今集以来のことであるが、漢詩の「典故」技法と異曲同工の趣があるように思われる。この技法は、古きと新しきとのイメージの重なり合いにより、限られた短い詩歌の世界を膨らませ、より内容の豊かな感情の表出に貢献したのみならず、失われた古き良き昔へと戻る「懐古」の装置でもあったのであり、そこに王朝貴族社会への望郷の念を読むこともできるであろう。

(黄少光)

『村上春樹と夏目漱石』

柴田勝二著

二人の国民作家が描いた「日本」

祥伝社新書 二〇一一年七月

日本で生まれ育ち、一定の教育を受けた者の中で「夏目漱石」の名を知らないものはおそらく存在しないだろう。そして日本国内のみならず、日本文化に興味がある世界中の人の中で「村上春樹」という名を聞いたことがない人もあまりいないだろう。「夏目漱石」と「村上春樹」というタイトルを彩った二人の名前は、近現代日本文学史を彩った数多くの作家の中で、近代の始まりと戦後という二つの区切りを設け、それぞれの時代を代表する作家を一人ずつ取り上げようとするとき最初に思い浮かんでくる二人と言っても過言ではないはずだ。そしてその背景には、それぞれが自ら生きていた日本という〈現在〉を、当然終結した形ではなく現在進行形としてその時代の中で捉えようと試みていた、という共通点が存在するという着想が本書の基調を成している。

このような着想は、著者の講演などでその肉声を通して聞く機会も少なからずあり、著者を知る人には親しみのある内容であるが、著者本人があとがきで語っているように、漱石と春樹を一冊に纏め上げて論じた著書は意外にも本書が初めてである。そして、その執筆の方向が著者のかつて漱石や春樹を取り上げて書いたものとは大きく異なるのにまず注目せざるを得

ない。

私が著者の本に接したのは今回が初めてではなく、『漱石のなかの〈帝国〉』（翰林書房）や『中上健次と村上春樹』（東京外国語大学出版会）などで慣れ親しんでいるはずであったが、まずページを開いて数行読んでいくうち、本書のあまりにも易しく書かれた文体を目にし、驚かざるを得なかったのだ。今までの著者のほかの著書は徹底した研究書籍であり、その読者層がほぼ日本文学研究者や近代文学に深い知識を持つものに限定されるものであった。それに対して、本書は漱石や春樹が、小説という一般にもっとも親しまれやすい形を通して彼らが見た日本像を描き出している如く、新書の性格を最大限に活用させて漱石や春樹の文学観を説明しているのが印象的であった。パソコンやケータイ文学の発達で本をあまり読まなくなつた現代の読者において、漱石や春樹はその名前こそ知らない人はいないにしても、実際の作品においてはどれほど幅広く読まれているか、また作品に内在されている真意は伝わっているか疑わしい側面があると思われる。本書は漱石と春樹の文学観に結びつく作品を取り上げる際において、核心をきちんと押さえながらも決して延々と伸ばされることのない方法で読者に漱石や春樹の作品のイメージを伝えようと努めている。そして読者がつかみ始めた物語の全体像を基に、その世界の根底を貫いている二作家の世界観を説明し、たとえ実際漱石や春樹の作品を読んだことはないが、二人の世界についても内容が理解できるように細心の配慮が配られていることが特徴的である。

しかし、一般に読まれやすい形式で書かれていることが必ず

しも〈一般論〉的観点から書かれていることを意味することではない。著者が明かしている如く、漱石文学については「近代的自我」の探求という主体性を重視する論調が普通であり、春樹の世界観は社会に背を向けた個人の姿というところに焦点が当てられることが多いが、本書はそういった作法が使われているのは「日本」の姿を「描くための方法的な主題性である」とはつきり方向性を示し、その示された方向から足を踏み外すことなく二人の国民作家の世界観を解説している。

本書の企図が既存の著書の「エッセンス的な部分の抽出」と「両者を結ぶものを浮かび上がらせ」という著者の話通り、漱石や春樹に対する全体的な論説は「漱石のなかの〈帝国〉」や『中上健次と村上春樹』でのそれから大きく変わるものはない。しかし、本書の特に注目すべき点は、春樹の最新刊である『IQ84』を取り上げているところにある。

漱石や春樹の描いた「日本」を把握していく過程で、まだ発売されて間もない『IQ84』をあえて取り上げた理由は何だろうか。新書というジャンル上、春樹の最新刊に対する一般読者の興味への配慮とも読み取れる側面もあるかもしれないし、『IQ84』を執筆する際に当たって影響を及ぼしたと思われる父の死、そしてそれを反映してかその描かれた世界から「時代や歴史に関する批評性」が希薄になつてきていることによる、春樹の「国民作家」からの離脱を懸念する著者の気持ちから『IQ84』を取り上げているかもしれない。

面白いのは、この『IQ84』を語るという試みが、著者が指摘している漱石や春樹の〈自分が所属した時代の流れを捉える作家〉としての特徴と類似しているものであるという側面

だ。村上春樹とその小説世界というものは、今進行中であるひとつの〈時代〉に例えられるものとも言えよう。そして本書に取り上げられた『IQ84』自体がBOOK3で話の結末がついたかのように思われる側面があるものの、一月―三月が不在しているままであることや未解決な謎が相変わらず存在しているところから、〈未完結〉な、〈現在進行形〉のものである可能性が十分考えられる。著者がこの事実に気づいていないはずはもちろんないのであり、それにもかかわらずこの進行中である春樹の『IQ84』という〈時代〉をあえて取り上げ、そこで覗かせている変質の可能性を、漱石が日露戦争以降目まぐるしく変わっていく「日本」という近代国家に向けた眼差しのように、また春樹が六十一―七十年代という激変の時代をその時代の中で眺めようとしたように、著者は捉えようとしているのである。そしてこの側面こそ、著者の既存の著書とは異なる本書の持つ大きなポイントであり、価値であると言えよう。

(朴翰彬)

プラープダー・ユン著、宇戸清治訳

『パンダ』

東京外国語大学出版社 二〇一二年四月

近くて近かったタイ

多くの日本人が、日本とタイとの関わりがこれほど深いと知ることができたのは、まったくもって今回のタイの洪水ゆえである（ちなみに隣接するカンボジアも甚大な洪水被害が出た）。日本人が日常生活でお世話になっていいるさまざまな工業製品や食品が日本の市場に回らなくなるであろうことが日本全国で報道された。最近の統計によると、観光にタイを訪れる日本人は年間百万人、タイに住む日本人は五万人近く、タイに進出している日系企業は千三百社を超えている。もうそろそろこのあたりで、私たち「知識人」は、あるいは「研究者」は、あるいは「文学者」は、タイの最新の文学作品について目を向けてもいいんじゃないだろうか。

とはいうものの、多くの「知識人」は、山のようにあるタイ文学の作品のどれが最も適当なのかわからないし、もちろんインド系文字のタイ語は読めない（ついにながらタイ文字はカンボジア文字をもとにして作ったものだが、カンボジア文字とは似て異なるもので、筆者は読み書きもできない）。

となれば、ここはもう日本におけるタイ文学研究の第一人者である本学の宇戸清治氏におすがりするしかない。タイムリー

なことに、宇戸氏お勧めの本は、本学の出版会から「アジア文学の新たな息吹を伝える新シリーズ〈物語の島アジア〉第一弾！」と題して出された『パンダ』なのである。

ところで『翻訳家列伝一〇一』（小谷野敦編著、二〇〇九年）という本がある。著者による序文によると、これは「近代日本の翻訳家列伝」であり、「良い翻訳家、ないしは世間的に知られた翻訳家」を一〇一人集めたものだという。物故者、点数の多い人を優先してあり、外大関係者がぞろぞろ出てくる（当然、本学学長も顔写真入り見開きで載っており、扱いは二葉亭四迷と同じ。「なかなかの『政治家』らしい」とコメントされている）。

内容は「1 明治・大正期の翻訳家」（16頁）、「2 フランス文学の翻訳家」（36頁）、「3 ロシヤ文学」（30頁）、「4 英文学の翻訳家」（54頁）、「5 ドイツ文学の翻訳家」（20頁）、「6 シナ文学」（18頁）、「7 推理・SF小説の翻訳家」（30頁）、「8 児童文学の翻訳家」（28頁）、「9 『その他の言語』の翻訳家」（20頁）となっている。

注目するのはもちろんこの最終章である。概説によると、ここにはいる「その他の言語」というのは、スペイン語（本書ではイスパニア語）、アラビア語、ギリシア語、ラテン語、イタリア語、ノルウェー語、スウェーデン語、ハンガリー語、チェコ語、ルーマニア語、ブルガリア語、トルコ語、インドネシア語、タイ語、ビルマ語、ベトナム語、インドネシア語である。それらの言語の翻訳者として名前が挙がっている本学の教員は、宇戸氏ただ一人である。著者はとくに東南アジアの翻訳作品は「売れないであろうことは想像に難くない。あるいは、政治的な文学の翻訳が多いようだ」と書いているが、残念ながら『パンダ』

にはあてはまらない。

ポストモダン文学『パンダ』

ではここで『パンダ』の内容を紹介しよう。といつても帯を見てもらうのが一番だ。「キミの生まれ星はどこ？ 地球に生まれ落ちたのは間違いだった。ある日突然そう悟った主人公が、みずからの故郷の星を探して帰還をめざす。タイのポストモダン文学の旗手による、現代社会への鋭い風刺の精神と、人間への愛と寛容にあふれた新世紀の物語」なのである。すでに多数の書評や紹介記事がメディアに出ているし、『パンダ』の著者とも親交が深い四方田犬彦氏が五千二百字にもわたって「古代ギリシャやローマの文人」にはじまる解説を書いておられ、宇戸氏自身もタイ現代文学の概説と最新の文学シーンの状況について九千字近いあとがきを書いておられる。だからこれ以上、筆者がどうこう書くまでもなく、すぐさま『パンダ』に突入するのが賢明だ。

それで、さつきから連呼しているタイトルの「パンダ」だが、主人公「ボク」の愛称である。R指定ビデオ（男性専用と言い換え可能）制作会社で、「シナリオを打ち込む仕事」をしている「ボク」は、「丸々太った二七歳のデブ」で「寝不足のせいでもいつも目の周りに濃いクマができやすいタチ」なので、このような愛称になつていたのである。

次に抱腹絶倒間違いなしの表現をいくつか紹介しよう。「ボク」の妹がいつもきくヒップホップは、「わが家に遅しい大男

の黒人がぎゅうぎゅう詰めになり、みなで寄つてたかつて家を壊そうとドスンドスンと床を踏みつけている」ように大音響だし、暑がりの「ボク」に向かつて社長が「お前は どうしてクマのオイスターソース炒めみたいに汗まみれなんだ」と言つたり、はたまた女優選考のためにナイスバディの女性たちの集まった様子を「一階の小さな接客室はすでにおっぱいでむせかえつていた。ボクはかつてこれほどたくさんのおっぱいによつて呼吸用の空気が奪われていると感じさせる部屋に入ったことはなかった」などなど。

こんな想定外ばかりの舞台設定なのだが、「ボク」の語る一言一言は味わい深い。「ボクたちは興味のあるものか、変わったものしか見ようとしなない」「同じ星から来ていない人間の行く末に誰が興味を持つだろう」「多くの大人たちは、若者は国の未来であり、安心して暮らせる社会をこれらつぶらな瞳の子どもたちに残さねばとよく言う。しかし、実際はそれとはまったく違う。ボクが思うに、彼ら大人たちは、本当は何の関心も持つてはいない。キミたちもやはり興味がない。ボクだつて同じだ。人間はみんな、今現在の自分にしか関心はない」「人類一人ひとりの究極の目的は、自身が本当に生まれるべきだったプラネットを探すことであり、それを知つたうえで、自分の星へきちんと帰れる方法を一生懸命に考えることなのだ」どれも『星の王子さま』並みに世界中で受け入れられそうな言葉ばかりだ。

バンコクに拠点を置くアーティスト

英語で紹介される著者プラープダー・ユンのプロフィールは、writer, novelist, artist, graphic designer, magazine editor, screenwriterであり、カタカナ以外の日本語にしてよさそうなのは、一番最初の作家、ぐらいだろうか（ちなみにプラープダー氏は宇戸氏のことを a great karaoke singer と自身のブログに書いている）。浅野忠信が主演した『地球で最後のふたり』（二〇〇三年）、『インビジブル・ウェーブ』（二〇〇六年）の脚本も手掛け、さらに『ロリータ』『時計じかけのオレンジ』『ライ麦畑でつかまえて』を翻訳、また音楽、キュレーション的な活動もしている。最近では京都の創作プラットフォーム SANDWICH に滞在し、アートプロジェクトに参加している。タイ人の、とかタイ出身の、ではなく「バンコクに拠点を置くタイの小説家・アーティスト」なのである（ちなみに一部のファンの間では「プラープダー王子」と呼ばれるほどのルックスの持ち主で、最近はその磨きがかかり修道僧のような雰囲気を出している）。

一方、宇戸氏は、プラープダー氏の『鏡の中を数える』の翻訳者として答えたインタビューにおいて、自らの翻訳手法を以下のように述べている。

僕の翻訳手法はこれまで日本で訳されてきたタイ文学とは決定的に違う方法をとっています。それは、文意を補う必要のある箇所以外は、できるだけ注釈をつけないということ。過去に翻訳されたタイ文学には「注」が多すぎるんですよ。他の国の文学にはなくても、東南アジア文学となるとなぜか「注」が多かつ

た。

おかげで『パンダ』はすつきり読めるし、文学の本質に迫れる。プラープダー氏の作品は宇戸氏が日本語に翻訳するからこそ生きてくるのだ。

（岡田知子）

2010 年度

シンポジウム

「言葉・身体・空間」7月18日
坂手洋二（劇作家）、柴田勝二、谷川道子、柳原孝敦

「世界文学としての村上春樹」12月11日
都甲幸治氏（早稲田大学准教授）、藤井省三氏（東京大学教授）、
加藤雄二、亀山郁夫、柴田勝二、村尾誠一

総合文化研究所共催講演会

「ホロコースト文学表象の未来：第二、第三世代のユダヤ系ア
メリカ小説家たち」5月20日
Alan L. Beger（フロリダアトランティック大学教授）

「たゆたう国々」11月4日
山崎佳代子（詩人、翻訳家、ペオグラード大学文学教授）

公演

「語りと劇による『源氏物語』7月18日
柴田勝二（脚本）、外大生有志

2011 年度

総合文化研究所共催講演会

「『空白』をつなぐ旅～記憶の彼方、コトバの行方」7月7日
姜信子（作家）

劇とシンポジウム 12月11日

劇「子規 六尺の天地」柴田勝二氏（脚本・演出）
シンポジウム「子規と漱石の近代」
関川夏央（作家）、牧村健一郎（朝日新聞記者・文芸評論家）
柴田勝二、橋本雄一、村尾誠一

連続文化講演会「交通する言葉と文化」

「ゆらぐ肖像、ざわめく言語——日本植民地期の大連に中国語
新聞の広告を観察する」2012年1月19日
橋本雄一

「額のX——スペインでメキシコを考えるアルフォンソ・レイ
ェス」2012年1月26日
柳原孝敦

「ブルースとジャズ」2012年1月31日
加藤雄二、類家心平（ジャズトランペッター）

「韓国から見た日本文学」2012年2月9日
朴裕河（韓国世宗大学教授）

前号で柴田勝二氏のお名前の英語表記に誤りが
ありましたので、お詫びして訂正いたします。

編集後記

本来であれば昨年度末に刊行されるべきであった本誌十四号が、残念ながら諸般の事情で刊行できず、今回、十四、十五合併号というかたちでの刊行とならざるをえなかったことを、なによりも編集責任者として、読者の方々ならびに研究所員の先生方に深くお詫び申し上げます。また、今号の刊行に際しても、本研究所所長の柴田勝二先生の主導のもとで、教務補佐の大学院生の方々のご尽力に全面的に支えられ、十分な貢献をなしえなかった点もまた、ここで改めてお詫び申し上げておきたい。

言語とその空間表象との関連を検討するという与えられた主題は、多くの事例を喚起し、思考を様々な局面に誘導しえるものだが、ここではごくささやかな記述にとどめておくことにしよう。たとえばあるひとつの語が書かれ、それに続くもうひとつの語が選択された場面を想起してみよう。たとえば、四月という主語に続く「残酷な季節」という語群のように。この二つの語の連鎖を読むという行為は、これらの語の間隙に折り込まれ、畳み込まれた無数の小さな思考の折り目をその潜在性において開いてみることを要請せざるをえない。そのとき、これら二語の語群の explanation とはこの小さな間隙を、限界なき砂漠状の広がりへと押し広げる行為以外のなにものでもなく、読者は彷徨を余儀なくされるのだから、ここにも空間的な暗喩の体系への扉は開かれているかもしれない。

個人的な回想になるが、かつて多くの教室で、講読ないし訳読という授業形態が支配的に採用されていたように思う。ところがこの種の授業の弊害が喧伝され、徐々に駆逐される傾向が顕在化するこの時代に、新たに講読という形式を採用してみたいという誘惑に強く駆られている。というのも、明快な命題として、いくつもの情報を連鎖的に提示していく作業以上に、無数の折り目をひとつひとつ広げていくような徒労と疲弊に隣接した作業こそが、我々の思考に彷徨すべき未知の広大な領野の所在を教えられるように思えてならないからだ。

（松浦寿夫）

Trans-Cultural Studies No.14-15
総合文化研究 第 14-15 合併号

2012 年 3 月 25 日発行

責任編集 松浦寿夫

編集スタッフ 石井沙和 顧姍姍
朴翰彬 古川哲
武文 陸嬋

発行 東京外国語大学 総合文化研究所

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

電話 042-330-5409

Fax 042-330-5410

Web <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ics/>

e-mail ics@tufs.ac.jp

印刷 三鈴印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町二丁目 32 番地 1

vol. **14-15** 2010-2011

総合文化研究
Trans-Cultural Studies



Tokyo University of Foreign Studies
Institute of Transcultural Studies

